



ねじまき	P4-
きよし	P6-
Namsai	P12-
木出広親	P17
レン	P18-
棟元	P22-
TELA	P27
かんぎしゃ	P28-
ミチエル・アレ句産	P32-
Zapor	P40-
紅壺	P45
Sig	P46-
CroissaintX	P55-
あお	P59-
むむむ	P62-
赤キギリ	P64-
莉雀	P72-
ぼらぼあ	P80-
つたのは	P91
Shyguy9	P92-
幽体	P102-
ミント	P114-
狐虎ぬえ	P141-
神紅霊愛	P153-
Azlight	P166-
闇勇者ダークシェラ	P174-

口の中へい案内♥

ボンワバニーちゃんの
勝ちっ♡

お姉さんの勝ちっ!!
負けちゃったね♥

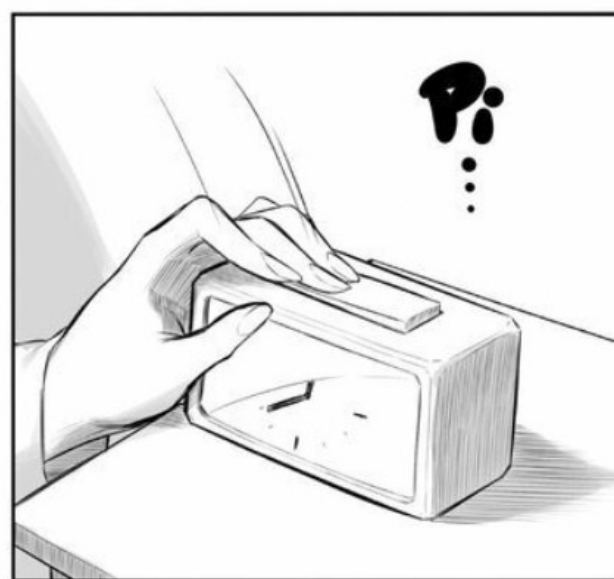
むちっ♡
むち♡

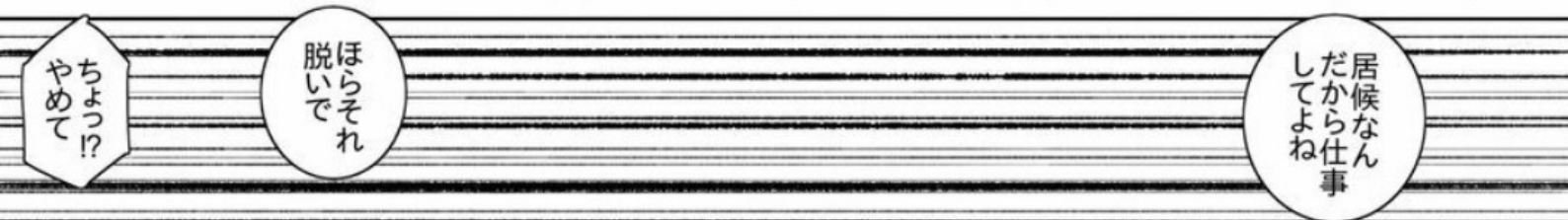
むち♡

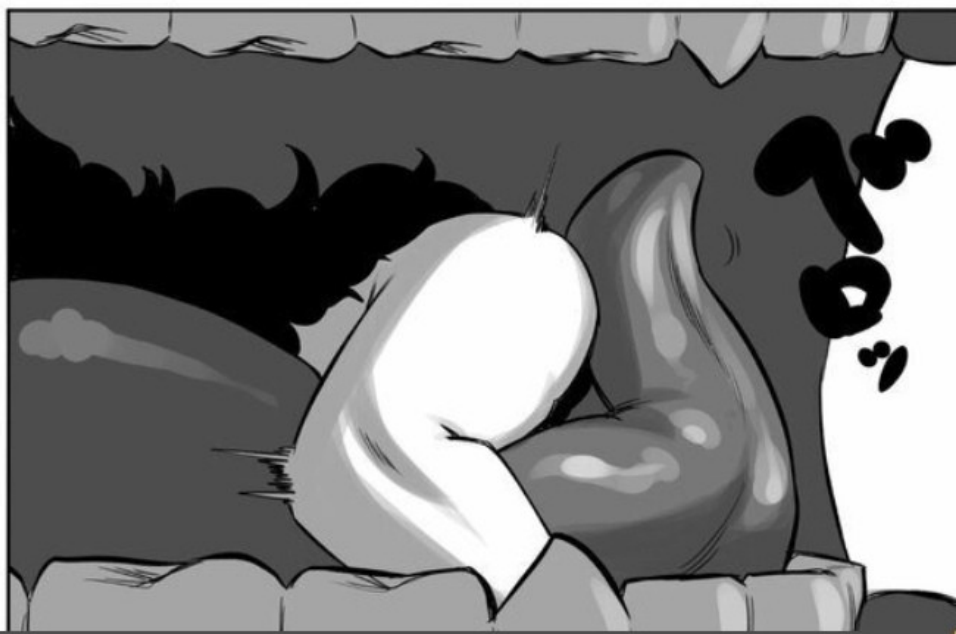
とっ♡
むっ♡

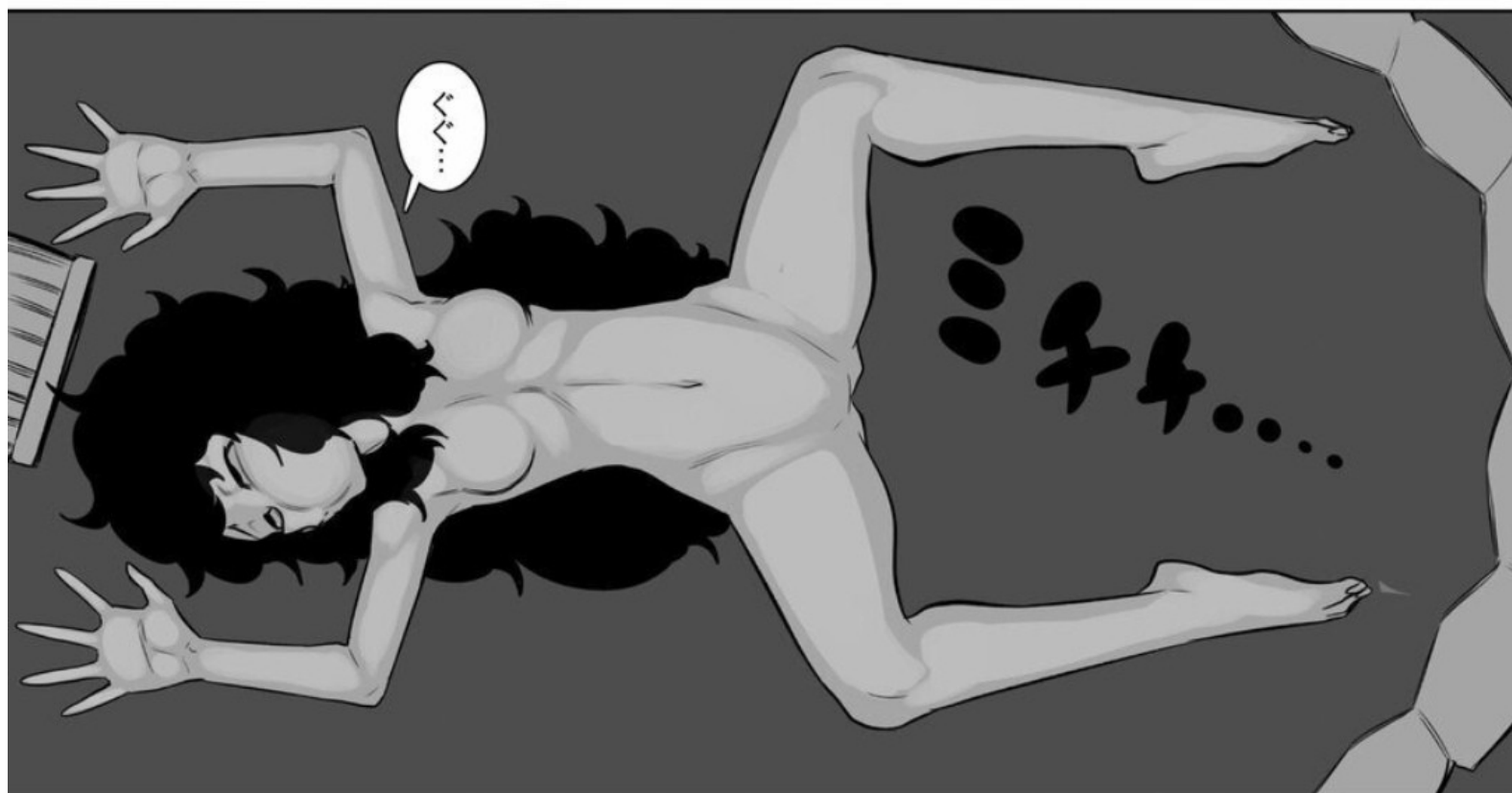
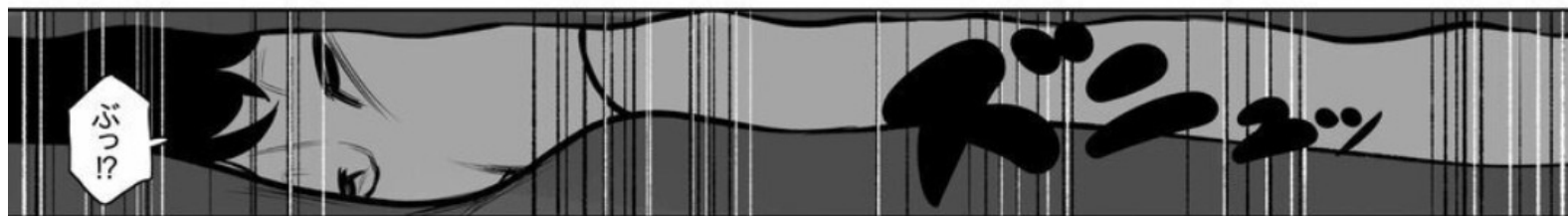
むっ♡
むっ♡

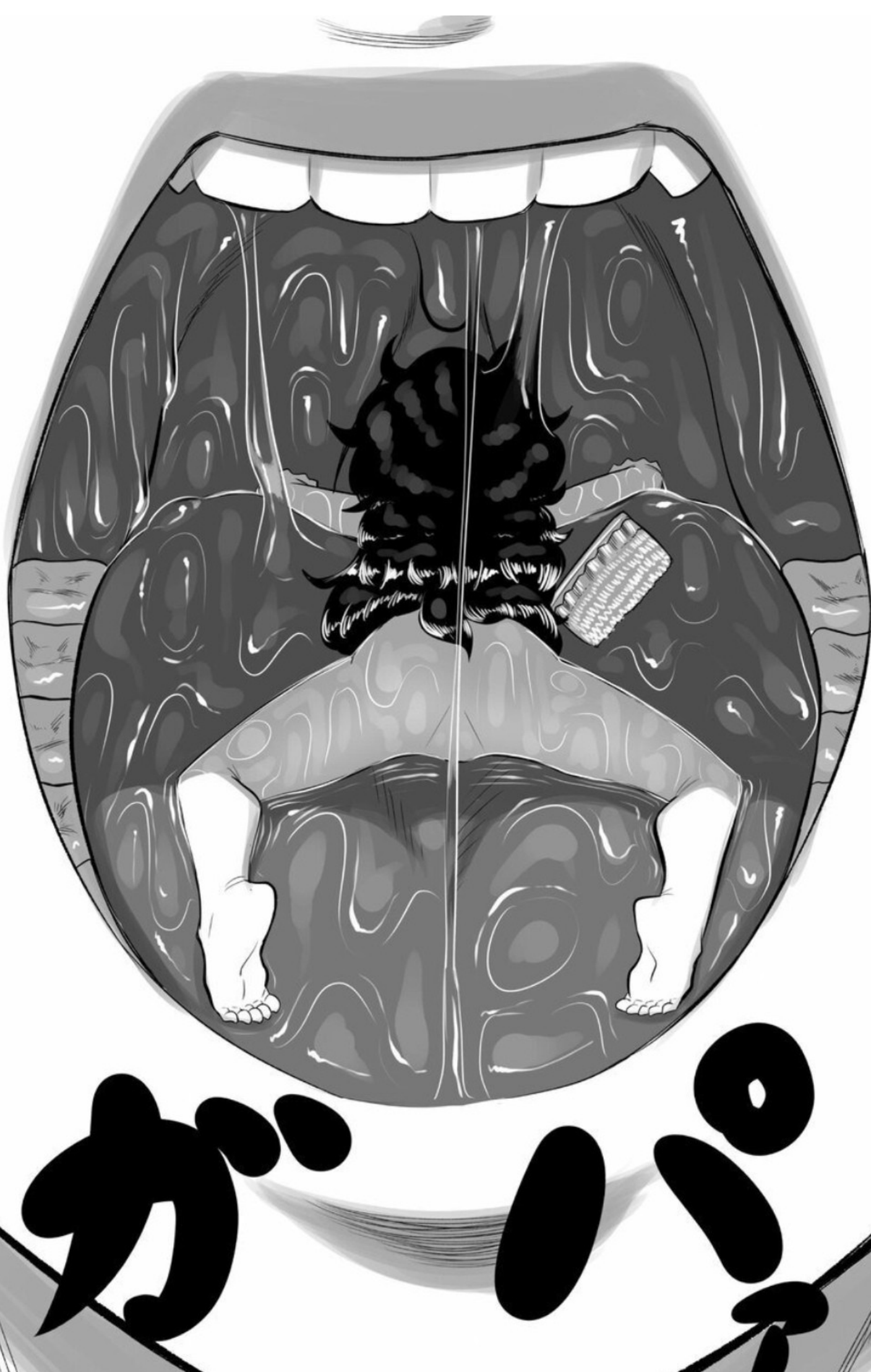


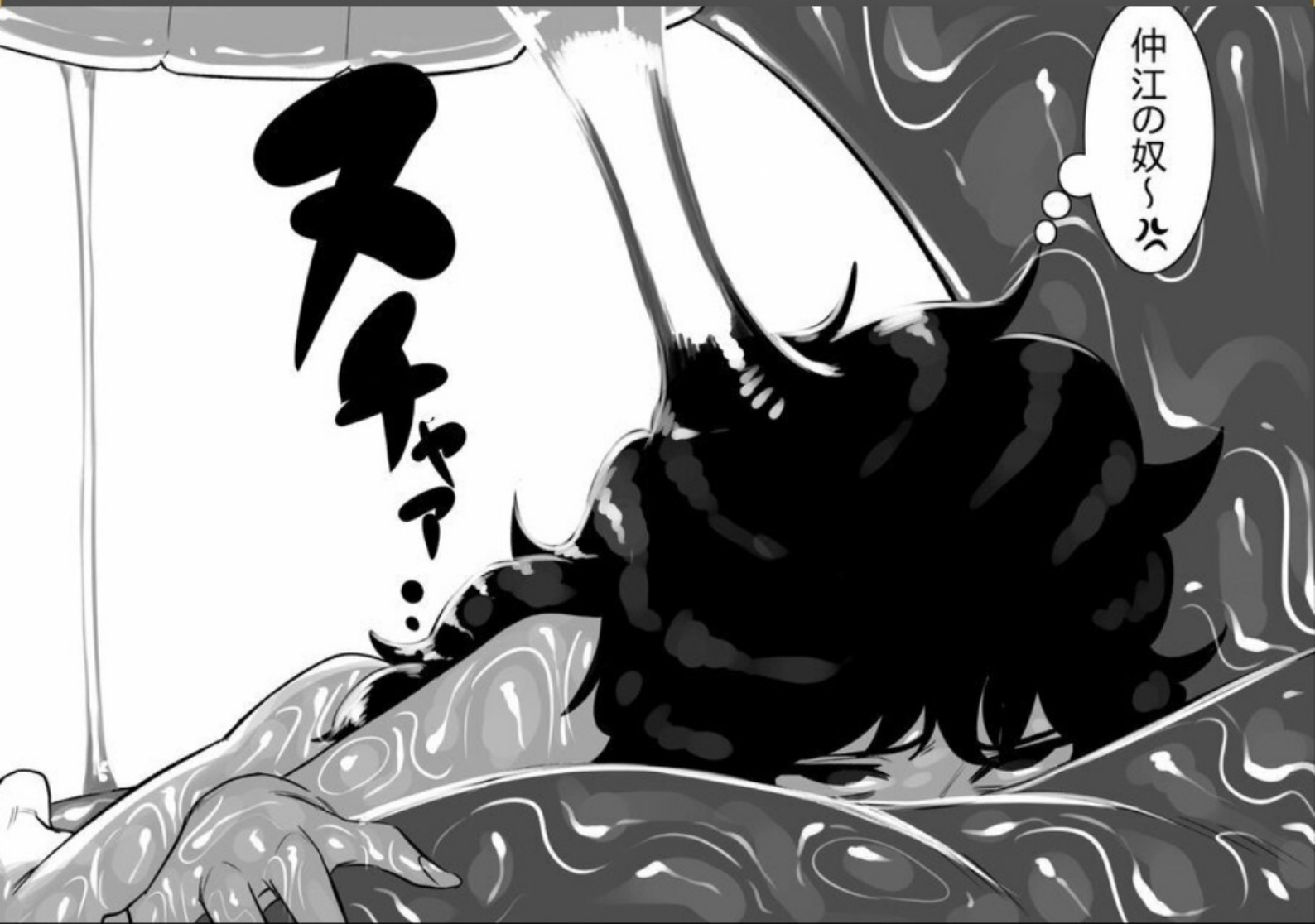










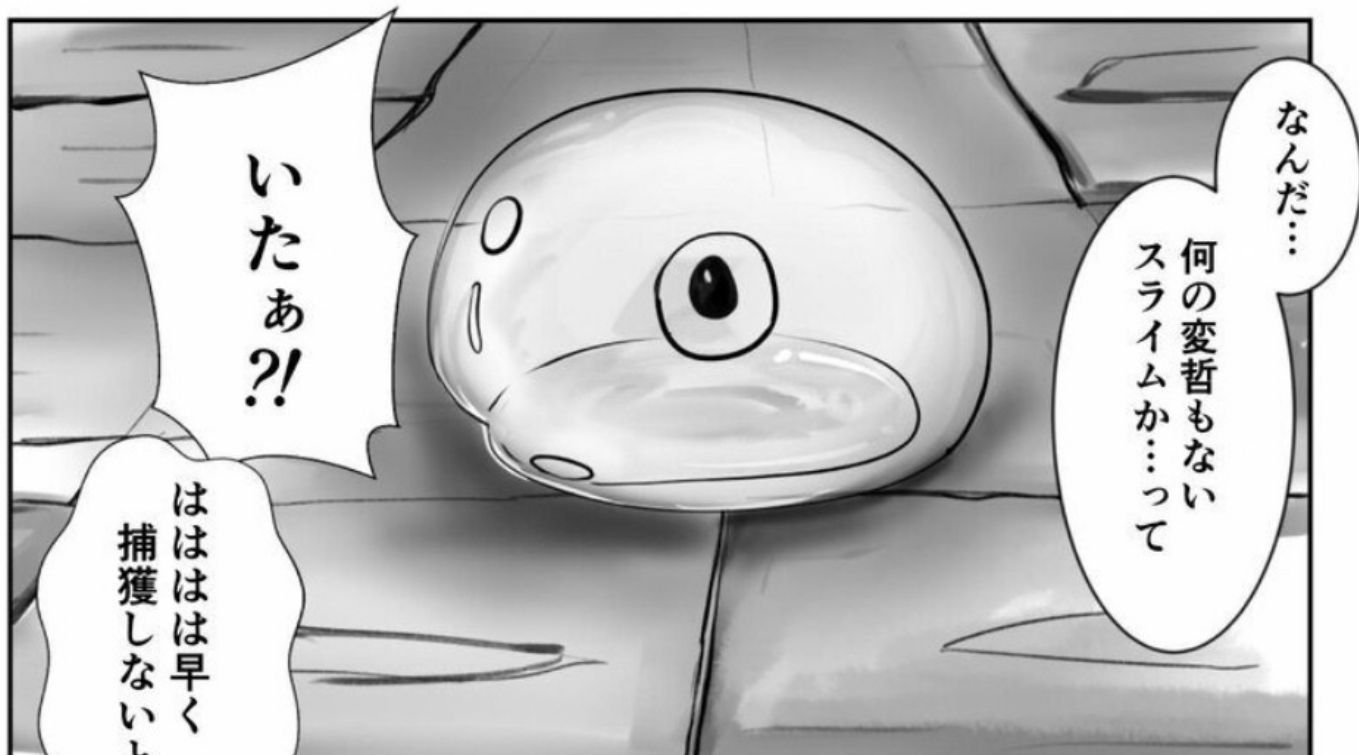


私が今回受けたクエストは
ダンジョンで特殊個体の
スライムを発見する事だった



しかし不思議だ…
このダンジョン
全然モンスターに
遭遇しない…









落ち着いて
交渉しましょう

私はここから
逃げたいだけ
なのです



私はこの場所からなら
貴女に触れていただけるので
『治癒』の力でサポートできます
お願いですどうか私を外まで
連れて行ってください

こいつ…
凄い早口で要求を…



スライムが…
私の中に…？

なにこれ…
一体誰に相談したら…



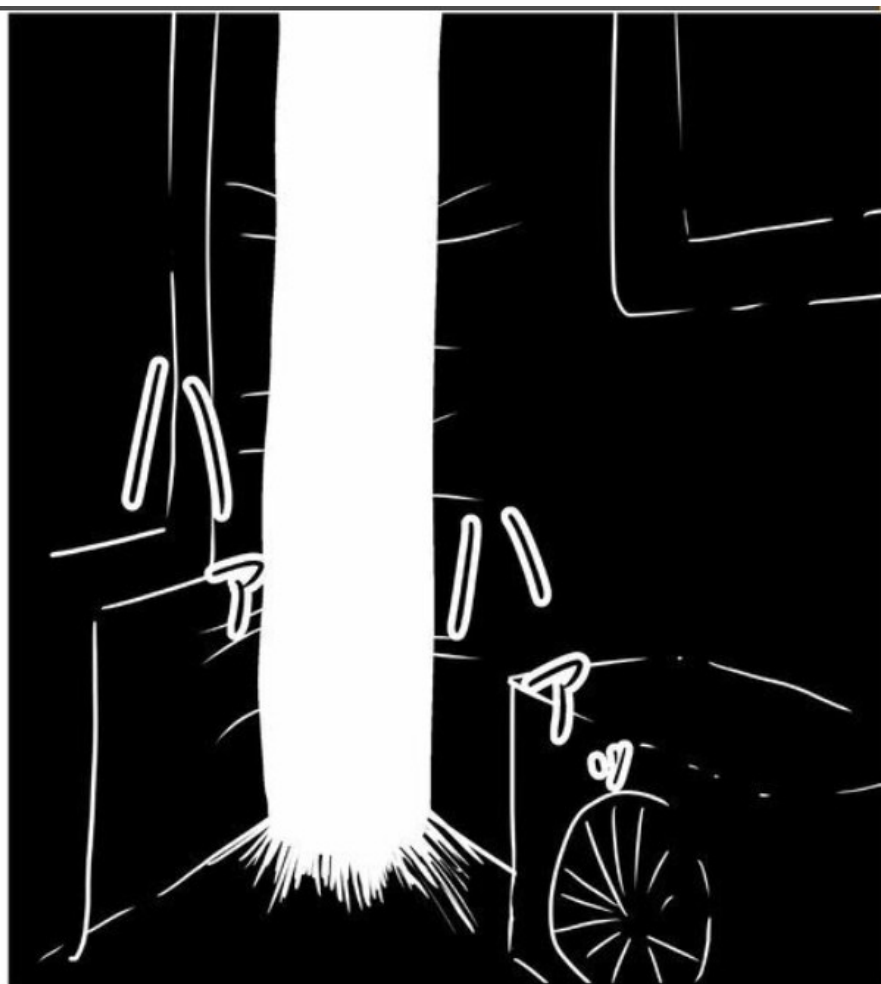
お姉ちゃんのおやつ

木出広親

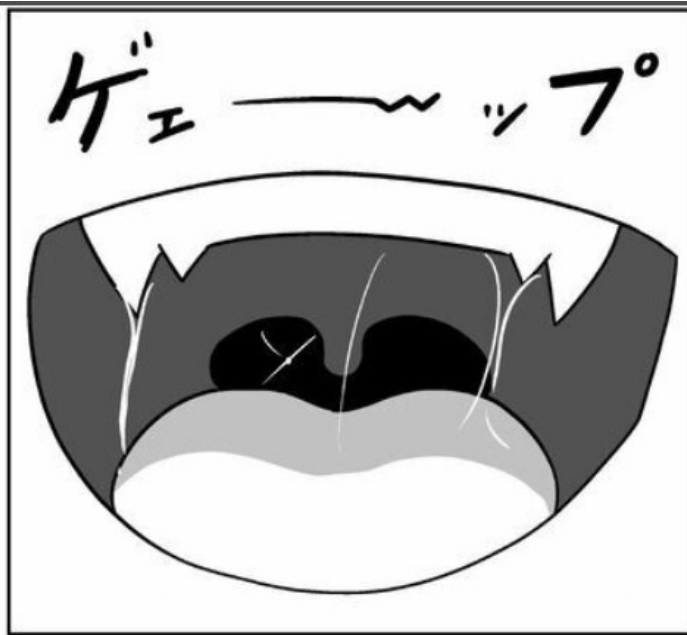


今から食べてあげるね♡



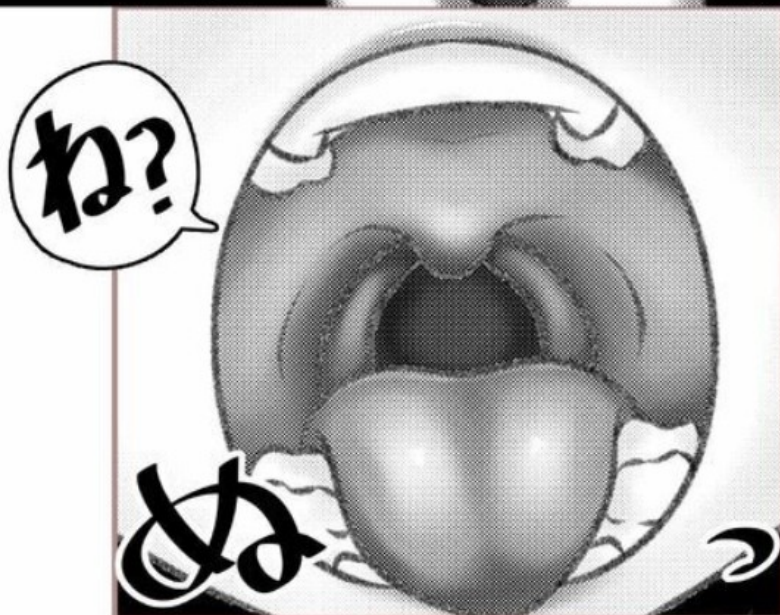




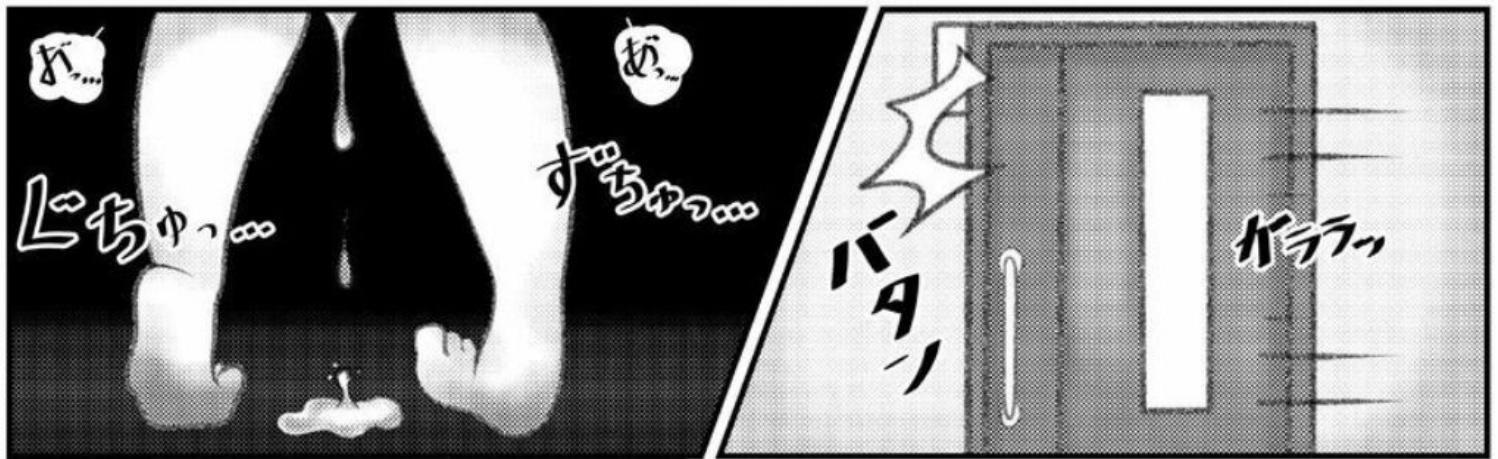


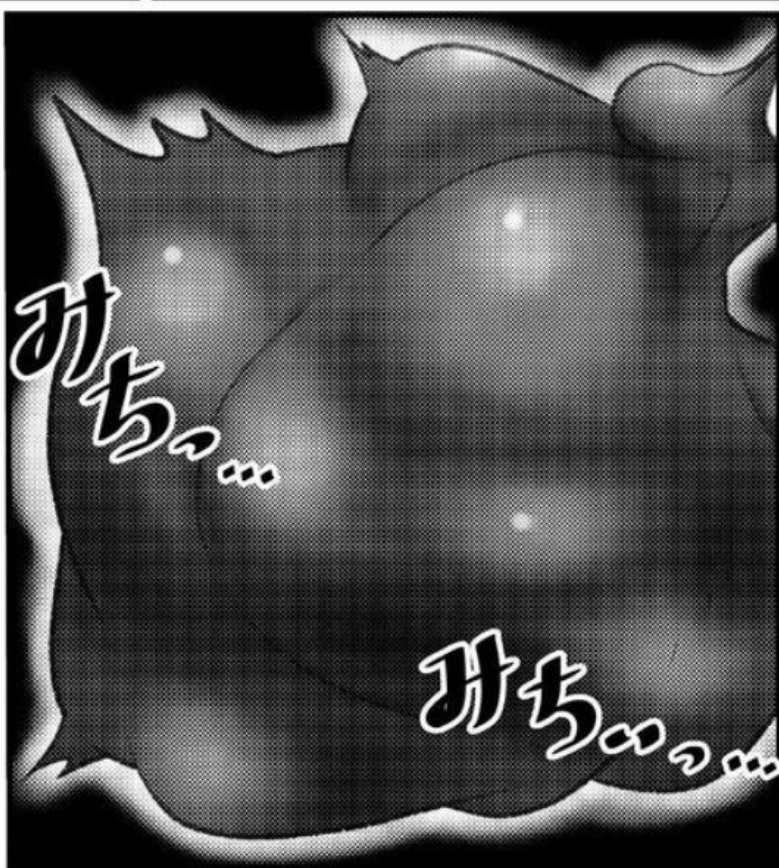
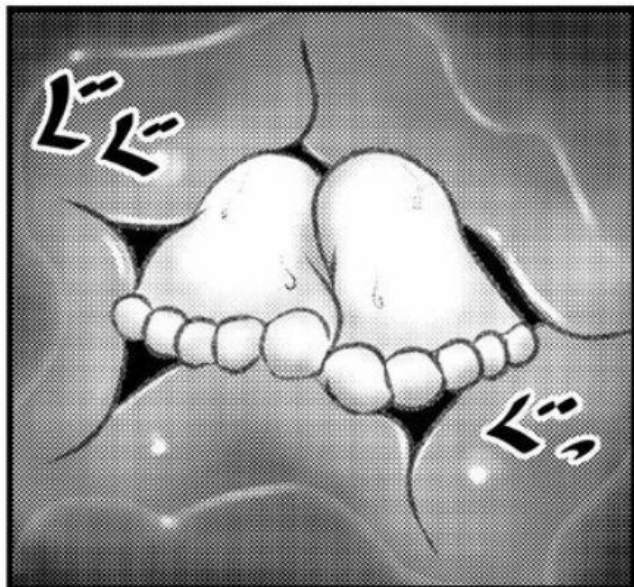














ダシと胃酸の海

風呂にしては
深すぎるし。

プールにしては
熱すぎだし、

いやさ、
おかしいなし、と
思ってたんよ？

私はスーパの
具にされてるって
薄々気づいてたけ
ど

言っ
てよ先にっ

やはり
力をつけるには
ヒトを食うのが
一番だな。

コボ...







とある山の
廃神社

…?
今何が起きたんだ?

けろっ…

ククク…
腹の足しとしては
中々だったぞ?小童

それでどうかの?
僕の腹の中の居心地は

え?腹???
何を言ってるんだ?

そもそもどうなって
いるかも分からない…
何がどうなって…

キュルル…

たふ…

コッ…



たしか学校帰りに
アイツらがまた絡んできて...

行きたくない心霊スポットに
無理矢理連れてかれて



でもあいつらはただでは
帰してくれないし下
手したらボコられる。

証拠写真のために
神社にある適当な物を
探しに入ったんだ...



断ったらぶん殴られるから
泣々行くことになったんだ...



地元じゃ何があっても
行くと言われる山奥の神社

日が落ちるころだし
周りは森でさらに暗くて
さっさと帰りたいかった。



何をしておる。

そしたら

ビクッ



目つきは怖いし
人というより
獣って感じがした

なんにせよ怖かった。
雰囲気は尋常じゃない

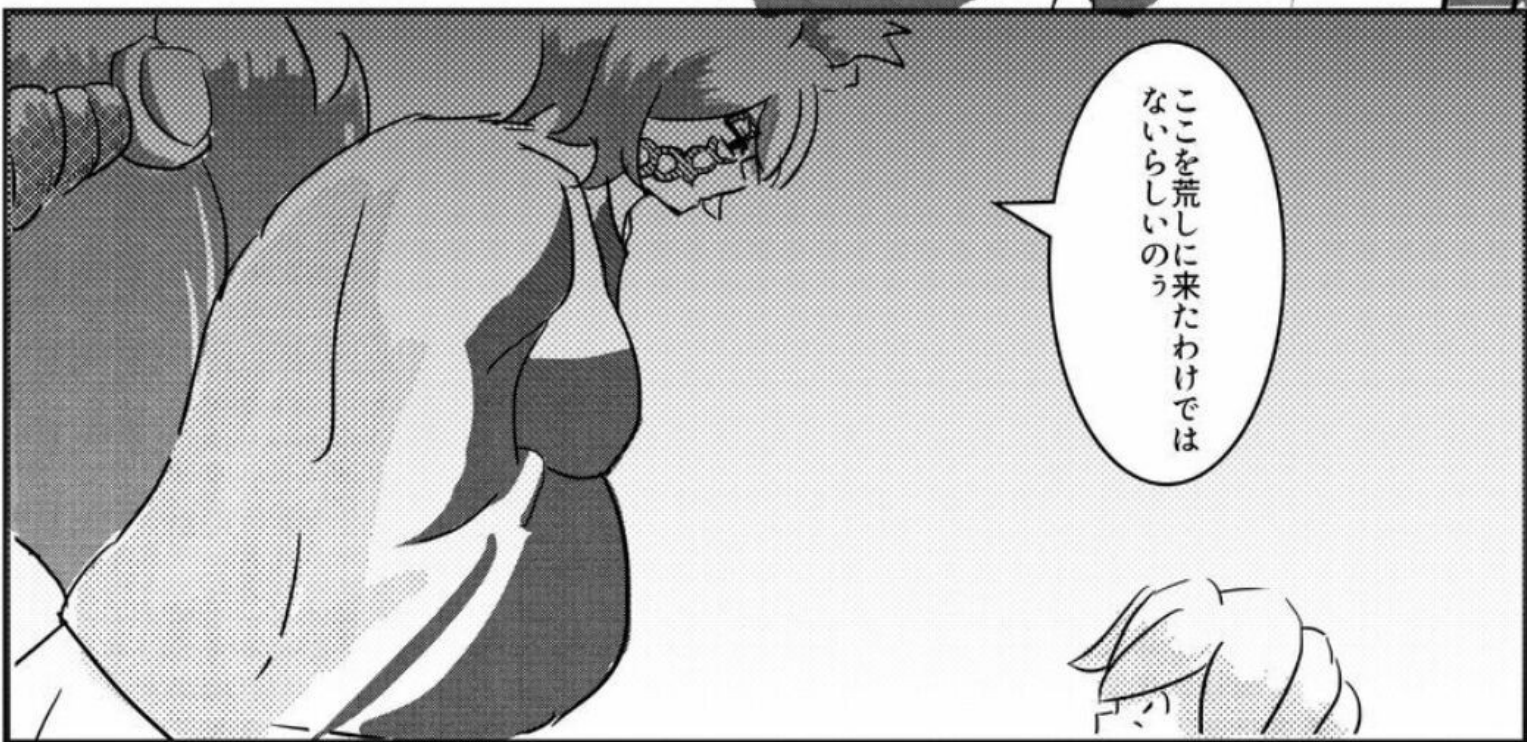


いつの間にか後ろに尻尾が4本の
でかい女が立っていた。



頭が真っ白で動けなかった。
けど…

ふむ…



ここを荒しに来たわけでは
ないらしいのう

辺りはすっかり暗くなり
道はすっかり見えなく
なっていた

その人(?)は夜道の山は
危険だから一晩泊まっていけと
言ってきた

正直嫌だけど…
断れる雰囲気ではなかった



着いた先には小屋があった。
中は意外にもキレイだった。

ご飯までいただくことになり、
変に気が緩んでいた。



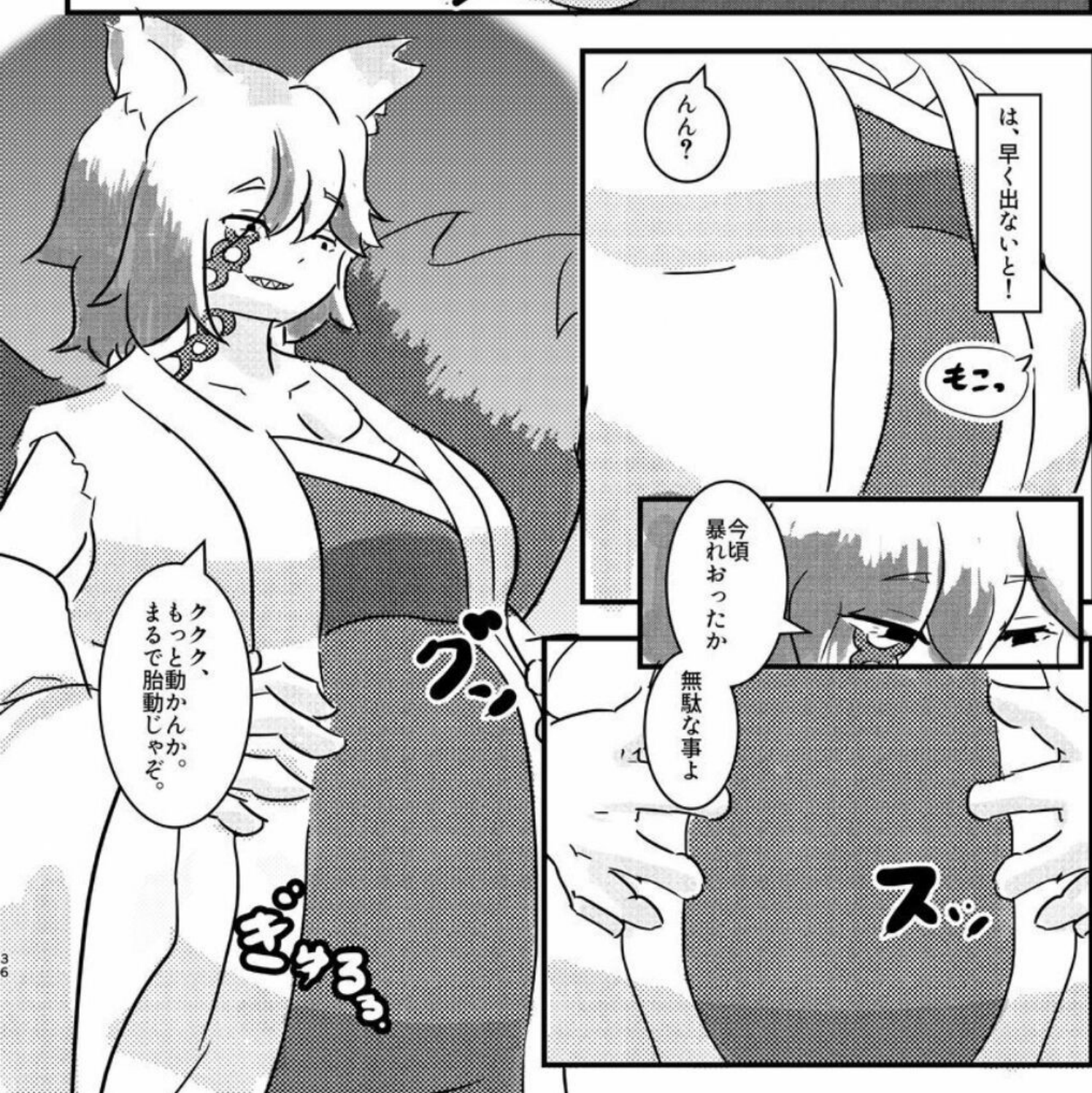
あの…
ありがとうございます。
ご飯までいただいたちゃって…

気にするでない。
たまにいるものじや。
お主のような

美味そうな
小室はのう…

カッ

!?







たまには
よいかなはう

胃で溶かさず
腸で吸収するの…

グギョルルル



全部あいつらのせいだ…！
僕がこんな目にあっても
アイツらは…

いやだ！

いやだ！！

ギョルルル



そんな！
こんなことになるなんて！
なんでこんな！

たあはで！

たあは！！

グググ

ズク…

どうしてこんな…
なんでアイツらは…





ちょっと!
触
ないでっ!

ピョッ

ピョッ

ピョ

ピョ

ピョ

ぎゅっ!

にゅるん





嫌だ嘘だ嫌だ嘘だ
嫌だ嘘だ嫌だ嘘だ
嫌だ嘘だ嫌だ嘘だ
嫌だ嘘だ嫌だ嘘だ
嫌だ嘘だ嫌だ嘘だ



はあ

はあ







わたし...
何を...?

ぐっぐぐ...

ぐわんぐわん...

ぐちゃぐちゃ...

ぐわんぐわん



あら？可愛い
お客さんだこと

…よ、よろしく

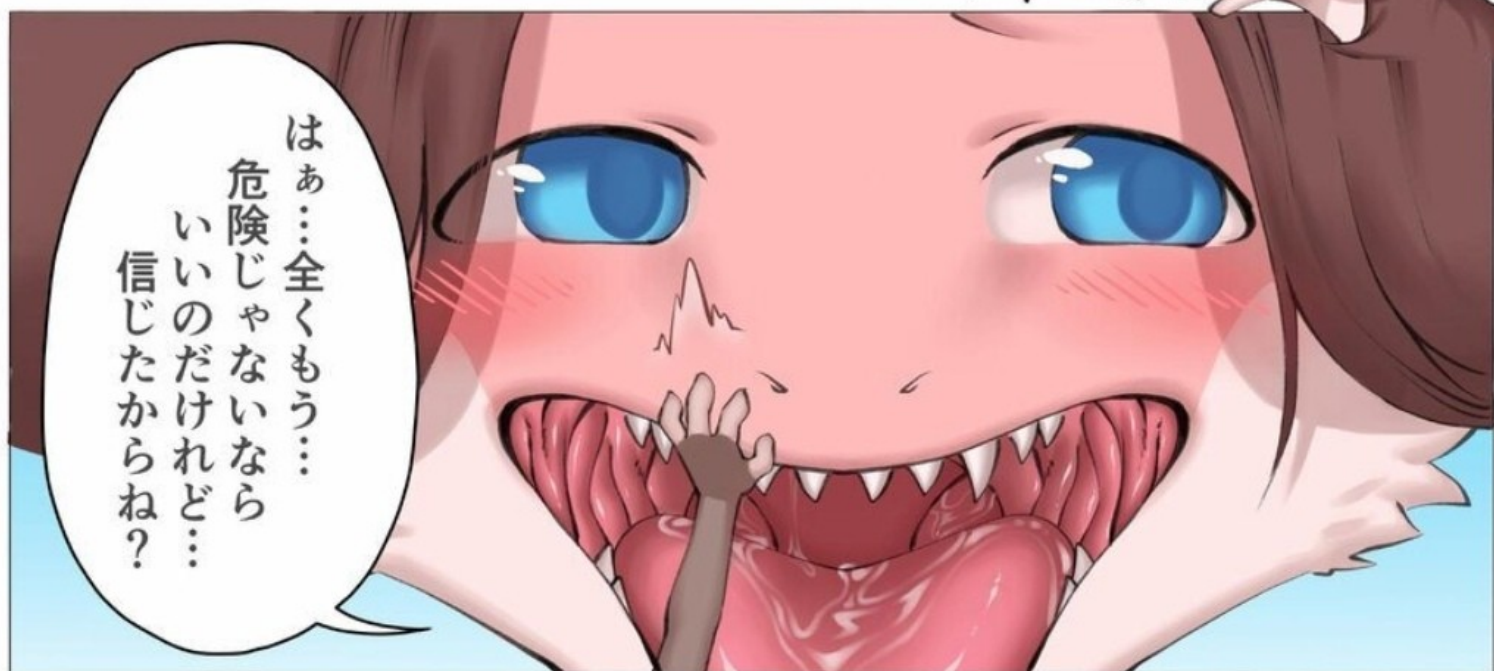
お願いします

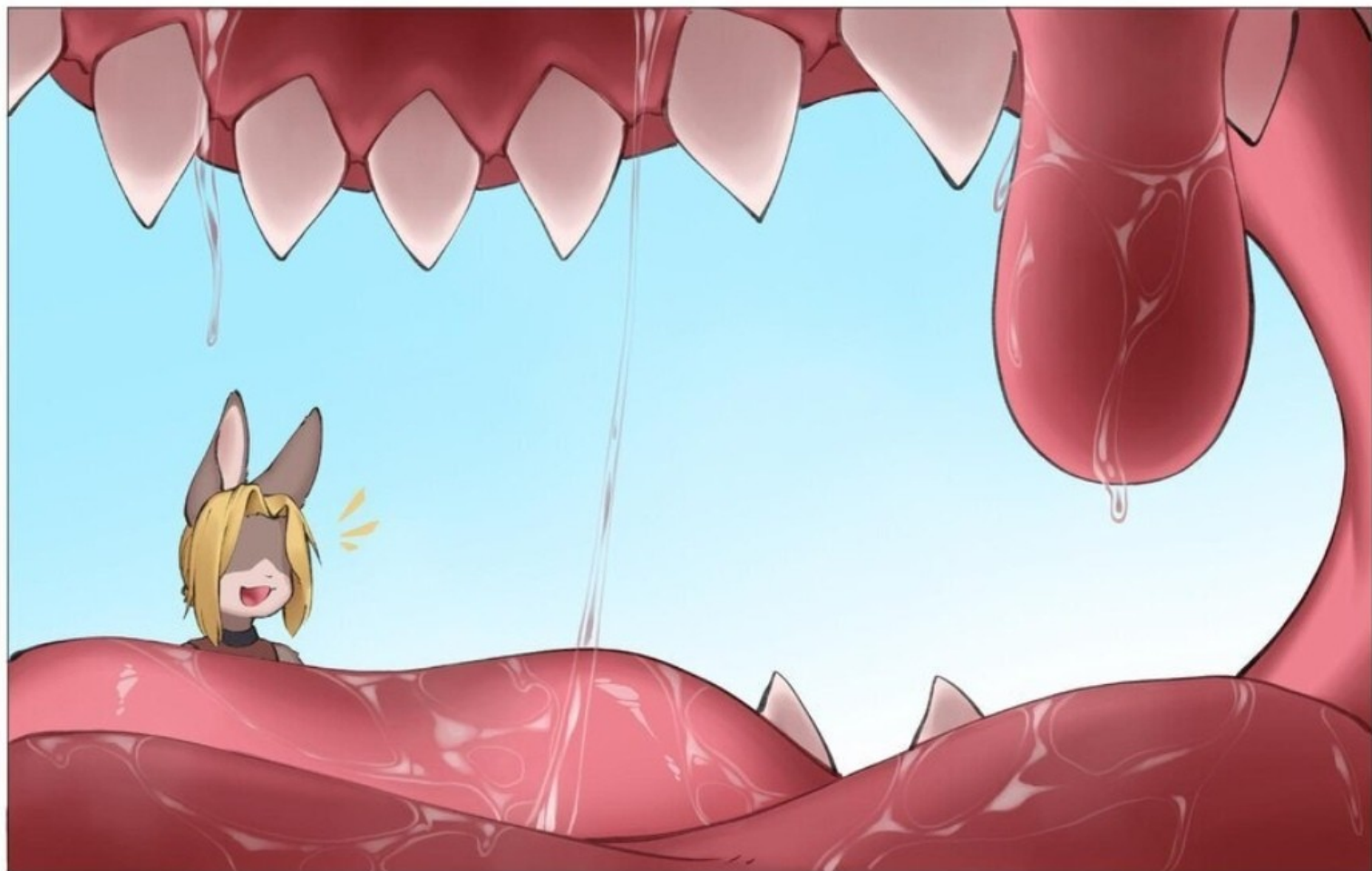
うふふ
それじゃ…
私の中へ
いらつしゃい

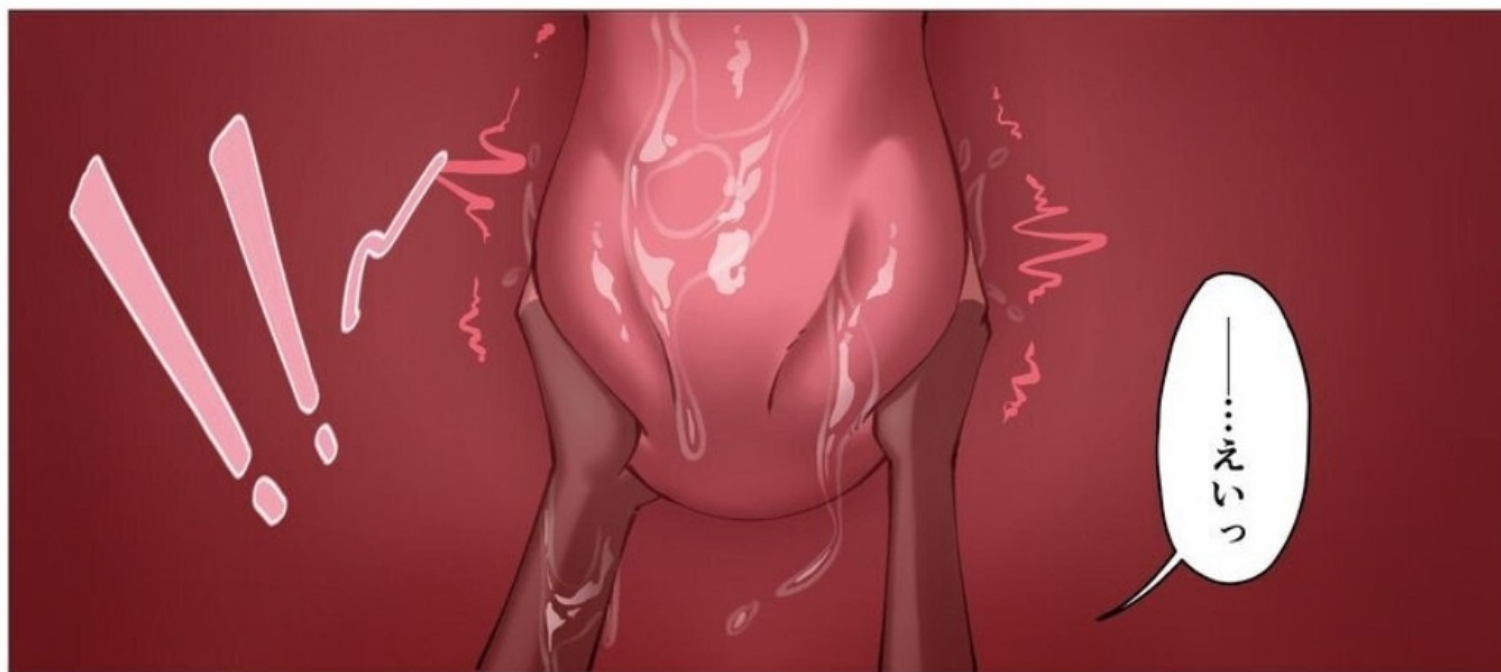
待望の丸呑みは
どうかしら？

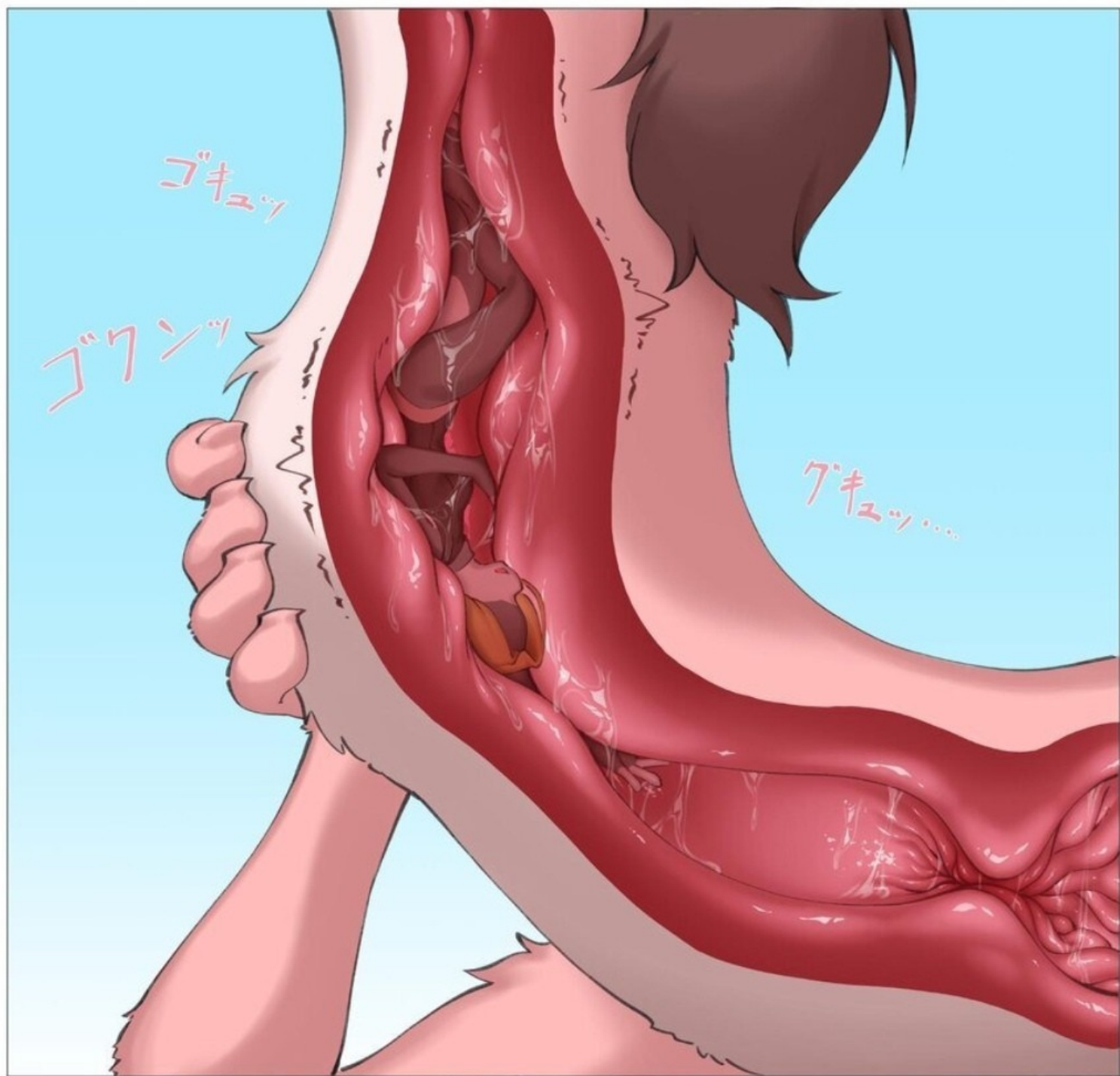
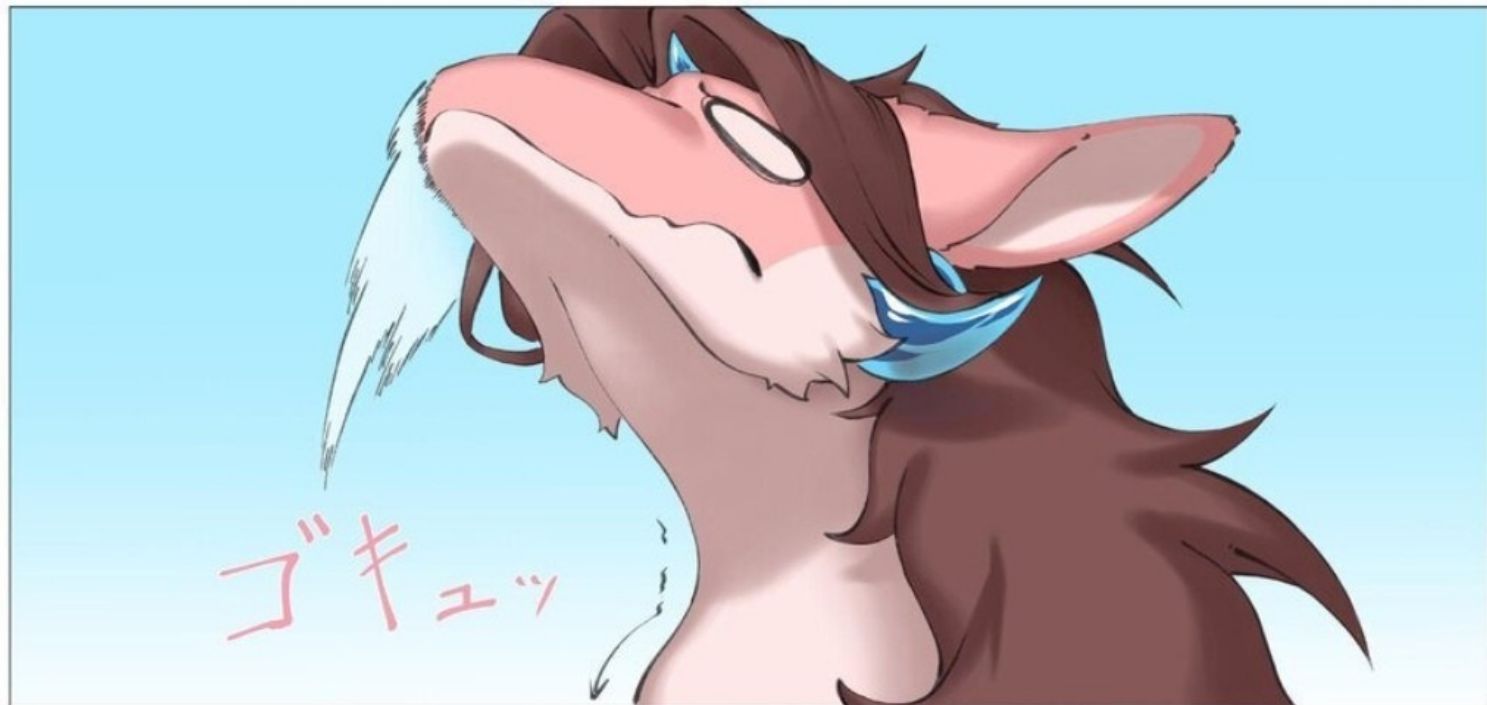
そう、それは
良かったわあ

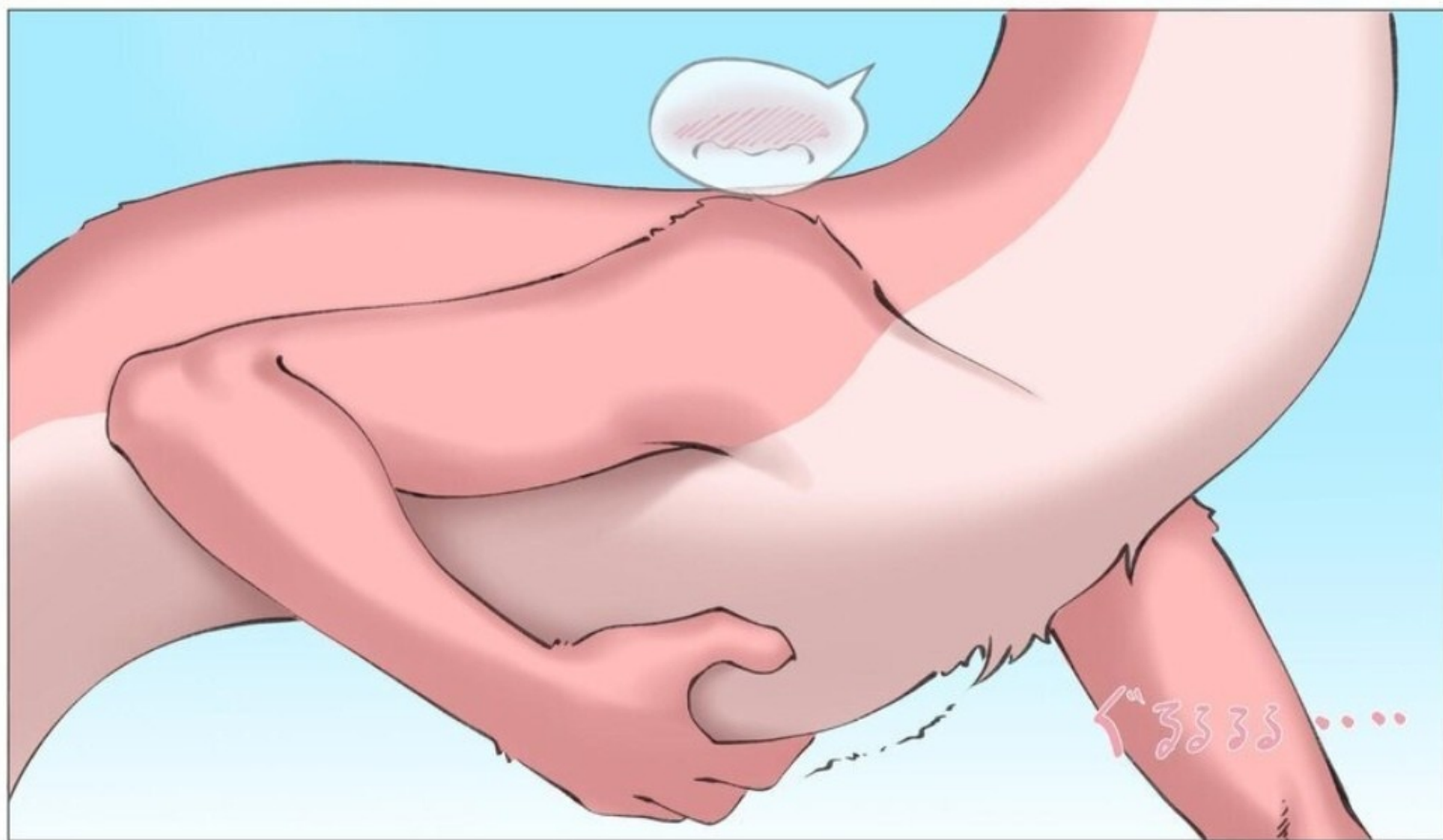
















ぎゅー

この締め付け…
すごくイイ♡



ちよっ?!
ソコで何を!?

ぐふふふ…



気にしなさいっ
んっ…

ぐふふふ…

～しばらく後～

あー

最高だった..
いっそ住みたい

どうかなの?
アంతだっただわ?
愉しかったわ?

うっ..
うるさい!!









今宵の生贄はそちか 結構
うむ そちの村のわらわに奉公する姿勢はしかと見ておるぞくくく…

呑んでしまう前にちと味見
をしてやろうか……

レロオ……♡

やあ……

れろ
ちろ♡

中々の味じゃな……
もう少し味わっていたいが生憎の空腹なのでな

くすくす

ニヒ神様のイニエ
あお



ごちそうさま♡

次の賛も楽しみにしておるぞ

ぷるり

こんなのにや……
誰か助けて……

どくん

ぬちゅ……

どくん

ふふふ…… せっかく生きたまま呑んだのだから
胃の中でせいぜいあがいて楽しませてくれよ

終



くく…♡
もうがっちがちでは
ないか♡

認めるが良い♡
気持ち良いんじやろう？
化物の獲物となつて
弄られるのがのお♡

じゃが「放ってしまつたら
生きたまま丸呑みじゃ」と
念を押したばかりじゃぞ？

お主にも見えるじやろ？
この洞穴のような喉奥が♡

お主程度の獲物など
この舌に捕らえられれば最期、
あつという間に一呑みじゃ♡

そうなりたければ
されるがままに
放ってしまえ♡



なあに案ずるな♡
焦らして遊ぶのも
飽いた所よ……

トドメを刺して
やるとするかの♡

無様にイカされ次第、
望み通りたっぷりと
可愛がってやろう

我が腹の中で、な♡



なんじやなんじや、
もう放ってしもうたか♡

気持ち良かったか♡ええ？
喰われてしまふというのに
ざらざらと舌に扱かれて♡

そんなに僕に
丸呑みにされたいか♡
愛い奴め♡

良からう
その望み
叶えてやる…♡

たすけて♡



くはは♡いきながら
喉を通って行きよったわ♡
無様じゃのう♡

我が糧となる事を
光榮に思うが良い…♡

ギョ…

ギョ…

ナズーリン ハウス

作…赤キギリ

幻想郷にて、あるひとつの約束事が制定された。

幻想郷に迷い込んだ人間は、

『この世界の住人として生きるか、

小さくなって妖怪のペットになるか』

とはいえ一癖も二癖もある幻想郷の住人達。

お触れが出て技術や仕組みが確立されたその瞬間、

好奇心からやって来た外の人間を捕まえて縮小する妖怪が相次

ぎ、自分もまたその被害者だった。

自分をペットにした主人は『ナズーリン』というらしい。

ねずみの妖怪でなんでも偉い神様に仕えているだとか、だからそれを後ろ盾に偉そうにしているが、如何せん知恵が働くために幻想郷では珍しく人間と話が通じてしまい、猶予を与えてしまおうという、妖怪にも関わらずものが分かる常識人だった。

だから、ナズーリンの小屋に招き入れられた時、驚いた。

宝探しの為に無縁塚付近に建てられたという掘っ立て小屋、いったい鼠妖怪の部屋はどんな形相をした部屋なのかと構えていたのだが、雑多に置かれた外の世界の品の山はさておいて、全体的には小綺麗で整理整頓がなされていた部屋であった。

「さあ、お前のは部屋はこれだよ」

とはいえ、結局はペットの立場だ。

手の平サイズに小さくされて、愛玩用に扱われることに変わらない。

そして、自分に差し出された部屋は：

ハムスターゲージだった。

人間に対しての意趣返しのもつもりだろうか、自分を閉じ込めた後、ナズーリンはクフフッと笑い、ニヤニヤと見下ろしている。1
「どうだ？人間はこれにネズミを入れているんだろう？閉じ込めていた檻に逆に閉じ込められた気分を教えておくれ」

どうって：言われても、突然知りもしない人型のねずみ耳の生えた少女に感想を尋ねられてもいまいちピンとしない。

居心地的には牢屋的なモノではあるが、ゲージ自体が窪んだ形式になっているので視界に映るのは冷たい鉄の棒ではなく、プラスチックの青色が周りを取り囲んでいるのでそんなに威圧感はない。所々に鉄が齧られたのか削れている部分もあるが、それはご愛敬。加えてナズーリン自身の手先が良いのだろう。ハムスターゲージの中は獣臭どころか、埃ひとつも無いほどの

綺麗な部屋だった。

これを感じとして言い伝えらる、ふふんと鼻を鳴らしご満悦。

「そうだろうそうだろう、なんせ苦勞して見付けて整備した掘り出し物だ。これを快適な家と思わずなんというか」

どうやら発掘した物を褒められるのは嬉しいらしい。とはいへ、『ん?』と文脈を思い出し、ジト目をする。

「なんだい、屈辱的だーとかは無しか、外の世界ではネズミを捕まえて閉じ込めていたんだらう? あいつらと同じ苦しみを: お前はくらわされているのだぞ?」

今度はこちらが『ん?』と、なった。

なんだか話が噛み合わない。肝心要の部分で決定的に食い違っている気がする。

もしかして: ナズーリンはこのゲージがハムスターを飼うためのゲージだと思っていないのだらうか? と聞けば、

「ハムスターは知っているぞ、ネズミの一種だらう?」

と話し、こちらを見た途端苦虫を噛み潰したような顔に曲がり、

「あの店主:!! そういうことか:!! 騙された:!!」

なんでも聞けば、名前と用途を理解できるなんとも便利な能力を持っている半妖が居たらしいが、言いぶりが狩猟道具のそれと似たものだったとのこと。知識人故に分かっているのに、ハムスターが愛玩用のネズミだと伝えぬまま、義憤を狩り立たせ、今に至るといふことだ。なんともいい性格している。

「じゃ、じゃあ:..なんだ? 私はペット用の籠を拾って来たというところか? からお前、その話本当なんだろうな?」

「ここにハムスターを飼って可愛がるのは本当だ」

「なんだよ理解できないぞ。そんなにそのハムスターというのは人間が飼いたいと思うくらい可愛いのか?」

なんだ、やっぱり知らないのか。と言っても、自分も飼ったことはないので聞きかじった情報と知り合いのハムスターしか知らないが持っているだけの情報を教えてみると、食い付いた。話し始めは「なんだその甘っちょろい飼慣らされたネズミは!」と、怒っていたものだったが好奇心がそれに勝つ。

「へー、ハムスターってこの鉄の格子に登るのか。ちょっと試しておくれよ」

気付けば、まるで自分がハムスターかのように実演をするまでになっていた。

ハムスター扱いされて屈辱感は無かった、しかし:

『おう』とか、『そうなるのか』という感心した声がくすぐったい。逆にこれが苦痛かもしれないほどだ。

しかし、恥ずかしがる自分とは真逆に主人は:..

「ほらほらここまで登ってごらんよ」と、ナズーリンの指がついと格子越しに差し出されて、もう乗り気でしかない。

頑張ればすぐに登れる距離にあり、断る理由も湧かないので:..登るしかなかった。それに自分もそれをやったことがある。

ハムスターが懸命に自分の指めがけて登るのが可愛いのだ。

愛するためだけに生まれたと言われているだけある、その動きの甲斐がいしき、てとてと登るその愛嬌。

一度見たら愛着が湧くというのも頷けて……それはナズーリンもまた一緒だったようだ。

ナズーリンの指を掴んだ瞬間、ビクッと震えたかと思えば……くしゃつと頬が持ち上がり、笑顔になっていた。

「おお……なるほど、可愛いというのも頷けるな」

やはりちよつと……恥ずかしいが、まあ愛嬌を得られたのならそれでいいかもしれない。けれど、欲に終わりがないように、さらにハムスターの情報をナズーリンは求め続けた。

食べ物……とりわけひまわりの種の皮を頬張ったり、剥いて食べたりする姿が可愛らしいことや、給水器で水を飲む姿が可愛らしい、滑車を懸命に回す姿も可愛らしいと。

持てるだけの情報を……出さざるを得なかった。今後の為に。

「へー、それというのアレか？私はまだこのハムスターゲージの全部のパーツを揃えていないわけか？」

「まあ、そうなりますね」

周りを見ても、ハムスターゲージの滑車や給水器があるわけではない。きつとどこかに紛失してしまったのだろう。

まあ……ここに住むであろう自分からしたら

不要な物ではあるけれど、

「それは悔しいな、見付けた時にはなかったぞ」

ナズーリンの蒐集欲を刺激してしまい……！

「お前も来い、宝探しに連れて行ってやる」

むんずと掴まれ、無縁塚まで同行することになってしまった。とはいえ、ただのペットから昇格した。

そこからは毎日ナズーリンに連れられ宝探しをする事になる。

人肉を食べると言われているねずみたちと一緒に、尻尾の先の籠に入り、外の世界の道具を探して、どんな道具か説明する日々。なかなか悪くない、景色も良いし。ナズーリンからしても香霖堂の店主から聞くのは胡散臭い面があったとのことで、好評を得ている。

けれども例の給水器と滑車は見付からずじまいである。

もつとも、見付かってもこれに関してはハムスターのお下がりとは遠慮したので……好都合であったが。ただ代わりに木工細工で滑車を作る技術を習得させられたので、労力的には疲れた。とはいえ、ナズーリンとは妖怪とそのペットという関係なれど、良好な関係を築けているといっても間違いではない。

けれどそんな日々を過ごしていても、一線を越えてはいけない日もたまにはやって来る。その日が近付くとナズーリンはハムスターゲージに一面覆い尽くすほどの布をかけてくる。

ただ無言で、なにを言うわけでもなく、隠すのだ。

それだけで、おそらく見られたくないものと察するが、その見られたくないものも察する事ができる。

一面を布で覆い尽くし、始まるのは衣擦れ音と、何度も何度も打ち響く水滴音。ふーふーっと息を嘯み殺し、それ以上は聞かなくても分かるだろうと意識を手放し、寝るに務める。

健全な男だ、見たくないわけではない。

けれども聞くとところによると、アレは発情期によるものらしい。ネズミの性欲は知っている通り、貧弱な小動物ゆえ、数を増やさなければならず、年中解消しなければいけないくらい。そんな大変そうな相手に面白半分で見るとはいかず、知りはしても、決して覗く事は無いと思っていた：その日まで。

その日は、竹筒による給水器が出来た日だった。

自分も慣れたもんで、四苦八苦の試行錯誤を繰り返し、できあがった竹筒を見れば感無量。ハムスターというペット扱いされていると分かってはいるものの、苦勞して作った作品を試さずにはいられず、顔をビシャビシャにしながらも口を付けて飲んでた。そんな自分の姿を見て、ナズーリンは

「あははっ、馬鹿だねえハムスターもそんなものなのかい？」と、ばかにしているが悪意無くご満悦。

とりあえずは、ハムスターゲージ周りの設備も整ってきて、人間用の小道具も増えて行き、ゲージの鉄扉も開けっ放しのまま毎日楽しくなりつつある。最初こそは妖怪が支配する幻想郷に突然迷い込んで小さくされて今後生きて行けるのだろうかと思っていたものの、なんとかかなりそうだ：。

その時、パサッとゲージに布を被された。ナズーリンに。

ああそうか、今日はその日なのか。と。

せっかく築けた信頼関係、壊すわけにはいかないと：暗闇の中、手探りで寝床に着こうとするが：。思っていたよりも、夜目が利く。何故だと思えば、どうやら布が竹筒に引っかかってそこから光が漏れているらしく、これはいけないと格子越しに腕を伸ばしたその先で、自分は見た。

ナズーリンが、自慰行為をしているその姿を。

もちろん頭では分かっていた、見てはいけないものだとも思っていた。しかし、いっぺん見てしまったら、おとぎ話の当事者のようにそこから目が離せない。その姿はいつも見る、狡猾で薄いくちびるで皮肉がちな言葉を連ねるナズーリンの姿ではなく、一心不乱に情欲を食らう獣の姿がそこにあった。

小ぶりの手で納まるほどの胸を熱心にねぶり、もう片方の手で執拗に性器を弄って大粒の水滴を寝床に跳ねさす、しかし：。

それでも足りない、結局はひとり遊びなのだから。

ラジオのチューンを合わせるように、快感が連なるポイントを自ら当てるしか出来ず、それが起こるまで地獄は続く。せめて、なにかあれば…と、その当ての方向を見ると…目が合った。

ピタリ一瞬、暗がりの部屋なのに眼球のレンズ部分が互いに光り、完全に目が合った。

給水器による、布のめくりでこうなったのはお互い分かっている。だからお咎めはどちらも無し。けれども、これで済ますということはどちらも思うわけは無く…。ゆっくりと、それでも確実に、掘っ立て小屋の床をギシギシと鳴らしながらこちらにやって来た。

「ねえ、開けてもいいかな」

と、言われても返せる言葉も無くただその時を待った。

ファサット…掛けられた布を持ち上げてゲージのドアを開きやって来たのはナズーリンの巨大な手。少し爪が鋭いが手入れが行き届いている綺麗な手だ。しかし、手探りでこちらの位置を探りもせず、ただ悠然と佇み、こちらを待っていたので…。

自分は、自らその手に掴まれに行った。

これはもう、信頼のなせる技だ。相手が絶対にこちらを害さないと確信しているが故に出来る物事がスムーズに浪費なく進む

行為に他ならない。

そしてそのまま親指で顔を伏せられ、他の指も身体を隠し…ハムスターゲージからこちらを取り出した。丁寧に、丁寧に。ナズーリンの手の中はもう、体温上昇による熱気と、情欲に浸け続けた部分だったので、汗と共に愛液に塗れ、次に手が開かれた時には、自分はもう全身ずぶ濡れになっていた。

そうなたらもう服など意味もなさない。

ぐしょぐしょのそれをナズーリンは指でつまむように持ち上げて、それに合わせて力の向く方向へと服を脱ぎ放ち…

一枚、二枚…着々と脱ぎ続けた先には、生まれたままの姿があって、ナズーリンはようやく口を開いてくれる。

「ふふっ…男なんだね、キミは」

やっと、張り詰めた空気が和らぐのを感じた。

「ははっ…すまないね、ネズミは優秀な種族だと思っているけれど、これはどうも…ひとりで収めるには少し難しいらしい」ひとつ、ひとつのセリフごとにふーっふーっと息を次ぐその空気がくすぐったい。早く触って欲しい。

すると、ナズーリンは意を決したようにその小人が居る手を下腹部の性器まで持つて行き…。

「さあ、入っておくれよ」と、そう言った。

ただそれに対して…自分は…。

「えっ」と、答えてしまった。

性欲解消なら……まあ手伝うけれど、流石に入るなんて聞いていない。縮小の際に頑丈に作られているそうだが、果たして入っているのか。

「おいおい、住めば都というだろう」

「いや、流石にそこは住める場所ではないと思う」

「まあまあ、入ってみれば変わると思うよ。」

さあ早く、これでも少しは恥ずかしいんだ」

うっ……それを言わせては、男として立つ瀬がない。

仕方が無い、少しは頑張ろうと思ひ、承諾した。

「そうだろう、そうだろう。人間、素直が一番だ」

とはいえ、焦らされた手前ナズーリンは少し悪戯心を覚えた。

もはや、今から舌の口で喰う相手に慈悲など要らぬ。

「えいっ」と。

大人の玩具のように、こじ開けるようにそこに挿入した。

しかし突然入れられた小人はたまったものではない。

ただの一瞬で暗闇に吞まれ、閉鎖空間に閉じ込められたのだ。

もちろんぐいっと身体を伸ばし、どうにかこうにか余裕を持たせようとするが、押し寄せる膣肉の収縮で小人の小さな手では暖簾に腕押し。

ただナズーリンを気持ち良くさせるだけで終わってしまう。

「あはっ、どうしたんだい、喜ばせるようにしているのか？」

と、ナズーリンも饒舌になって来た。

こうなるともう、言葉に脂が乗ったか、弄り言葉を多く話すま
でになっていた。

「ははっ……まるで伝聞通りのハムスターようだね」だとか、
「キミは他の日も覗き見ていたんじゃないだろうな？」とか、
思いつくままにニヤニヤと投げかけて、反応が見えるわけない
のに、反応あったとただ楽しむ。

そんな意地悪なネズミの中で自分は……肉と戦っていた。

ぎゅっぎゅっぽと膣内で収縮運動を続ける空間だから、抵抗
無くなればすぐにでも奥へと運ばれ誘われてしまう。

けれども、そんな抵抗もナズーリンが未だに足を持っているか
らこそ。手を離されたが最期、完全に吞まれてしまうことは想
像に難くない。それまでせいぜい押し合い引き合い楽しもうか
と思っていたのだが……ナズーリンの意志よりも膣内の無意識の
方が上だったようだ。欲求不満で高められたその膣は収縮活動
を続ける中、ひと際大きい膨張をしたかと思いきや、ひと際小
さく収縮し、哀れな小人をつるつとその内部に吞み込んだ。

「おっと」と、驚いたのはその持ち主ナズーリン。

慎重に、長く楽しむはずだった小人は食いしん坊の膣により、
跡形も残さず吞み込んでしまって、指にはもう自分の愛液しか
残っていない。しかしそれでも小人の存在は希薄で、本当に吞
まれたのかとお腹に手を当て……

「本当に吞まれてしまったのか？」と、質問した。

そんな質問に、トントンと膣壁を叩いて返すしか出来なかった。気付けばいいが、結局は手の平ほどの小人の腕。もんどりくつちやり返る膣内でそんなもの感じ取れるのかと、半信半疑で腕を押し込んでいると……。突然空間がギュッと締まるかのように収縮した。外部による力の押し込みだ。ナズーリンがお腹をぐいーっと所々押し続けているおかげでやっと気付かれるまでに至り、存在を認知されていた。

「ああ、そこに居たのか」と、ナズーリンは一安心。

これで行方不明になってはそれこそ笑い話で済む話ではない。けれどやっぱり不安である。はたしてこのまま小人を性の道具として使ってもいいものか、一抹の不安をそう感じ……。

小人はさらに奥まで通された。下腹部をグッと押して、感じ取られた異物をギュツギュツと押し込み、安全な場所へと奥まで入れる。

それに驚いたのは自分だ、いったい何が始まるというのか。

このまま性欲に身を任せ、解消すればそれで終わるはずだったと思って、しかし何が起こるのだろうという期待任せに身を任せ、背中に何か当たったかと思いきや子宮口だった。

冷や汗が出る、そこは赤子が産まれ眠る場所だ。絶対入れるわけがない。けれども、ナズーリンは『入る』と確信して、ギュツギュツと押し込み……。それに応えて、子宮口が開いた。

おおよそちょうど、小人なんて呑み込めるくらいに。

まず、足から腰周りを呑まれた。

それに対し、足をバタつかけて抵抗しようにも子宮内には赤子のベッドしか存在せず、踏み場所も取っ掛かり場所もないので、容易に次の部分が呑まれてしまう。

足、腰、が来たら次は胴。けれども腰が呑まれてしまった今、胴を呑むなんて容易いもので、そのまま呑まれて肩に着く。最後の砦だ、これを呑まれては完全に子宮内に身体が収まる。

しかし、ぶにとしたその子宮口は腕を這わせるだけでつるつと滑り、凸の部分であっても掴める場所なんてどこにもない！

「早く入っておくれよ」と、ひと際ギュツと押された拍子に子宮口がきゅーっと締まり……腕や頭がついに呑まれ、柔らかな肉を感じながら……子宮内へとゴロンと落ちた。

「おっと落ちたか」と、ナズーリンが感じればあとは一安心。当初の目的である小人を使った性処理は出来なくなったが、人肌恋しさは解消できたらしく……。

ナズーリンはまた自慰を始めたようだ。

子宮内でもその指の動きがつつぷつつぷと伝わり、その衝撃が空間を揺り動かしてくるくらいそう。

いや、実際クラクラしている、このナズーリンの子宮内で。初めて入ったその場所なのに、身体はここを憶えているかのようには郷愁を受け入れ、性欲よりも母に甘えたい甘酸っぱさで……うとうと……と、眠気がまぶたを重くしてたまらない。

横たわると柔いヒダが背面をくすぐり、表面積が大きく粘つくもんだからぴとりとヒダがくっ付いてしまえば身体を起こす氣力が徐々に徐々に削られて行く。

そんな事をしているうちにナズーリンは最後のスパートに入ったらしく、たんったんっ腰を持ち上げ足をのたうち子宮内が伸びに伸びて窮屈に思えるほどに、頭から足まで引き伸ばして：『ビクン』と、絶頂を迎えた。

そこからの動きはたいへんゆるやかなものだった。

常に揺れ動き続けていた子宮内はナズーリンの呼吸と共に膨らんだり、縮んだりの波がゆったり流れる空間となり、いつまでも居ていいような心安らぐ部屋となつて、ナズーリンが無理矢理出さないことには朝までこのまま胎内に居るままだろう…。いや、それどころか子宮口が閉まつていて、ナズーリンの助力が無ければ出られないのが現状だ。

とどのつまり、自分にできる事は何も無いので寝るに限る。

とくんとくんと鳴り響く心の音を聞くままに、全身の力を抜いてももう今日はおしまいと寝転んだ。相も変わらずナズーリンは話さないけど、耳を澄ますと時おり腹を撫でているさすり音が流れて来るので、ほのかな愛情を感じつつある。産まれる前の子供はこんな音に包まれながら産まれてくるのかと、深い知見を得つつ知的欲求を覆い隠すかのように、安堵からくる眠氣が再度湧いて来た。

ナズーリンはどうしているのだろうか、やっぱり同じく寝つつあるのかとゆったりゆったり：暗闇に溶けてゆくと：

どこからか、何か：カラカラ回す音がする。聞いたことのある音だ、ああそうだゲージにある滑車の音か。

滑車を木工細工で作った時にはまさかこんな関係になるとは思わなかった。あの時は：そうだ、面白半分で延々滑車を走らされたつけ。本当にハムスター扱いの日々だった。

それがいつの間にか宝探しに必要になって、外の世界の道具の説明も担わされ、使える人間くらいのポジションになったかと思つたら、こんな事をし合う関係になつてしまった。

ペットから、発掘仲間、性欲を解消する関係となり：。ついには：ついには：ああ、眠くなつてきた。

ナズーリンには今、どんな風に見られているのだろうと考えるが、流石にもう頭で考えられなくなつてきた。

けれど、子守歌のように優しく包む音でなんとなく思い浮かぶのは、ナズーリンが愛おしく腹をさすって、滑車を回す姿だ。カラカラカラカラ：手遊びのように回し、思い出に浸っているか：それか、これからネズミの妖怪から産まれ出てくる子供の為に回しているのだろうか、今度はハムスター扱いではなく、子供が滑車で走っているそんな姿を微笑ましく眺めているみたいな。そんなありもしなさそうな想像でも、ナズーリンが親のようにさする胎内では自分が子だと擦り込まれつつあった『了』

な…なあ？
そんなに怒るなよ

折角の可愛い顔が
台無しだぞ？

あつ、もちろん！
君は怒っても
可愛いけどマ…ハハ…

その…、『浮気』ではないけど、
それっぽい事してたのはホントに
ごめんって感じだぞマ…

ガハハハ…

あの女とは『遊び』というか…
別にガチで好きとか付き合ってたとか
そんなんじゃないよ？
もちろん君が一番だよ！ハハハ…

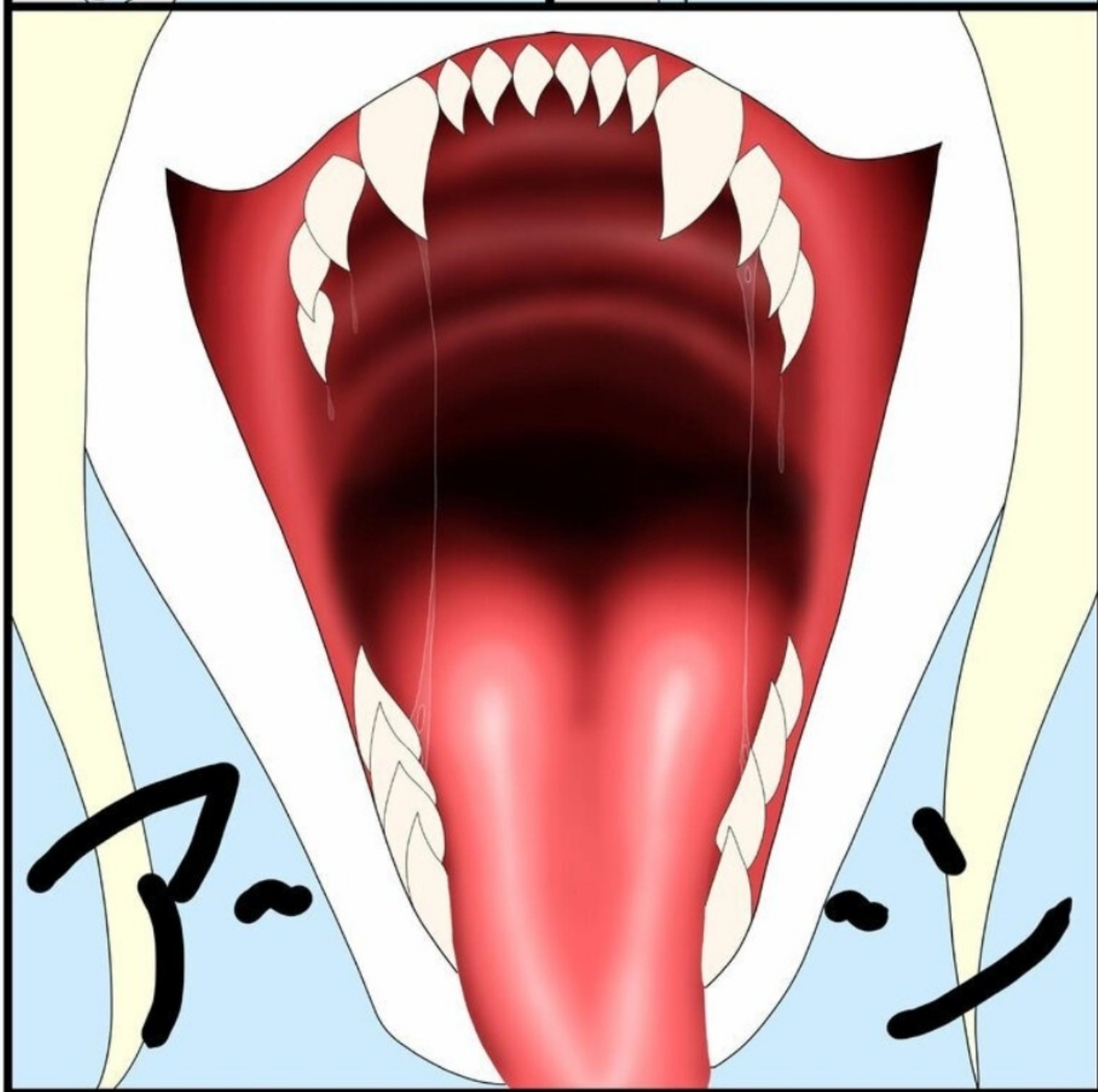
ほ…ほろ！
彼女、意外と
美味しかった^さだろう？
実は、いつか君に
食べさせてあげようと
思ってたんだ！

いやあゝ
サプライズのつもり
だったんだけどなあゝ
やっぱり君は
勘が鋭いね！ 八八…

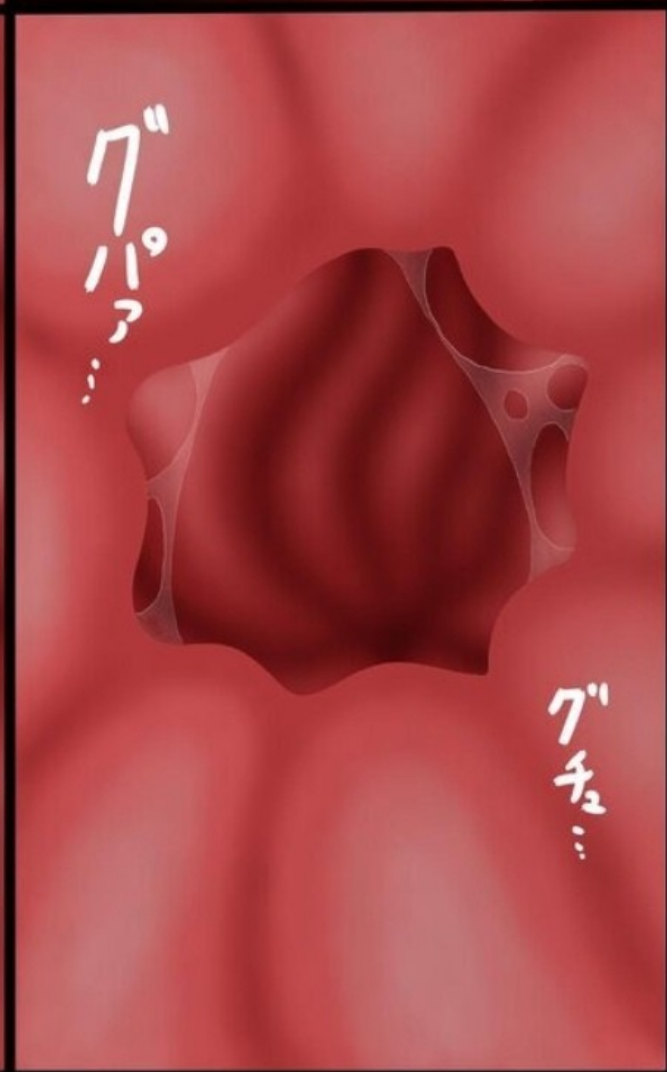
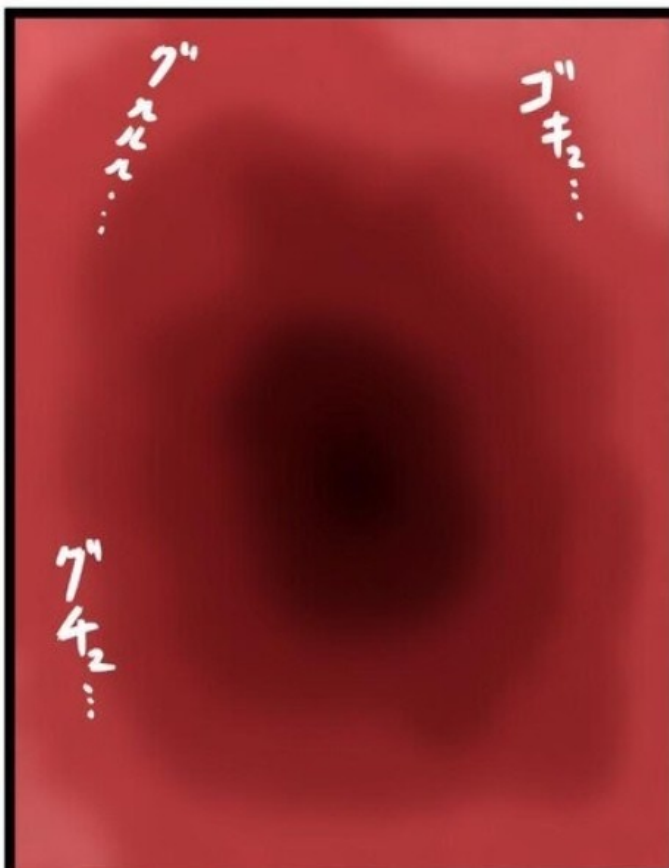
グルグル…
ゴボゴボ…

まあ…次からは
誤解を招くような事は
しないように…

ズン…











そうだ彼女はどこだ！
彼女はどこに居るんだ！



あらあら…
もしかして恋しいの？
アナタが私に
差し出したくせに？

彼女なら、
もう胃袋には
居ないわよ？

彼女ならとつくに蕩けて、
今ごろ小腸で養分として
吸収されてるんじゃない？

可哀想に…(笑)





―魔王城
大広間―



何の王だって…？
ぶつくさ言わずに
かかって来なよ



クツクツクツ…
人間が魔族の王に
勝てるっても？



うるさい!!
私に何をしたのお前!!
なんでちっちゃく
なってるの私!?



そんなに小さい身体じゃ
何されても怖くないけどね
グリヘルちゃん♡

ばーん!



魔王 グリモア・ヘル

勇者 ナツキ



くっ…
さっきから
「グリヘル」と
なれなれしく…



だが今の私じゃ
勝てないっ!!
覚えてろ!!



すっ…



ガッ



ふわ



ほんとに
かわいいね
グリヘルちゃん…
このまま食べちゃお

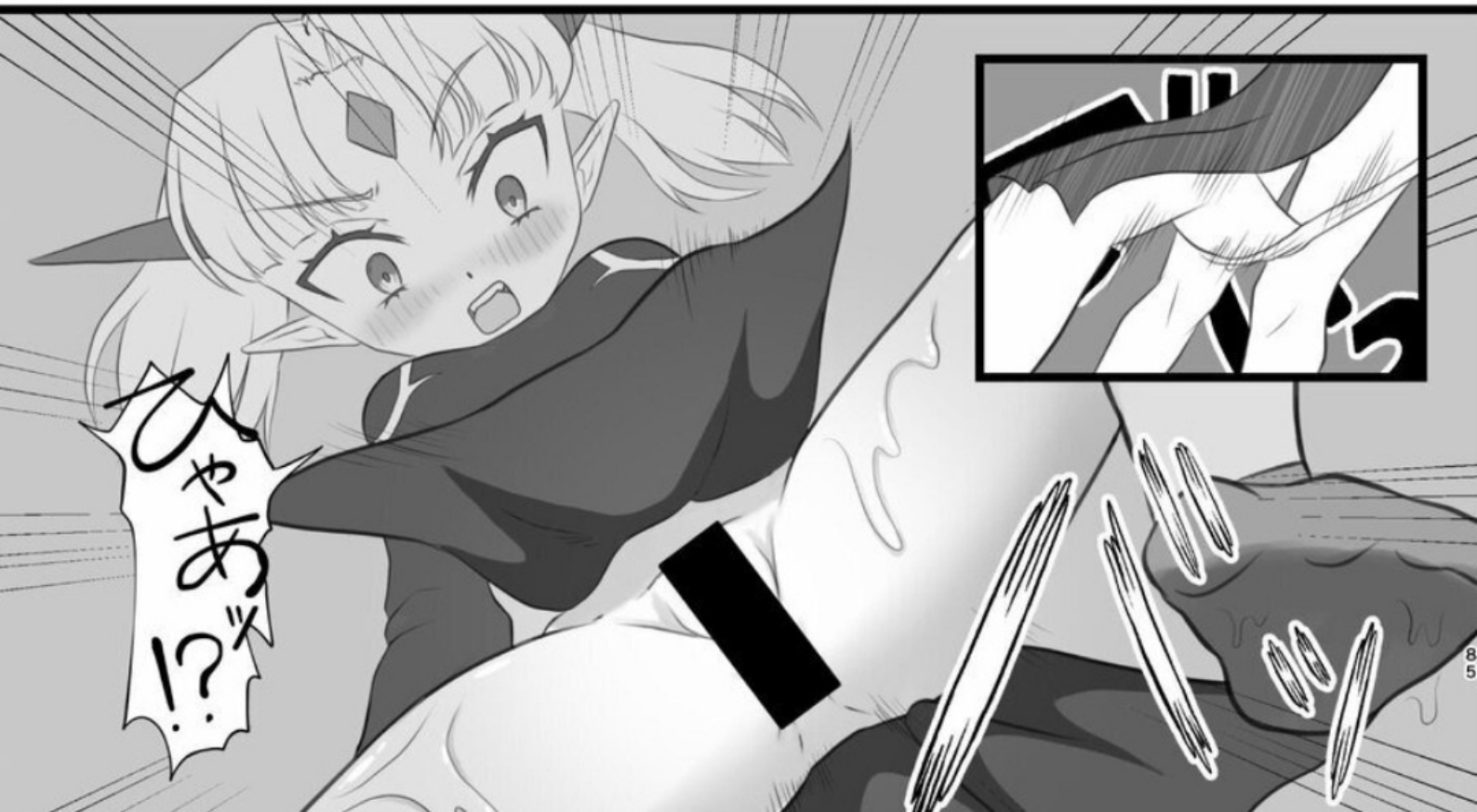
また
「グリヘル」と…



えっ「食べる」!?
待って待って
聞いてない!!
離せ!! 離して!!



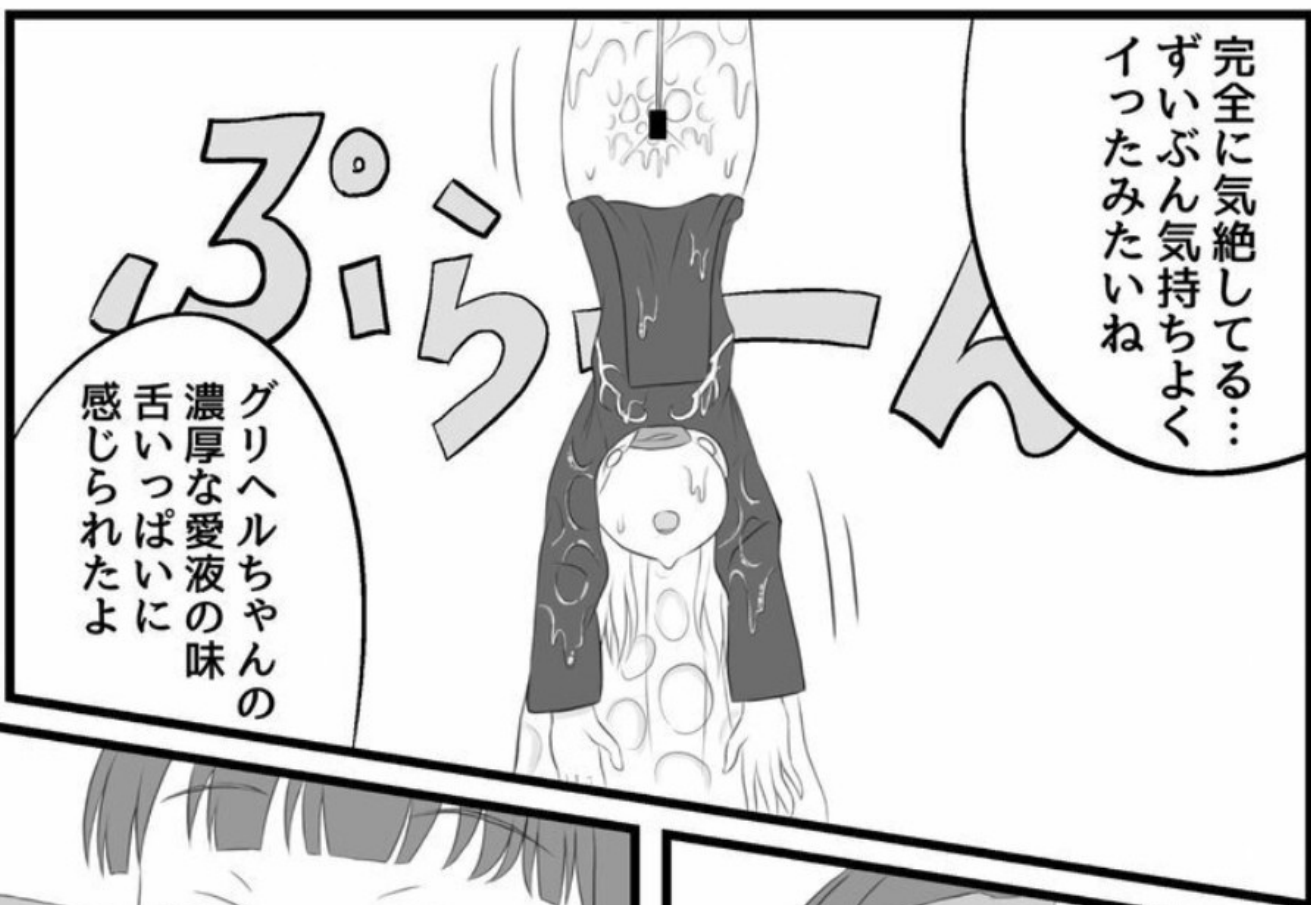






≡/ユッ
≡/ユッ









あっ：
今おなかに入ってたかな

きゅぽん

くくくくくっ...

ドクッ...♡
ドクッ...♡
ドクッ...♡
ぐう...
ぎゅる
ぐうう...
ぐりゅ...
ズズズ...
りゅ...

ぎゅるるるるる...

グリヘルちゃんの
身体の重みが
しっかり感じられる

ユフッ...

こぽっ

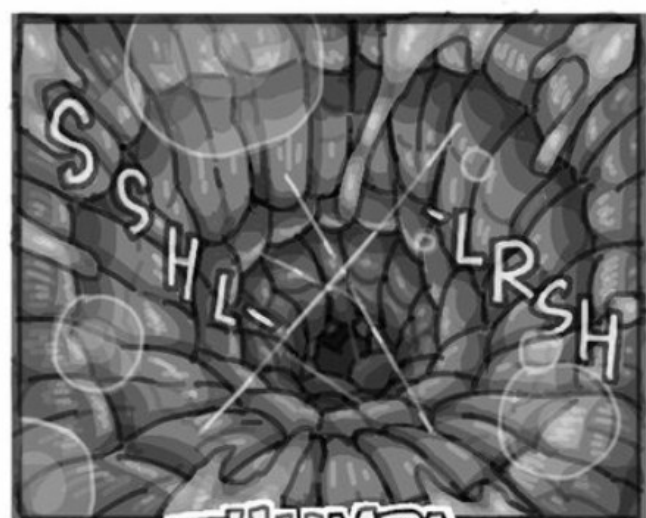
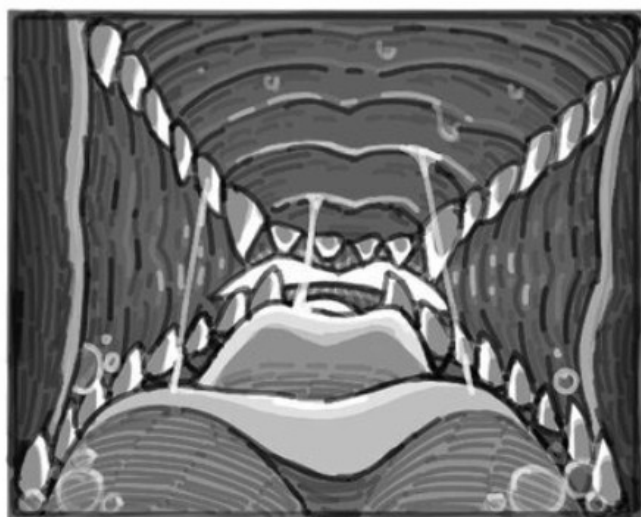
愛液も身体も
とても美味しかったよ
ごちそうさまでした♡

おわり



つれは。







THUMPA!



GL RK...

THUMPA!



SPLORT!

THUMPA!



THUMPA!



GLL RRK!

THUMPA!



SPLORT!

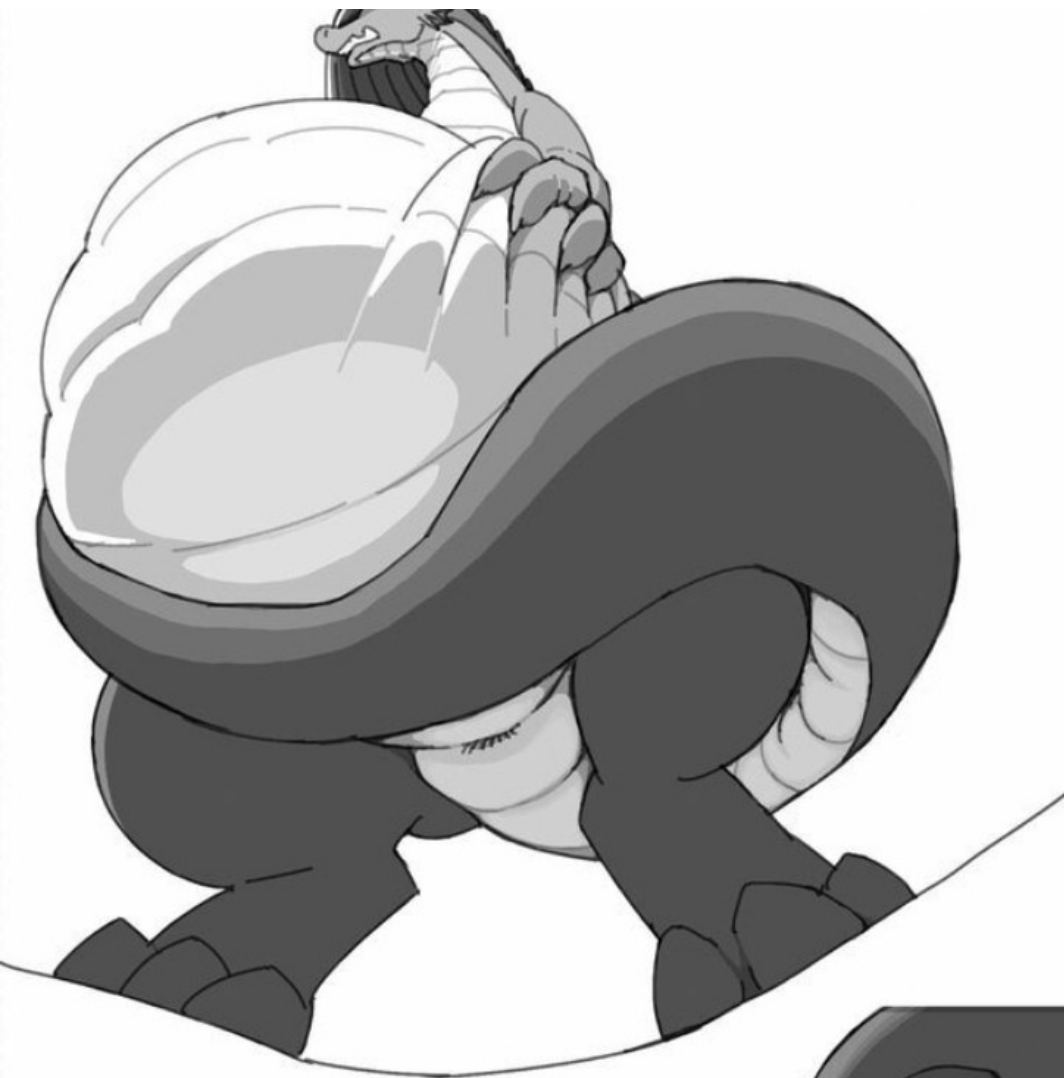
THUMPA!



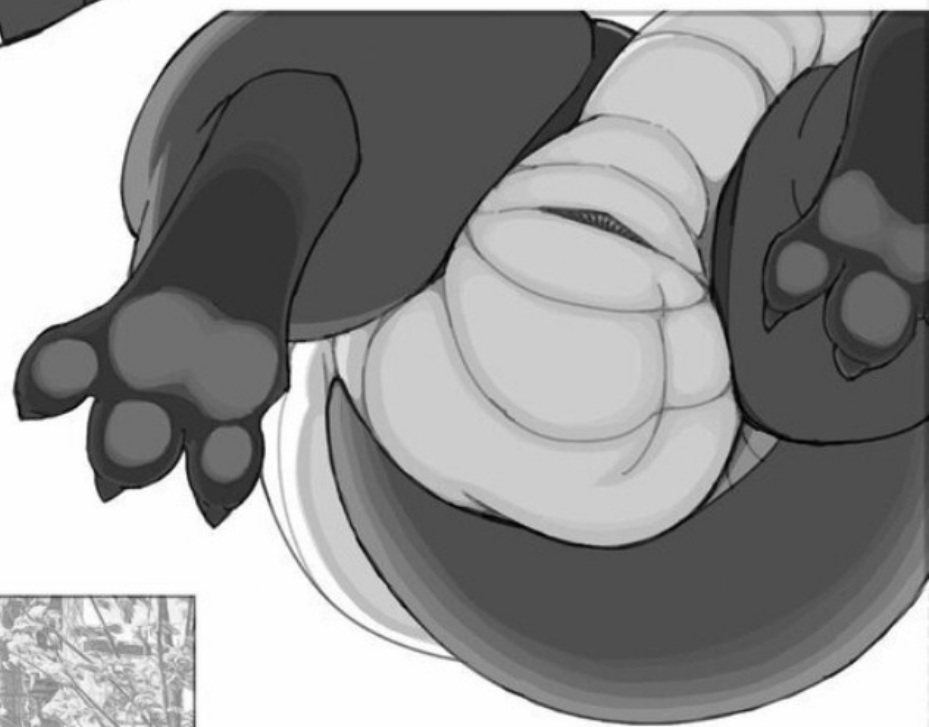








ゆっくり…
運ぶように歩くしか…



重い…

本当に重い…
もうやだ…



動かなくても辛いんだから

私の胃袋ちゃん…お願いだから
そんなに動かないでよ

THE END

気分
(基本的にいつも鬱)



ASHE アッシュ

- 彼女が外出中は
外に出ないで下さい
- 彼女は人混みが大嫌い
- 人込みで緊張すると
パニックになり
満腹になるまで
やけ食いを始める
- 胃の容量は
人間五人分
- それより多いかも

角飾り
(せいっぱいのオシャレ)

"ドラゴンは服を必要としないと考えている
つまり裸族"

ドラゴンサイズの特注イヤホン
(音楽よりもノイズの方が多いプレイリスト)

(右腕)
Fitbit
(基本時計機能しか使わない)

スーツケースを
改造したバッグ

3リットルの
ウォーターボトル



ASHE ANATOMICAL NOTES:

空腹時

満腹

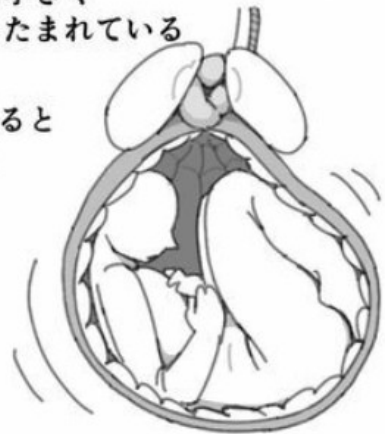
心臓は
胃のすぐ上にある

心臓の奥に食道



大きな胃は
心臓と肺の下に
普段は小さく
折りたたまれている

胃に獲物が入ると
外側に広がり
下に降る



胃の筋肉は
更迭よりも強い

彼女の心音は時に獲物を
落ち着かせる効果があり
消化が激しくなる前に
眠りにつかせる事ができる



しかし彼女が『食事』をする時は
たいてい不安や恐怖を感じており
パニックやストレスの影響で
とてもうるさい



これはこれは、
まさかここまでくる
物好きがいるとは



わざわざ私の供物となりに
来てくださるとは
殊勝な心がけです。
遠慮なく楽しませて
いただきましょうか。



さて、どちらで
楽しませて
いただきますよう

なっ…

ま、待ってくれ。
せめて弟だけは
見逃してくれ！



うぐ…



なら…
俺は一切抵抗しない。
玉碎覚悟で挑まれるのは
そっちも望まないだろう？



フフフ…
せっかくの玩具を
みすみす逃すと
お思いですか？



成程。
確かにここで自暴自棄に
なられて死なれてしまうのは
不本意ですね。

…いいでしょう。
そちらの彼は
見逃しましょう。

フフ：
私にも慈悲はあります
お別れを言う時間ぐらいは
待ってあげましょう

貴方にはこれから
私の玩具になって
いただきますからね

安心しろって、
別に殺されると決まった
訳じゃない

先に帰ってきてくれ

い、今からでも
逃げよう？

きつと
大丈夫だよ

オロ
オロ

それに…僕だけ
逃げるなんて…

元気だな

約束だ
俺も一切抵抗はしない
煮るなり焼くなり
好きにするといい

カラシ

ダッ！

そんな野蛮なことなど
するはずないでしょう？

それにしても…
わざわざ魔族との
約束事を守るなんて
人間にしては殊勝な心がけです。

まあ…
たとえ逃げようとしても
無駄でしょうがね

さて…

シュルン

びき…

びき…

そろそろ
私も我慢できなく
なってきたしまいました
ですから…

がばあ

いただきます♡

ぐ

ぽ





ふふ…どうです？
指一本使われることなく
弄ばれるのは。
私がこうして尾を動かすだけで

ぐうん

中の貴方を全身くまなく
弄って上げれるんです♡

ぐうん

ひぐん

少しは抵抗してくださっても
いいんですよ？

グニユレ

ぐん

グイ

それとも
気持ち良すぎて
考えられませんか

んうレ

ニュルルルレ

ふふ…
今までの玩具はすぐに
ダメになっていましたが

さす
さす

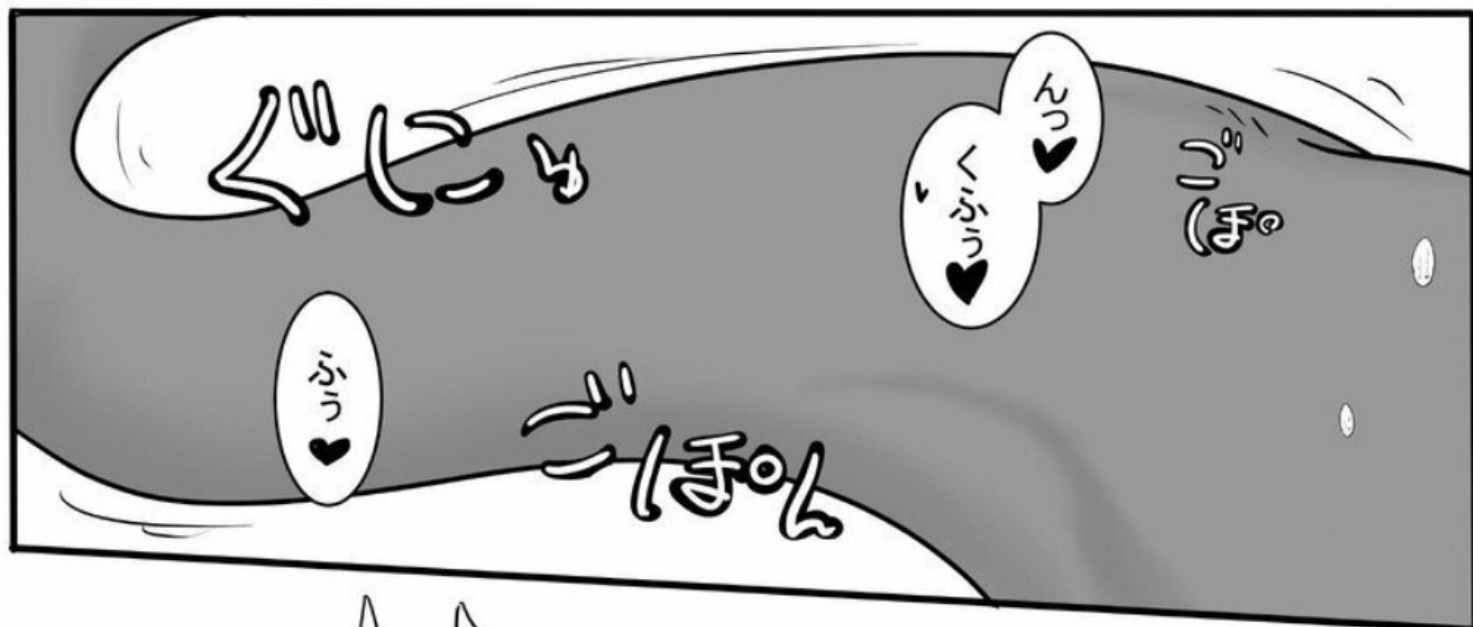
弟さんのために
頑張っているのでしょうか？
ではその頑張りに敬意を表して
指一本だけ使ってあげます…





ンクッ…♡
はあ…たくさん出しましたね
それに味もなかなかですね

ふふ、決めました
貴方とはして玩具ではなく
愛玩具として私の中で
飼ってあげることになります





ふふふ、一番奥にたどり着いた感想はどうですか
貴方たち冒険者とやらの最終目的地でしょう？

安心して下さいね、
そこは私が守るもつとも安全な部屋ですから♡

こっぴゅ

ある日から消息を絶った、世間を騒がせた怪盗。その名をローズという。アプリコット家の秘宝を狙う予告を最後に、そのまま消えてしまった怪盗には密かなファンも多い。警察や、自分こそが捕まえるのだと捜索に参加したファン、その誰もが捕まえることはおろかその姿を直接見ることも無く消えた伝説は近代の犯罪史に名を連ねることだろう。

さて。それはあくまで世間から見た彼女のお話。怪盗ローズは一体如何にして消えたのか、それを辿っていこう。



アプリコット家は近隣領の中でもそれなりに大きな家だ。数々の宝石を扱う商家で、その溜め込んだ資産は極小さなものであれば国家にすら比肩し得ると言われている。

その中でも、秘宝とされている一際大きな名も無き宝石はそれだけで一生遊んで暮らせる金銭が入ると言われている。また、その本来では有り得ない大きさから伝承に残る魔法技術に関わっているのではないかと噂されてもいた。

「そんな宝石なら、怪盗として狙うしかないわよね！」

ローズはそんな宝石を手に入れたという純粋な欲望で、いつもの通りアプリコット家に予告状を送った。

怪盗ローズは、怪盗としては変わり者である。本来であれば怪盗は例えばいわゆる鼠小僧的な役割だとか、もしくは純粋に富を集めたい

だとか、何かしらの善悪関わらず理由があってそれを行うものだ。

しかし彼女の場合は一から十までその品に対する好奇心で行われる。金銭的な欲も無ければ、コレクションしておきたいという気持ちも無い。過去には手にして満足した品を元の持ち主に返したこともある。

警察にとってはそれが自分達に対する挑発だと受け取られていたが、彼女にとってそれらは別に気にすることでもなかったようだ。

……ただ、盗まれる側において最早それはある種の災害と同義であつたという点はこの注記しておこう。



「此処がアプリコットのお家か……嚴重だと思っていたのにそれほどでもなかったわね、警備」

ローズはアプリコット家に侵入していた。警備の誰に見つかることもないまま、そして警報の一つも鳴らさないまま。

「まさか私が小さくなって正面から入ってくるなんて誰も思っていなかったんだろうなあ……」

そう、何のことも無い。怪盗ローズがここまで誰にも見つからず、捕まらなかった理由。それは彼女が自らと、そして触れたものの大きさを自由に小さく出来るという魔法が使えるからだ。

現代においては既に伝承の中にしか存在しない筈の魔法技術を用いた犯罪である。警察も涙目なのは間違いない。これが悪意に満ちた犯罪者であればどうしようも無かっただろう。

隙間、或いは誰かが入り口を開けた際にこっそりと侵入し、目的地まで移動。お目当ての品を見つけたら、警報があれば手にした後に自分ごと小さくなって警備をやり過ぎた後にそのまま出ればよし。金

庫などに隠されている品であれば、誰かが点検に来た際に中に入るか、僅かでも隙間があればその隙間より小さくなって侵入して、といった感じだ。完全なる密閉空間であれば流石のローズも無理であったかもしれないが、それでも大体は『既にいただいた』というブラフを送れば確認のために開けた傍から持ち去ることが出来ていた。

監視カメラにおいても、一瞬にして縮むためあたかも瞬間移動したかの様に見えてしまう。

重ね重ね、敢えて名付けるのであれば興味災害である。

「これがアプリコット家の秘宝ね！」

ローズはアプリコット家の秘宝の間に到着していた。部屋の中央には元の大きさであっても両手から優に零れそうなほどの宝石が鎮座していた。不可思議なのは、既存のどの宝石とも異なる反射光を伴っている点だろうか。形こそダイヤモンドカットの様ではあるが、明らかに光はダイヤモンドのそれではない。若干赤みがかっているゆえ、これはルビーであろうか。いや、それにしても色が淡い。ならばトパーズの亜種だろうか。

「すごい……こんな宝石見たことない……」

何より一番不思議な点は淡い光を自ら放っていることである。他の光源がほぼ無いこの部屋において、それはよりいっそう際立っていた。

「警報装置は……特に無し、特殊硝子も無いし……え、素置き？」

ここに至って初めてローズは少し警戒した。これまでの現場においては何かしらの対抗手段が必ず構築されていた。その悉くをすり抜けてきたローズであったが、まさか一切の措置無しというのは初めてであった。入り口や周囲の警備が厳重などであれば、それに任せたものと判断することも出来るが、アプリコット家においてはそれにも当てはまらない。まるで盗まれても構わないといった感じだ。

「あれえ……予告状、届いてたよね？」

物品に対する興味がほぼ全てを占めている彼女が怪盗を準えて予告状を送るのは、ある種のスリルを楽しむためでもある。その気になれば無予告でありとあらゆる品を盗み出せる彼女の、いわば自分に課した枷でありルールでもあった。

だがしかし、こうまでほぼ無警戒で盗めてしまうのもそれはそれで味気無いものだ。そんなローズの人間性を暴かれた？ まさか！「でも……とつても綺麗だし、ちよつと欲しいなあ……」

実物でも資料でもメディアでも見たことが無い類の秘宝を前に、純粹にローズの好奇心は屈していた。欲すら初めて刺激されていた。この場では盗まないにしても、せめて手にしてどの様なものか確かめてみたい。そんな気持ち勝ち勝った。

「ちよ、ちよつとだけ……」

特に警報装置も無いし、見張りも居ないし、手にとってみるくらいなら大丈夫だろうと、彼女は思った。自分は絶対に捕まらないし、盗めないものは無いという自信が仇になったのか、或いは先ほど抱いた警戒心を上回る秘宝への好奇心が崖からの一步を踏み出させたのか。

「えっ？」

彼女は、いや、彼女だからこそ警戒せねばならなかったのだ。現代において理外の理を用いる彼女だからこそ、その可能性を警戒するべきだった。

彼女が秘宝を手にとった瞬間、秘宝が纏っていた淡い光が、ローズの身体を包み込む。それは一瞬の出来事で、ローズがそれに気付いた時には手遅れだった。

光が再び秘宝の周囲に収まり、ローズの身体から離れた時、そこに残っていたのは――

「な、なにこれー?!」

まるで鼠の様な、否、鼠耳や尻尾が生えた半鼠娘と化した怪盗ローズの姿であった。



それから時間が少し流れて、彼女は何が起きたのかをようやく悟った。警備がそこで済んでいたのも、特に警報装置や金庫などの対応が無かったのも、全てはあの魔法罫があったからなのだと。

「わ、私以外に魔法が使える人が居るなんて……」

自分だけの特別な力だと思っていたのが運の尽き。鼠人族化という、種族変化と縮小化の複合魔法を罫として秘宝にかけていたのだろう。あの秘宝の不可思議な光は、見る者が見ればもしかすると一発でアウトだと察することができるものだったのかもしれないが、今更どんな思案をしたところで後の祭りだった。

現在ローズは他者の魔法で状態を上書きされているために自慢のサイズ可変魔法を使うことが出来ないまま、広大なアプリコット家の屋敷を彷徨っていた。

鼠人族化に伴って筋力や敏捷性にも変化が生じていて慣れず、要所で元の大きさに戻って素早く移動するのが彼女のメインスタイルだったために、終始縮小状態で移動するのは単純に疲れるものだった。小さな通路一つとってもこの小ささでは大広間とかわらない。

あの後、秘宝の間で誰かが来ないかと待っていたが誰も来なかったのだ。こうなってしまう以上は誰にも見つけられず捕まえることも出来なかった怪盗という肩書きなど気にしている場合ではない。すぐにも誰かに保護してもらって術者に罫の効果を解いて貰わなければ

この後の人生はずっとこのままだ。

「これじゃ本当に鼠さんだよお……」

唯一の救いは、彼女が普段から小さくすることに慣れていたことだろうか。それでもなければ自らに起こった出来事を飲み込めずに自暴自棄になっていたことだろう。不幸中の幸いというやつだろうか。

だが、正直なところローズは及び腰であった……というの。

——アプリコット家の主人や使用人達は皆、猫人族なのだ。

猫人族。個人によって度合いは様々であるが、概ね猫耳や尻尾を有する獣人系の種族。世間的には割とポピュラーであり、彼らの食事などもバラエティー番組などで誰もが知るところであった。

そんな種族の屋敷に仕掛けられた、鼠人族化の罫。見つければどんな目に遭うかは推して知るべしである。しかしだからといって、いとうどうしようもない状況だった。とにかく今は術者に会うしかない。それでもし、そうなったら——とローズが諦め気味の思考をしていると、通路の突き当たりのドアが少し……開いていた。

まるでローズを誘うかの様に。



そこは休憩室の様な部屋であった。そこまでの広さではないことから、恐らく使用人達専用の食事処であろうとローズはあたりをつけた。何故なら、食事には関係の無い部屋と言うのは有り得ないほどとても良い匂いが充満していたのだ。

さて。どんな達人でも、疲れが生じれば隙も生じる。

「も、もう無理……」

疲れた。足が痛い。お腹がすいた。

ミステリアスな神出鬼没の怪盗は何処へやら。其処に居たのは最早ただの疲れて弱音を吐くだけの少女に他ならなかった。

現在の時刻は夕方くらいであろうか。深夜に侵入するのはあまりにもありきたりではないかと思案したローズがアブリコットの屋敷に侵入したのが大体お昼過ぎ。そこから数時間は経過しているので凡そその程度の時間だろう。

ぐうとなるローズの腹時計もその確度を後押ししていた。

「う、ご飯……」

不思議なことに、此処に至るまで誰にも遭遇しなかった。遠巻きには音が聞こえるのだが、終ぞ人影を捕まえることが出来なかった。

「流石にこういう部屋なら、誰かはくるよね……？」

休憩室でも何でも良いが、此処から再び移動してと考えるには疲労が勝っていた様だ。しかし空腹がさらに勝ったのかローズはボルダリングの要領で良い匂いの元へと登っていく。普段であれば元の大きさに戻って一瞬で終わる様な登攀（と呼べすらしいものだ）が此度は愚直に登るしかなかった。

だが、その甲斐あつてかローズは遂に良い匂いの元に辿り着く。

「パンだあ……！」

空腹とは最高のスパイスとは良く言ったものであるが、今の彼女の疲労と空腹であればただのパンでもご馳走に見えたことだろう。自分と同じくらいか下手をすればそれ以上の大きさのパンなど、怪盗行為以外で特に自分の力を行使する気にもならなかった彼女が初めて見た巨大な食料である。

ジャムも何も無いが、贅沢は言つてられない。小さく千切つて食べ始める。

「うーん、おいしい！」

ただのパンではなくバター混じりだったのか、最高のスパイスと相まって素敵な食事をローズは堪能していた。

「はぁ♡ つまみ食いだってバレなければいいんだもんねえ♡」

ドキッとした彼女は、不意に至近距離で聞こえた声に反応して振り返った。この屋敷に来て初めて聞く声であった。寡黙なガードでもなく、知的な商家の者とも思えない可愛げなその声は、その言葉を信じるのであればただつまみ食いに來たメイドのものであった。

「今日はどんなパンが……あれ？ あれれ？」

視線が合い、そして見つかつてしまった。凄腕の警部でもなく、同業者でも無く、ただの一般人の猫メイドに。

言葉を交わす間も無く、すぐさま尻尾を掴まれて持ち上げられる。

「わわ、うわあっ？！」

「うわぁ♡ 可愛い鼠さん♡ もしかして噂の怪盗ローズ？」

そのまま宙ぶらりん状態になる。ローズの目の前にはぶらぶら揺れる猫メイドの大きな顔があった。尤も、ぶらぶら揺れているのはローズの方なのだが。

揺れが収まると、ローズはメイドに問いかけた。

「あ、あの！ 私に掛かって鼠になっちゃったからミストレスさんに会いたいんだけど——」

ミストレス。アブリコット家の女主人と呼ばれる人。防犯上の観点か、名前だけが知られる中でローズと同じく誰もその姿を直接見た者は居ないとされる商家の主。尤もそれは同じ屋敷の使用人であれば例外であるだろうとローズはあたりをつけてその旨を伝えた。

メイドから返ってきた答えは単純だった。

「え？ ダメだよ♡ 貴女は今から私が食べちゃうんだから♡」

反論する間も無く、ローズがその言葉の意味を理解するよりも前に、メイドは恍惚の表情で口を大きく開けた。猫人族特有のザラザラとした舌に唾液が垂れている。

「や、やめ」

「やめてあげないより♡ いただきます♡」

尻尾を掴んでいた手が離される。ローズがそのままメイドの舌に落ち、そのまま絡め取られて口の中に納まるまで数秒も無かった。

「嫌っ！ いだ、いだいっ！」

ザラザラとした、針の様な、或いは小さな無数の硬い舌を連ねたかの様な舌が、ローズを味わうために何度も表皮を削る。血が出る様なものではないが、それでも痛いことには代わりは無い。右に左にと舐め回され、その後に喉奥へ誘われるのに時間はそう掛からなかった。

「ちよっと、やめ」

ごつくん……

「……はぁ♡ 初めて見たけど美味しかったぁ♡ 怪盗ローズ♡」

うつとりとした表情で、小さな鼠を生きたまま呑み下したメイドが一人、其処に佇んでいた。

そして少しその余韻を楽しみ、胸に手を当て、そして腹部を撫でた後に元々の目当てだったパンを数個つまみ食いし、メイドは戻っていった。

実に呆気の無い最期。これが怪盗ローズの真実。

鼠娘となって猫娘に食べられて終わり。それが彼女の最期の記録だ。

了了

——
本当に？

現在ローズは他者の魔法で状態を上書きされているために自慢のサイズ可変魔法を使うことが出来ないまま、広大なアプリコット家の屋敷を彷徨っていた。

通路の突き当たりのドアが少し開いていたが、自分の目的はあくまでミストレスと接触することだと考えたローズはそのドアを無視した。屋敷の構造上、恐らくは広間でも何でも無いだろうし、そんな所には居ないだろうと。

そんなわけで再び彷徨い始めた彼女が辿り着いたのは、白い部屋であつた。心做しか清潔感が漂う部屋。

そんな部屋の中で、ローズは一人の女の子を見つけた。綺麗な水色の毛並みを持つ耳と髪を持つ猫人族の少女。病院のベッドを彷彿とさせるその上で半身を起こしながら、何かの本を読んでいる。

今のところは他に誰も居ない様子で、それはローズにとって願っても無いチャンスであつた。

「おーい！ おーい！」

引き出しの突起や小さな窪みを駆使して器用に壁際を登りつつ、ローズは少女に声をかけた。小さくなっているゆえ、それなりに声を張り上げながら。

「……？」

やがて少女の耳にその声が届いたのか、一瞬耳をピクンとさせた後に、少女は本に手を掛けたまま辺りを見渡した。

「ここだよー！ こーい！！」

恐らく頻繁に果物が乗っているであろう小さな机に登りきったロー

ズは大袈裟に手を振って存在を伝える。

「……えっ?!」

そして遂に少女はローズの存在に気付いた。もしもベッドに寝ていなければ、後退っていたでいたであろう程に驚いて。

「へえ、貴女がああ怪盗ローズなの……」

少女との接触は、結果的に正解だった。ローズのことをどうするでもなく、ベッドに備え付けられた病食用の板を展開して、其処にローズを乗せてくれた。そのまま自分がどうしてこうなったかをローズは少女に語り、少女はそれを興味津々で聞き続けた。

「噂の怪盗ローズってこんなに小さい鼠さんだったのね」

「待って？」

「……と、そんなやり取りもあつたが最終的には伝わったらしい。」

「「どうしよう……」」

無論、だからといって素敵な解決策が浮かぶわけではない。

少女——カリン曰く、ミストレスたる彼女の母はどうやら商談のために国外に赴いているらしく、帰ってくるのはある程度先になりそうであるとのことだった。

どうしたものかという二人の声が重なるも、応えるのは夜を思わせる鼻の鳴き声のみ。見上げると、窓からは星明りが差し込みそうな夜空が見えた。

「とりあえず、お母さんが帰ってくるまで匿ってあげるね」

もう夜だからと部屋の明かりを消して、布団に収まったカリンが笑顔でローズに告げる。それは幸運中の幸運だった。

お母さんに会った後に自首するかどうかは貴女が決めてねと、そう言ったカリンは、枕を真ん中から少し寄せ、ローズのためにと畳んだハンカチを横に置いてそのまま眠ってしまった。

「……」

ローズはカリンの優しさに触れ、恐らく初めて盗みに対して罪悪感と呼ばれるであろうものを感じていた。

これまでの盗みでは、結果的に大きな被害こそは無くとも大多数に迷惑を掛けてきた。今回のアプリコット家の盗みだって、もし成功していたならその秘宝を自分がどうしていたかと考えて、ローズは暗い気持ちになった。

曰く、カリンは原因不明の病であるらしい。死に至る様なものではないが基本的に身体が弱く、ベッドから出る機会はまだ無いらしい。メイド達に頼んで用意してもらおう本や、暇潰しのための教材が彼女の全てであるとのことだ。

今、ミストレスたるカリンの母が国外で大きな商談をしているのも、実は自分の治療費を稼ぐためなんだと申し訳無さそうに告げるカリンに、ローズは何も言えなかった。

秘宝はアプリコットの象徴。代々続く大商家である証。果たしてそんな秘宝が、アプリコットの資産の中でも最大の価値を持つ秘宝が盗まれればどうなるか。ミストレスが娘のために秘宝を売り払って何とか治療を施そうとし、周りに止められて泣く泣くその手段を諦めたという話も聞いてローズは後悔と罪悪感のどん底に叩き落された。

鼠人族化という、事実上の無力化の罠を仕掛けるのも分かる。恐らくは絶対の自信があるのだろう。また、他の設備を増やして点検者が誤って罠を発動させないためにシンプルにしているのでは、というのはカリンの言葉だ。想像も多分に含んでいるとのことだが。

それほど自信のある罠に、それほど大事な秘法を狙った怪盗が掛かりました。

……さて、謝ったところで素直に元に戻して貰えるでしょうか？

先程感じた申し訳無さと、答えの分かりきった問いに頭を抱えつつ、ローズはハンカチの布団で寝ることにした。

兎にも角にも、カリン曰く――罠の術者たるミストレスが帰ってこないことには話が進まないのだ。



メイドやメイド長に見つかるとどうなるか分からないからと、誰かが来ればカリンの布団の中や枕の下にローズは隠れた。食事は彼女の分を少し貰い、飲み水で塗らしたハンカチで身体を拭いてもらった。

嫌な顔一つせず、優しくそれらを行ってくれたカリンにローズは最初こそ恥ずかしいと抵抗したものの、結局抗えずに素直に受け入れた。特に何事も無く、そんな日が続いた。

カリンは外の世界がよく分らないらしい。だから、ローズはせめてもの恩返しと自分の知る外の世界を伝えて聞かせた。カリンの疑問にローズが答える、そんな二人の一問一答は深ける夜の内緒話として続いたのだった。

そんな二人が仲良くなるのに、それほど時間は掛からなかった。



テレビやスマートフォンがカリンに与えられなかったのは、意地悪ではなく外の世界への希望を持たせてより辛い思いをさせないためで

はないかというローズの予想にカリンがなるほどと頷いた昼下がり。事態はようやく動き始めた。

コンコンと、扉がノックされる。元々最初にローズが忍び込んだ時の様に換気のために少しだけ開けられている扉だが、メイド達が入る時は大概ノックをしてから入室していた。

いつもなら、凡そ一時間から二時間おきに。大体は決まった時間に。そう、だから今回のそれはイレギュラーだったのだ。

「お嬢様、失礼致します」

その声はメイド長のものだった。

「わわっ、どうしよう！」

いつもなら、誰も来ない時間。二人の歓談の時間に突如として響く、ノックの音とメイド長の声。

位置も悪かった。丁度、ローズはカリンの手のひらに乗って話をしていたのだ。今からではギリギリ布団や枕に隠すのは間に合わない。

悪気は無かった。ただ反射的に、隠せる場所を探して焦ったカリンが咄嗟にとった行動は。

「……ごめんねローズ！」

「え、ちよっ」

ローズを自分の口の中に隠すことだった。

「……？ お嬢様、誰かと話しておいでですか？」

「……！！……？！！」

辛うじて、メイド長には見つからなかったらしい。事態を理解していないローズの悲鳴がカリンにだけ伝わる大ききで口内に木霊する。

「それよりもお嬢様、朗報で御座います。あと数日でお母様がお戻りになれますよ。今回の商談も上手くいったとのことですよ」

それはカリンにとって本当に朗報だった。

なるほど、本来なら時間通りにしか来ないメイド長が急いで伝えにくるのも道理だとカリンは思った。

だがしかし、この状況はあまり良くない。咄嗟にローズを口に含んでしまったが、良く考えれば出さなければ返事も出来ない。しかし出してしまえばその結果は凡そ予測できるものだ。

「……お嬢様？」

朗報を伝えるにきた笑顔のメイド長の顔が、怪訝に変わり始める。普段のカリンであれば喜ぶ話題なのに、何やら口元を押さえてもごもごしていればその反応も当然だろう。

カリンは冷や汗が伝うのを感じた。そしてその後の結末を天秤にかけて、冷静に判断を下した。

舌で、ローズを奥に迫りやる。ローズが抵抗するが、その抵抗はあくまで鼠のもの。猫人族にとってそれは何でもない。喉肉にローズの足が触れて、えずきそうになる。だから吐き出す前に、一気に。

ごきゅっ……

「ん、はあっ……え、ええっと、教えてくれてありがとうヒマワリ。とっても嬉しいわ！」

無理に呑み込んだ苦しさで涙を浮かべつつ、無理矢理笑顔を作ったカリンはヒマワリ、つまりメイド長に返事をした。

「……ええ、喜ばしいことです。お嬢様もお喜びの様で、急いで伝えに来た甲斐がありました」

メイド長はすぐに笑顔に戻り、その後少しだけ会話をしながらカリンの部屋から去っていった。心配そうに、何かあればすぐにでもお呼びくださいませと残して。

ずるりと、カリンの喉を滑り落ちる。病弱で優しい彼女からは想像もつかない食道の締め付けが、無理矢理ローズを下へ下へと運んでいく。やがて足先が自由になり、次に膝から腰が宙に浮き、そして最後には胸元が抜けるとバシヤリと落ちた。

くぐった場所は噴門。カリンの胃袋の入り口。激しい鼓動が、ドクドクと鳴り響く。

「ふはっ……げほ、げほっ」

カリンの胃液を飲み込んでしまったローズは、その痛みに咽込んだ。何も見えない暗闇の中で混乱するが、カリンの身体を通して聞こえてきたくぐもった会話を聞いて、その行動の意味を悟る。

「先に言って言って言っても、そんな時間は無かったけどさ……」

いくら自分が小さいとはいえ、まさか食べられるなんて。盗みの際は普段から小さくなる魔法を多用するローズも、自分がそうなるなどと考えたことも無かった。

恐らく彼女は自分を隠すために無理矢理呑み込んだのだと悟ったローズは、なるべく胃袋を刺激しない様に手探りで胃液が溜まっている箇所を探し、其処に乗り上げた。

可愛らしいカリンからは想像も出来ない臭いだ。自分の体内もこんな感じだろうか？とローズは考えた。何も見えないが、恐らく見えたのならグロテスクな肉壁が広がっていることだろう。触れた脈打つ胃壁からローズはそんな想像を抱いた。無論、胃液が染み出す前にすぐに手を離したが、手のひらに残る彼女の脈打つ内臓の感触は……そう簡単に忘れはしないだろう。

激しい鼓動が鳴り止まない。呼吸は無理矢理抑えているのか普段とそう変わらないだろうが、長くは保てないだろう。

やがて、メイド長を見送るカリンの言葉を聞いてローズは安堵した。もう少しできつと吐き出して貰える。そう信じて。

「……はあっ、はあっ」

カリンはドクドクと激しくなる鼓動を抑える様に胸に手をあてる。咄嗟の行動とはいえ、ローズを呑み込んでしまった。短い時間とはいえ、成り行きとはいえ、外の世界を教えてくれた小さな友達を呑み込んでしまった。

メイド長が完全に去ったと判断したカリンは、零れる涙を拭いてもせずに自らの胃袋に手を当てて集中する。自分の体内で、少しでも動いている感触がある。大丈夫、ローズはまだ生きています。

カリンは未だ使ったことの無いベッドの横にあった洗面器を手に入れた。そしてローズを吐き出そうと試みる。

「え、んえっ……おえっ……あ、あれ？」

そう。長いベッド生活で、未だ使ったことの無い洗面器だ。それが何を意味するのか。

喉に手をつっ込んで、全く胃の中の物が喉を迫り上がってくる感覚が無い。布団から完全に出て、四つん這いになってもそれは同じだった。

お腹の中で、先程までは大人しかったローズが暴れている。自分の胃壁をべちべちと叩く感触がある。胃の一箇所を無理矢理開けようとしている感覚もある。しかし其処までだった。

「んえっ、おえっ……やだ、やだ、ローズ……っ！」

カリンはパニックになった。後で吐き出せば、メイド長に『処分』されるよりはマシだと思つてその判断を下したのに、吐き出せないのであれば自分が『処分』するのとも変わらぬではないか、と。

今になって、自分の友達だから『処分』はしないでとヒマワリに伝えた方が良かったかもしれないと後悔が押し寄せてくるが、残念ながら先立たないのが後悔というものだ。今となつてはどうしようもない。普段から焦りを感じていた自分の身体に明確な憎悪を覚えつつ、それでもカリンは必死にローズを嘔吐しようと何度もえずいた。その結果。

「駄目、駄目え……ヒマワリ、ヒマワリ！ 助けてえ！」

出来たのは結局、他人を頼ることだけだった。どうしようもなかったのだ。ふと胃袋に意識を向ければ、もうローズの動きは感じられなかった。

あの時ローズを丸呑みしなければ。あの時素直にヒマワリに事情を話していれば。或いは吐けないと分かつてすぐにヒマワリを呼んでいれば。後になればいくらでも思いつくが、それらは全て実行されなかったのだ。だから結果も自ずとそれに沿つたものにならぬ。

「お嬢様！ どうなされまし……お嬢様？！」

慌てて飛んできたメイド長が見たものは、凡そ普段の彼女からは有り得ない体勢で泣き喚きながら自分に助けを求める主人の娘の姿だった。

その後、怪盗ローズを見た者は居ない。残念ながら。

了了

——
本当にそれでいいの？

現在ローズは他者の魔法で状態を上書きされているために自慢のサイズ可変魔法を使うことが出来ないまま、広大なアプリコット家の屋敷を彷徨って――

「……見つけましたよ、怪盗ローズ」

えっ、という声をあげる間も無く不意にローズは掴み上げられた。急に現在のローズの大きさからして相対的に何十メートルも一気に持ち上げられたせいで吐き気と眩暈がする。

くらくらする視界が段々と戻る中で、ローズは自分を持ち上げた相手を見た。

黒髪に、透き通った碧眼。こちらを睨む様に見つめるその顔は何とも凜々しかった。

「だ、誰？」

しかしローズの記憶にそんな相手は居ない。というよりも、自分が怪盗ローズだと知っている相手すら心当たりが無い。ましてや、罠にかかって鼠人族化している自分を怪盗ローズだと見抜く相手など。

いや、或いは鼠人族化しているからこそ見抜けたのかもしれないとローズが考え込んでいると、相手が答えた。

「私の名はヒマワリ。アプリコット家でメイド長を務めております」

何処か聞き覚えのある名だが、やはり覚えは無い。

「……とりあえず場所を変えましょう。貴女の処遇はそちらで決めます。覚悟してくださいね」

そう。咄嗟のことに疑問が勝っていたが、その言葉と共に湧き上がってくる感情の名は恐怖だった。

鼠人族化した盗人が、猫人族に見つかればどうなるか。少し考えれば分かることだ。

「た、食べ」

「発言は許可しません。次、許可無く口を開けば握り潰します」

いいですね、と静かな怒りを感じさせる言葉に、ローズは食べないでと言い切ることが出来なかった。

そして着いたのは、恐らくメイド長――ヒマワリの自室と思われる部屋だった。厳格な振る舞いとは裏腹に、少し可愛げな部屋だ。

しかしその威圧感に、ローズは気を緩めることは出来なかった。処刑を待つ死刑囚の様な気持ちで、震える身体を抱き締めることも出来ないまま、ただただヒマワリの言葉を待つばかりだった。

「それで」

丸椅子に腰掛け、これまた丸いテーブルにローズを置いて、ヒマワリはローズを心做しか睨みつけながら言った。

「貴女は一体、ミストレスとどの様な関係なのですか？」

「……はい？」

ローズにとってその質問は、意味は分かれど意図が分からなかった。それは、間違い無くアプリコット家の主人のことだろう。しかし、会ったことのない人物との関係を尋ねられても答えられるわけがない。

だがしかし、自分に向けて刺す様な視線でそう問うヒマワリに、ローズは素直に知らないとはつきり言うことが出来なかった。

その結果――

「い、いやあ、関係と言われても」

「濁す様な仲なのですか？」

ヒマワリの睨みつけが凄みを増す一方だった。おまけに、食い気味にローズのしどろもどろの要領を得ない言葉をバツサリと切って捨て、詰問を浴びせかける。

ローズはまるで叱られた子供の様に口竄るが、それも保てないと判断したのか、頭を下げてようやく素直に答えた。

「すみません、初対面どころか会ったこともないです……」

あまりの威圧感に涙目になりながら答えたローズは、ヒマワリの言葉を待った。しかし、再び食い気味に来るかと思った言葉が来ない。

不思議に思ったローズが恐る恐る頭を上げる。

そこには驚愕に顔を引きつらせたメイド長が居た。

「……えっと、その」

自分のことを、信じられないものを見たかの様な表情で見るヒマワリに対してローズはどう対応すればいいか、今度こそ分からなかった。ただ、なるべく余計なことを言わない方が良さげなのは分かった。

そんな中、ギリツという音がした。顔を上げていたローズは残念ながら、何処からした音なのか分かってしまった。ヒマワリの歯である。

「ええ、ええ。そうですか」

一瞬の後、元に戻る。しかし、言葉はなるべく丁寧であるが、その心情を最早隠す気は無い様だった。青筋を立てながら、笑っている。

ガシツと、ローズの身体が再び掴まれる。

「ヒ、ヒマワリさん？」

ローズとしてはただただ恐怖でしかない。

いきなり見つけられたかと思えば自分が自分であると看破され。

口答えをすれば握り潰すと脅されそのまま持ち去られ。

睨みつけながら、知らない相手とどの様な関係を問われ。

素直に答えたら齒軋りをした後に青筋を浮かべられ。

そしてそんな相手の手中に再び文字通り収められてしまった。

元々、向こうにとってはその賊でしかない自分が、捕らえられた後にどの様な目に合わされても文句は言えないが、幾らなんでもあんまりじゃなからうか。

そんな気持ち隠しきれず、涙を浮かべたままヒマワリを見る。

「そうですか……そういうことですか……」

しかし件のヒマワリは視線を落として、握り締めた自分を他所に何事かを呟いている。その感情は決して良くないものだということしか分からないローズは本当に握り潰されない様に抵抗はしなかった。

「つまり、貴女はミストレスとは何も関係無いただの賊……」

そういうことでしょうか？

そんな貴女がどうなっても、文句は有りませんね？」

呟きを止め、自分に視線を合わせたヒマワリのその言葉を聞くまでは。

「ひっ……ぎゅっ」

その言葉を言い終えるや否や、ローズが暴れて逃げ出そうとする前にぎゅっと握る手に力が込められる。

肺から空気を搾り出される様な圧迫。手のひらを通して感じる鼓動。手汗がじわりと染み込む。

潰された蛙の様な声を絞り出したローズは涙目で大きな手の主を見る。其処には、先程までの不可解な怒りを向けるメイド長ではなく、何事かを決めた様に自分のことを真つ直ぐ見下ろすヒマワリが居た。

「私が。貴女を、食べます。」

せめてもの情けで丸呑みにして差し上げます。

絶対に逃がしません。生かして帰しません。

諦めてください。貴女はここで終わります」

そして死刑が宣告される。凡そ予想通りの、それでいて最も聞きたくない類の。

舌舐め擦りすらなく、ヒマワリの口が開かれる。万に一つも逃さない様に、投げ入れることはなく、口の中に徐々に挿入される。

「ひっ、やだ、やだやだやだ！ 食べないで！」

ごめんなさいと何度も叫ぶが、その叫びはヒマワリの口内に木霊するだけだ。もう外界にあるのは足だけだが、その足もグツと押し込まれて口内に納められてしまう。

ようやく大きな手のひらから自由になるも、そこはもう肉の檻。ヒマワリの、生々しい——若干震える様な——息遣いが聞こえる。

ローズは何とか逃れられないかとヒマワリの歯をべちべちと叩くが、びくともしない。絶対に逃がさないという意思表示か、唇の隙間すらなく完全なる暗闇である。

客観的に言うなら、ヒマワリは同性のローズであつても思わず声を漏らす様な美女である。こんな出会いじゃなければ、ともすれば持ち前の興味で不躰にもアタックをしたかもしれない。

そんな美女に怒りを向けられた上に今、吞まれようとしている。

唾液に濡れる口内、生々しい息、其処が生き物の体内であると言わんばかりの液体音。

例えどれほどの美女のものであろうと、今まさに喰われようとしている被食者からすれば全てが恐ろしいものでしかない。

「出して……出してよお……」

ローズは遂に泣きだしてしまった。暴れても、謝っても出してはもらえない。戻る道は無く、行く道だけ。その行く先はどう足掻いても確実な死が待っている。地獄への片道切符にも程がある。

ローズが泣きだし、その場にべたと座り込んで動かなくなつて少ししたところで、不意に地面が傾き始めた。すなわち、それはヒマワリの舌だ。いや、舌だけではない。恐らく口内自体が傾いている。

そう、ローズにはもう見ることは叶わないが、ヒマワリは徐々に上を向いていった。動かなくなつた口内の獲物を呑み下すために。

「っ！ やだっ、たすけっ、たすけ」

ずるりと、足を滑らせる。傾斜に沿つて滑る身体は、唾液に塗れた舌を掴むことが出来ずにそのまま滑り落ちて行く。

足に、何かが触れた。それが最後だった。

ごっ……きゅっ……

決定的な音がして、肉々しい穴にローズの身体が押し込められる。身体が、ヒマワリの喉肉に締め付けられる。唾液と一緒に下へ下へと運ばれていく。どくんどくんという大きな鼓動が足元から真横に、

やがて上へと動いていく。否、動いているのはローズの方である。

そして、バシヤリという音と共にローズの身体は本当の肉の牢獄に囚われてしまった。刑期は、きつと溶けて死ぬまで。

元々胃液が溜まっていたのか、既に腰程までが浸かってしまっている。ビリビリとした痛みが、徐々に徐々に広がっていく。

狭い胃袋の中で、何とか助かる場所は無いか手探りで探す。一切の光が無い暗闇の中で分かったのは、既に胃液が溜まっているせいである場所が無いということだった。

「やだああああああああガボポッ」

痛みと恐怖に耐えられなくなり、遂におかしくなって叫んだローズは、不意に頭上から大量に流れ込んできた液体に沈んだ。口に入り込んだ味から、銘柄等には詳しく無いもののそれが少なくとも紅茶であることが分かったが、今はそれどころではない。

「ごくん、ごくんとヒマワリが紅茶を嚥下する音が聞こえる。断続的に滝の様に流れ込んでくる紅茶が、元々溜まっていた胃液と混ざり合って水位がどんどん増して行く。」

「がぼっ、げぼっ、げぼっ……え、もう天井……ごぼっ」

そのまま、胃液と紅茶の交じり合った液体が胃袋を満たすのに然程時間は掛からなかった。弱酸性の液体が、ローズの鼻や口から入り込んで体内を冒していく。酸素を徐々に消費して失っていく身体は、ただただ二酸化炭素を泡として吐き出すことしか出来ない。

果たして、生きたまま足元から消化されるのと、腹の中で溺死するのと、どちらがマシだっただろうか。

——私が、私達が断ち切らないと。

ローズは酸素を失って暗闇の中で白く染まる意識の中で何故か、涙混じりのヒマワリの……そんな言葉を聞いた気がした。

了了

——忘れたままでいいの？

◆ ◆

現在ローズは他者の魔法で状態を上書きされているために自慢のサイズ可変魔法を使うことが出来ないまま、広大なアプリコット家の屋敷を彷徨って——ふと、殺気を感じて物陰に隠れた。

特に、第六巻の類は持っていない筈だが、何故だか胸騒ぎがして咄嗟に隠れたのだ。誰かに会って現状を説明することが最優先ではあるのだが、ふと思ひ浮かべた猫人族に捕まった鼠の末路がそうさせたのだろうか。

「……此処に居ると思つたのですが。」

場所が変わつたのでしょうか……厄介な……」

影が差し、鈴を転がすような声がしたかと思うと、其処には巨大な猫人族のメイドが居た。その場で留まっていれば、ともすれば踏み潰されていたかもしれない。先程の胸騒ぎはそれを警告していたのだらうか。

「危機的状况になれば働くシックスセンス、かあ……」

それなら、秘宝に触る前に働いてよお」

とほほ、とうな垂れつつローズはメイドが去るのを待った。最後に聞こえた『厄介な』という単語が、何やら不穏な空気を醸し出していたためだ。今出て行くことはあまり得策ではない気がする。

やがてメイドが去ると、ローズは再び歩き出した。反対方向に歩き出せば、一周してきた今のメイドにぶつたり出くわすかもしれない。だから後に続く様にして歩き出し、角を曲がった。

途端。ローズは宙を飛んでいた。否、吊るされているというのが正しいだろう。腰の部分を何かに掴まれている。

「大方、そんなことだろうと思いました。」

さて、何か言い残すことはありませんか？」

名も知らぬメイドが、あまりにも殺意に満ちている。確かに、捕まればそうなるのではないかと思案もしたが、ここまであからさまだとは思わなかった。

「ま、待って！ 話せばわか」

「私は貴女と話すことはありません。いただきます」

一方的な会話拒否と捕食宣言。そんな、そんな烏鹿な。

暴れても微動だにしない自分を掴む手と、あーんと開かれた迫る口にローズは死期を察して思わず目を閉じた。しかし——

「ヒマワリ、何をしているの」

ローズは目を疑った。

其処には、淡く輝くぼやけた幽霊の様な人影があつた。魔法を扱う身ではあるが、ローズはここまで非日常な光景を見たことは今まで一度も無かつた。尤も、秘宝もそうではあるしローズ自身だって十分に非常識ではあるのだが。

「ミストレス……いえ、私は」

「……ローズを見つけたのね」

ミストレス。アプリコット家の女主人。明らかに魔法であるこの人影の主がその人なのだろうか。

そんなことより。

「あ、あの！ 私、ローズ！ ローズです！」

少なくとも、確実に自分を始末しようとしているこのメイドに何かされる前に、ミストレスに接触しなければ文字通り明日は無い。

ローズの生存本能がそう告げるのだ。明日どこるかあと一時間も無いだろうと。握られているせいで使えない手足の代わりに声をあげる。

「ねえ、ヒマワリ」

「はっ」

すると、ヒマワリと呼ばれたメイドが人影に向けて僅かに頭を垂れる。力が抜け下げられた腕はさながらフリーフォールの様だ。ローズのか細い悲鳴を他所に――

「連れてきて」

「……かしこまりました」

ミストレスの方から、ヒマワリへとローズの望む命令を下した。願っても無いことだった。

ヒマワリが人影に見えない様に、ぎゅっと手に力を込める。身体を握り締められたローズは、肺の中の空気を搾り出されつつ、ギリギリ助かった……と安堵した。

そのまま意識が落ちたのは、果たして安堵のせいか、それとも酸欠のせいだろうか。



次にローズが目覚めたのは、カーテンで三方を遮られた場所だった。其処はベッドの上で、ローズは柔らかな手のひらに優しく握りこまれていた。

「此処は……」

ローズはもそもそと、手のひらの揺り籠から乗り出す。一体自分を手のひらに乗せているのは誰だろうと。少なくとも、あの恐ろしいメイドでは無さそうだ。

「あら、目覚めたのね。よく眠れた？」

其処には綺麗な水色の毛並みを持つ耳と髪を持つ猫人族の女性が居た。にこやかな笑顔を向けている。メイドとは大違いだ。

「は、はい……ええっと、貴女が？」

先程までとは打って変わった境遇にやや戸惑いつつ、ローズは尋ねた。貴女は件の人なのですかと。

「……ええ、そうよ。私がアブリコツト家の主人、ミストレス」

「貴女が！ ああ、良かった……た……？」

ミストレスという単語に反応し、つい喜んでしまうローズであるが、違和感を覚えて言葉尻を濁す。

違和感は二つ。

答える前に、少しかだけ彼女が悲しそうな顔をしたのは何故だろう。そして、その彼女の言葉がすつと胸に落ちないのは何故だろうと。

「……ローズ？」

うーん？ と考え込むローズに、ミストレスの言葉が掛けられ現実引き戻される。若干怪訝な様子で覗き込むその瞳は透き通っていた。「いやいや、なんでもないの。なんでも……」

久方ぶりに自由だった両の手をぶんぶんと振り、ローズは誤魔化した。それよりも、話すことがある。

「あの、えっと、畏のことなんですけど――」

「無理よ。残念だけど」

バツサリという表現は、こういう瞬間にこそ相応しいだろう。何が無理なのか。聞き返すまでもない。

「……………えっと……………えつ、と」

ローズは泣きそうだった。否、頬には既に涙が流れていた。自分は犯罪者である。それは重々承知している。

だがしかし、それはここまでの仕打ちを受ける程の罪だろうか。

この先ずっと、鼠人族の姿のまま。この大きさのまま。そんな考えが、ローズの頭の中を何度もぐるぐる回っていた。

しかし、それだけでは終わらない。

「もう一つ、貴女に言わなきゃいけないことがあるの」

「え……？」

ローズは涙を拭って、上を、ミストレスの顔を見る。その表情は、何故か自分よりも苦しげだった。逡巡した後、ぼつりと問う。

ねえ、ローズ――

「――貴女、鼠人族の平均寿命って、知ってる？」

その言葉を聞いて、その意味を咀嚼して、飲み込めない。飲み込んだら、今度こそ終わってしまう。あの罫は、そこまで再現しているのか。

「一年から、長くて……長く、て……さ、三年……？」

「ええ、その通りよ。……私が言いたいこと、分かる……？」

優しくも厳しい、現実を叩きつける言葉が、無理矢理意味を嚙み下させた。吐き出したいのに、吐き出せない。つまりはこうだ。

「わ、わた、私……死んじゃうの……？」

その長さからして、余命宣告と代わり無い。

鼠人族の姿になった時点で、食べられるかもだなんて想像はしていたが、寿命まで変化しているなどとは終ぞ想像だにしていなかった。

食べられて終わりという結末よりも、優しい筈なのに怖い。

「……ごめんなさい、ごめんなさい……何でもするから、助けてください……」

ローズは特異な力を持っているが、基本的にはただの乙女と変わり無い。自分の力を信じていて、それによって世間を賑わせこそしたが、精神性は多少太い程度で結局はその程度だ。その程度の精神性しか持ち合わせていない少女が余命一年、良くて数年を宣告されたのだ。

「お願いします、何でもしますから……」

ローズはミストレスの手のひらの上で、頭を垂れてただ謝罪した。

それが無意味なことだと分かっているのに、せずにはいられない。

もしかしたら、自分を懲らしめるために、ミストレスが嘘をついているのかもしれない。心から謝って、心を入れ替えることを誓えば嘘だと言ってもらえるかもしれない。

「その魔法はもう、誰にも解けないの……ごめんね」

そんな望みは否定を意味する謝罪に容易く砕かれた。

どう考えても嘘を言っている様には見えない。

何故ならば、嘘を言う者が――

「どうして……？」

果たして、自分と同じく泣いていられようか？



枯れるほど泣き尽くしたローズが疲れ果てて眠り、一夜が明けた。

ローズがミストレスから告げられたのは二択。

寿命までアプリコット家で保護されながら歪んだ天寿を全うするか。

或いは、ミストレスの手でなるべく苦しまない様に生を終えるか。

ローズが選択したのは前者だった。ただただ、死にたくないから。いずれにせよ死ぬとしても、せめて痛みも苦しみも無く眠りたい。

ローズが選択した後、ミストレスは少しだけ、ほんの少しだけ嬉しそうな顔をした後、何故か苦虫を噛み潰した様な顔になった。だがそれも少しの間だけで、その後は改めて客人として持て成してくれた。

自分に敵意を向けるメイド——実はメイド長だとか——を始めとして、屋敷の住人の大多数を占めるメイドや数少ない執事などの全てに、以後怪盗ローズ改め客人のローズを害することが無いようにお触れを出した。見つければ即ち死、という恐れのある状況はそれであつさりと終わった。

ミストレスは大きな商談を終えた後で、暫くは屋敷を離れる予定は無いらしい。元々身体が弱いらしく、本当に大事な商談以外は代理の者が向かうのだとか。今の様にある程度は歩き回れる様になったのも、少し前のことで、それまではベッド生活だったらしい。最近を意識を任意の場所へ飛ばす魔法を開花させたらしく、活用しているのだとか。ローズを迎えたベッドも、ずっと過ごしていたベッドとのこと。食事用の板が、ローズを乗せるのに丁度良いらしい。基本的には其処で暮らすことになった。

ローズはミストレスが決まった時間に尋ねてくる使用人達に何かを命ずる以外の時間を共に過ごすパートナーとなった。

彼女が使用人に持ち込ませたテレビやパソコンが、ローズが現在の外の世界を知る唯一の窓となった。この身体では、外へは行けない。

ふと、パソコンに何かを打ち込むミストレスは遠い目をする。テレビを見る時も、何処か——そう、まるで映っているものとは別のものを見ている様な顔をするのだ。ローズが心配そうに尋ねると、笑顔に戻ってなんでもないわと微笑むだけで、それ以上は聞けなかった。

そんな、閉じた二人きりの生活が続いて、一年が経った。

「……ズ、ローズ、聞いてるの？」

「んあ、ミストレス……？」

一年経っても、彼女のことはミストレスと呼んでいた。本当の名前は、家を継いだ時に捨ててしまったらしい。私心を捨てて家を継ぐ長となるための代々続く仕来りなのだとか。尤も、今は私心ほぼ十割で自分に構ってくれているのだが。

ローズはいえ、自らの終わりを何となく悟っていた。一年という時間で精神は老成しないし、そこまで老うことも無い。しかし確実に寝ている時間は長くなつたし、耳が良く聞こえなくなつた。注意も散漫になり、ベッド上の板から落ちそうになつてミストレスに救われたのは数知れずだ。

「……もうすぐ、一年ね」

顔を逸らし、窓の外を見てミストレスが言う。

それぞれが最後の季節かもしれないからと、窓越しに目に焼き付けた景色も、今では思い出せない。彼女は覚えているのだろうか。

窓の外に向けていた目をローズに向けて、ミストレスは言う。

「まだ、大丈夫？」

「……うん、そろそろ」

何度目かの、同じ質問。いつもとは違い、ローズはふるふると首を振った。添えられたミストレスの指に、温かい手のひらに身体を預ける。片手で、自分をまるごと包み込める手のひら。嘗ては恐ろしさも感じたが、今はただ安心感があつた。

「……………」

ミストレスは何も言わない。ただ、その表情が酷く悲しげなことだけは、ぼやけた頭でも理解出来た。

「今まで、ありがとうね」

ローズはふと、頭で考えるよりも先にそんな言葉を口に出していた。心からの偽らざる気持ちだ。例え、それが罌を仕掛けた張本人相手であつても、共に過ごした一年間は、悪いものではなかった。むしろ、随分と苦勞を掛けたのではないだろうか。

「そんなこと言わないで、ローズ……」

また、悲しそうな顔をする。屋敷に立ち入った賊に、どうしてそこまでと、ローズは心の片隅でいつも疑問に思っていた。哀れみや同情かと思っていたが、その優しさと献身がそれらを疾うに否定していた。両の手に包まれたかと思うと、そつと持ち上げられて目の前へ。何度見ても、透き通った瞳が綺麗だ。水色の毛並みを持つ耳がびこびこ動いているのが愛らしい。

「凄くね、眠いの……」

ローズは手のひらの上で蹲る。ハンカチの布団よりも柔らかい手のひら。温かい手のひら。きつとぐつすり、眠れるに違いない。

「ローズ……」

そう考えると、臉がどんどん重くなってきた。身体の前から、力が抜けていく。ローズは、何となく終わりを察したのか、こう言った。

「……ばいばい」

長い様で短く、短い様で長く感じた一年の終わり。

鼠娘となつて、一年の終わり。

閉じた瞳には、きつともう何も映らないだろう。

「くくくっ！ やだ、やだ、ローズ……っ！ いかないで！」

何処かで、聞いた様な声がする。

其処から先の全ては、一瞬のことだった。

少しだけ浮遊感を感じた後、塗れた地面に倒れ込む。彼女がいつも自分を拭いてくれる、お湯に濡れた布ではない。だが感触を確かめるよりも前に、地面が傾いて身体が滑り落ちていく。弱ったローズの身体では抵抗も出来ない。いや、抵抗云々の前に意識がぼんやりしていつ自分はどうなっているのかと正確に理解出来ていない。

ごきゅっ……

だから、それが何の音であるかにもすぐには理解出来なかったし、感覚が麻痺しているのか身体を締め付けられてもあまり痛みは感じなかった。浮遊感の後、何か液体の上に落ちた様な気がする。

どくんどくと、音がする。自分の鼓動か、それとも……彼女の鼓動なのか、分からなかった。

今、自分が彼女に何をされたのかを理解する。

した上で、それほど恐怖は感じなかった。

何故そうしたのはかは終ぞ理解出来なかったが。

それよりも、心残りがある。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

彼女が、恐らくは腹の中の自分に謝る言葉。

それを、何処かで聞いた気がするのだ。それは一体何処でだろうか。脈打つ肉壁に身体を預けて、少しずつ少しずつ嵩を増す胃液に身体が浸されていく。元々死に掛けていた身体が徐々に徐々に死んでいく。終わり行く中で、聞き覚えのある声がした。

「満足されましたか、——」

「だって、そのまま死んでしまったら」

「これは、奇跡なのか、それとも……呪いなのか」

「ごめんなさい」

「次は、どうされますか」

「次……次にまた会って、一緒に過ごして」

「また彼女を——のですか」

「そうしないと——が何処かに行っちゃう……」

「それ以前に彼女は、もう」

「ごめんなさい……」

「せめて、覚えていたならば……」

「ヒマワリ……」

「ミストレス——いえ」

——
「お嬢様」

◆ ◆
気がついたら、其処に居た。意識がはつきりとしている。

其処は明らかに彼女と過ごしたベッドの上などではなく、しかし覚えのある場所だった。そう、覚えている。

自分の考えが確かであるのなら、この後すぐに聞こえるだろう。

「……また、ですか。怪盗ローズ」

自分を見つけた、メイド長の声が。然して本当にそうだった。

声をあげる間も無く掴み上げられる。急上昇に伴う眩暈に襲われるが、それでも彼女の部屋に連れて行かれる前に言わねばならない。

「ねえ、ヒマワリさん」

そう話しかけると、彼女の目が驚きに見開かれる。信じられないものを見たかの様な顔だ。彼女の頬に汗が一筋、垂れるのが見えた。

「……覚えているのですか？」

それが何を意味するのかは、何となく察することが出来た。

「うん。貴女のこと、あの子のこと」

もう紅茶で溺れたくはないかと添えると、彼女は複雑な面持ちで黙ってしまった。どうすれば良いか悩んでいることは容易に想像できた。だから、こちらから話題を提供する。

「ヒマワリさん。……私が貴女に捕まえられるのは、何回目？」

彼女はまた、と言った。嘗ての自分の末路をいくつかは思い出せたものの、全てを完全にいうわけではない。そして、この記憶が自分以外の相手にも共通したものであるのか分からない。魔法の力が自分に見せた不思議な、未来予知的な白昼夢かもしれないのだ。

しかし――

「……もう、両の手を零れました。何回目かなど、覚えておりません」
十回以上、覚え切れないほど。彼女はそう言ったのだ。

つまり、自分はそれほどの数だけ再出現し、彼女に捕まえられたと。彼女以外に捕まった覚えもあるし、何度現れ何度死んだか分からない。きつと屋敷から抜け出して力尽きた末路もあったに違いない。

そっか。とつくに死んでたんだ、私……。

「どうして貴女は、今頃になって……」

ふと、考え込んで下を向いていた顔を上げれば、其処にはボロボロと涙を零すヒマワリの顔があった。嘗ての記憶の中で、ただの一度として泣いている姿は見たことが無かった。

「貴女が現れたことに気付く度、貴女が死んだことを知る度にミス・レスは後悔に――」

「カリンだね？ ミス・レス」

思わず、遮ってしまった。取り戻した記憶同士の齟齬かと思ったが、今のヒマワリの後悔という言葉で確信を得た。ぎゅっと、自分を掴むヒマワリの手が強く握られる。手汗を感じた。

「……どこで、それを」

ヒマワリの吐く息が、熱を帯びて降り掛かる。どこで、はなぜ、とも言い換えられる様な、そんな気がした。

「死ぬ前に、貴女が教えてくれたんだよ。ヒマワリさん」

申し訳なげな笑顔で答える。いつか何処かで、意識が落ちる寸前に、ミス・レスのことをお嬢様と呼ぶ彼女の声を覚えている。

話しているのを聞いちゃって、と添えるとヒマワリが自分を握る手が片手から両手になる。逸らさず真っ直ぐに、自分を見つめている。

「……………私は、迷っています」

ヒマワリが言う。

「何度も何度も死んでは現れ、まるでミストレスを——お嬢様を苛む様に死に続ける貴女を、お嬢様に知られぬまま『処理』するか……」

それとも、記憶を取り戻した貴女をお嬢様の元へお連れするか……
彼女は眉を寄せる。

「最初は、私を含めたメイド達全員で全ての貴女を『処理』してきました。しかし、やがてお嬢様に見つかり、水泡に帰してしまいました。お嬢様が貴女が蘇る事実を知ってしまったてからは誤魔化せなくなった」つまり、見つかる前に『処理』をすることで、そもそも自分が蘇ってはいないのだと、あの子に対して優しい嘘をつき続けていたのだと……そういうことだろうか。バレてしまったが。

「今も、お嬢様に見つかる前に貴女を『処理』してしまえば、という気持ちでいっぱいです。しかし——」

言い淀むが、ぐつと堪えヒマワリは続けた。

「——最初に貴女を取り込んだことで、お嬢様は殆ど寝たきりの生活から解放されました。そして以後も貴女を取り込んで、お嬢様は皮肉にも益々回復なされました。別れの心傷と引き換えに。」

……私の言いたいことが、分かりますか。怪盗ローズ」

それを聞いて、自分がすべきことは何か……分かった気がした。

ヒマワリは自分の言葉を待っている。たらりと、緊張の汗が垂れる。だから、私は彼女を見てこう言った。それが、正解だと思うから。

「うん、分かった。ねえ、ヒマワリさん」

「……………何ですか、怪盗ローズ」

「それでも……私を、あの子の所へ連れて行って。お願い」

自分を見た彼女は、今にも泣きそうな笑顔だった。

自分が、彼女の中でどれほどの存在になっているのかは分からない。しかし、自分が誤って『処理』して殺してしまった相手が何度も何度も蘇っては短い寿命で死んでいく——そんな繰り返しを経て、平常でいられるだろうか。

目を逸らすことも出来た筈だ。メイド達に任せて、知らん振りも出来た筈だ。でも彼女はそうしなかった。感知した自分を、何度も保護してくれた。

そんな彼女を、どうして今まで忘れていたのだろう。

「……ローズ……っ」

「久しぶりだね、ミストレス。」

……うん、カリンって呼んだ方が良い？」

なるべく、笑顔で。私はミストレスを名乗る友人であり恩人にそう言った。自分の命を奪った人でもあるが、そもそも自分が窃盗という罪を犯したのが切っ掛けだから、特に気にしてはいない。

「……っ?!」

名前を呼ばれて、彼女は驚いて身体を引いた。『?』が何個も頭の上に浮かんでいるのが容易に分かる。

「全部、思い出したの。だから、話そう? これまで起きた全部を」

彼女から聞いた時系列はこうだ。

まず、私が屋敷に侵入して罠にかかった。

その後、幸運にも彼女の部屋に辿り着いた私は彼女に匿ってもらい、共に過ごした。何日も、何日も。

一ヶ月ほど経った頃だろうか。ミストレス——彼女の母親——が大きな商談を終えたとき、メイド長が知らせにきた。その時、咄嗟に自分を隠すために彼女の口の中に入れられた。そしてそのまま呑み込まれてしまったのだ。何度も吐き出そうとしたが、結局吐き出せずに自分を死なせてしまったとのことだ。

さらに悲劇は続く。

ミストレスが屋敷への帰路で事故に遭い、亡くなってしまったのだ。初めて人殺しをしてしまったショックと、大好きな母親が死んでしまったことが二重に彼女の心を打ちのめした。聞けば、父親は幼い頃に既に亡くなってしまっていたらしい。つまり、片親だったのだ。

彼女に残されたのは、アブリコット家の全て。若くして次期当主となった。彼女は悲しみから逃れる様にミストレスの、称号とも呼べる名を継いだ。自分を『処理』してしまった事件が切っ掛けとなったのか、ベッドで寝たきりでは無くなったことが、皮肉にもその名の継承を助けてしまった。

やがてミストレスとなった彼女は、母親の血を継いでいたためか魔法を開花させた。それは自らの意思や認識の分身を生み出し、任意の場所へ飛ばす魔法だ。ベッドで寝たきりという生活がその様な魔法を開花させたのかもしれないと言っていた。これまた皮肉にも、開花した頃には既にあまり必要では無くなっていたが。

そしてその頃から屋敷にある噂が立ち始める。

——曰く、怪盗ローズの亡霊が屋敷を彷徨っていると。

ミストレスの名を継いで暫くしてから漸く判明したのだが、彼女の体調不良はその巨大な貯蔵魔力を制御出来なかったために起きていたことらしい。どんどん魔力が作られるのに、肝心の発散方法が分からなかった——そもそも自分が魔法を使えるだなんて思っていなかった

——彼女の身体は、破裂寸前の風船の様な状態だったらしい。

そこに自分を『処理』してしまった事件が繋がる。あの時、必死にメイド長を呼んだ時に初めて魔法の発露がされたらしい。メイド長が必死に駆け込んだのは声を聞いたからではなく、魔法の発露によって形作られた幽霊が、彼女の声で助けを求めたからだとか。

その後、落ち着いてから魔法として定着させたとのことだ。

少なくともその時の発露によって、彼女の身体は破裂を免れ、その後は以前ほど寝たきりの生活とはならず済んだらしい。

しかし、そもそもの彼女の異常はその魔力の製造量だ。ただ生きていくだけでどんどん魔力が作られる。意識して魔法を駆使しないと、再び魔力が溜まり過ぎて再び倒れてしまう。

そんな中で、防衛本能によって身体が勝手に魔法を放ったのかもしれない。後悔の残滓という形で彼女の身体から何度も弾き出された魔力は、彼女と異なる意思を持っていた。その名は——



「……それが、私……」

「ええ、きつと。たぶん……」

まるで地面に吸い込む穴があるかの様に、二人して下を向いていた。重い空気が頭を押さえつける様だった。

ベッドの板の上に置かれた彼女の手に、小さな手を添える。

「ローズ……」

彼女は私を見つめる。とても心配そうだ。一年程で、再び死んでしまうのではないかという恐れが見て取れた。

だが、今の私には秘策があった。だから、拳を握り締める。

「ねえ、カリン。……お願いがあるの」

ヒマワリ曰く、こうだ。

カリンは自分を取り込むことに段々と回復していったと。

そしてカリン曰く、こうだ。

不調の原因は魔力暴走で、その結果弾き出された魔力が意思を持ったものが自分であると。

しかしそれだと矛盾が発生する。

身体が耐え切れないから自分という形で魔力を外に弾き出したのに、それを取り込むことに体調が回復するというのはどうということだろう。

ヒマワリの認識と、カリンの認識の齟齬。

失ったものを再び取り込むだけで、本来ならば変わらない筈の状況が改善されている。

其処にある異物は何か。

彼女の身体の中にまだ残っていて、彼女の魔力と共に弾き出されては彼女に取り込まれて徐々に溶け込んで一つになっていくものは何か。

それは、それこそは。

「私を……食べて？ 私と一つになろう？」

彼女に、自分の考えを告げた。

貴女の中に残っている私の意思が、徐々に貴女に溶け込むことで事態を改善していると。

魔法、というより魔力の制御力が自分を取り込むことに増しているのか、或いは肉体を失った自分の分まで魔力を消費しているから結果的に身体が安定しているのかまでは分からない。

少なくともその身体の中には二人ぶんの魔法使いの魂があつて、一つになることにその身体は正常になっていることだけは分かる。

ならば、済し崩しに少しずつ取り込まれていくのではなく、自分の意思で彼女に全て取り込まれたなら、どうだろうか。

「いや、いやよ！ また貴女を殺すなんて……そんな」

当然優しい彼女は反対する。だから、意地悪は私が担う。

「もう、何度も貴女のお腹の中で息絶えたよ。だから大丈夫」
何が大丈夫だというのか。何の根拠も無い。ただの憶測だ。しかし

少なくとも、失敗したところであまり影響は無い。既に何度も吞まれては彼女の中で溶けているのだし。

きっと、間違い無く、世界で一番彼女の身体の中のことを知っているのは私だ。誰にも譲れないし譲らない。

「でも、でもお……」

彼女の美しい……初めて出会った時よりも綺麗に育った顔が、悲しみに歪むのは見ていられない。

「失敗しても大丈夫。また会いに来るよ。」

お願い、カリン……私を、信じて。私と一つになろう？」

「い、いくよ……ローズ」

「うん。……優しくしてね？」

悪戯っぽい顔で、彼女に微笑む。

これは、捕食者による殺人ではない。被食側が望んで行う賭けだ。

彼女の身体を苛む問題、その全てに片を付けるのだ。

彼女はぼろぼろと、大粒の涙を零しながら、大きく口を開く。まじ

まじと口の中を見るのは、初めてかもしれない。

やがて、舌の上に乗せられる。猫人族特有のざらざらと舌が、私を

迎える。少しだけ躊躇した後、口が閉じられて暗闇になる。

彼女の舌を抱き締める様にして、彼女の音を聞いていた。

息の音。唾液の音。心臓の音。その他様々な、彼女を構成する音が、

暗闇の中で確かに私の耳に届く。

本来であれば恐怖の対象でしかない捕食者の息遣いは、記憶の継承

によって全く怖くはなかった。

一頻り、彼女の音を感じた後で、少しずつ喉奥に進んで行く。元々

それほど広い空間ではない。すぐに、喉奥に辿り着く。

少しでも自分を呑み込むまいと、最後の抵抗をしひくひくと動く彼

女の喉に最後の踏ん切りをつけさせるように、自分から喉奥に飛び込

んだ。

ごっ……きゅん……

彼女の唾液に包まれて、食道を降る。きつと何も知らなければ締め付ける様だと表現する筈のそれは、心做しか抱き締めている様にも感じた。

何故だろうか。これが彼女の魔法の発露なのだろうか。

彼女が自分を呑み込んで、自分が降っているであろう場所に手を当てているのが分かる。ずるずると降っていく自分が、彼女の喉から、胸に、やがて胸の下辺りに落ち込むまで十数秒。

長い長い時間に感じられた嚥下が終わり、彼女の胃袋に落ち込む。

彼女が意識の全てを集中しながら、胃袋の辺りに手を当てている光

景が脳裏に浮かぶ。彼女の中に既に溶け込んでいた自分の意識が彼女の魔法を通して見せているのだと無理矢理納得した。

そんなに泣かないで。そう言いつつ、彼女の胃壁に触れる。以前で

あれば、必死に逃げていた胃液溜まりに今度は自分から浸かっていく。

ビリビリとした痛みが手先や足先から広がっていく。だが恐れるこ

とは無い。既に自分が死んだ身であるという認識は、恐怖すらも覆す

ずるりと、痛みを感じていた部分が溶けて魔力に還っていく。淡い

光が奔り、少しの間だけ彼女の腹の中を見ることが出来た。

「……ごめんね」

其処に映し出されたのは、爛れた胃袋だった。胃潰瘍、というやつ

だろうか。自分のことでストレスを感じさせてしまっていたのだろう。

肩が、そして顔が、胃液溜まりに沈み込む。奔る筈の激痛は、既に

肉体は無いという自己認識によって無視をした。

大事なのは此処からだ。

意識を保ったまま、ローズだった液状のものが胃袋から十二指腸の

先へと移動する。小腸で柔らかく包まれ、そのまま吸収された。

尚も意識は保っている。

彼女の血管に乗り、鼓動によって流されながら彼女の中心を目指す。

一分もかからずに、彼女の心臓へ辿り着いた。

138

凄いなあと、独り言ちる。身体も空気も無いため、言葉にはならないが。

どくん、どくんという激しい鼓動を文字通り全身で感じる。私だったものが、私の意思をもって、彼女の身体に広がっていく。

嘗てなら、此处で終わっていたのだろう。そのまま彼女にただ溶け込んで、何処かのタイミングでまた亡霊として弾き出されていた筈だ。しかし、今は違う。自分には、探さなければいけないものがある。

意識の中で目を閉じて、それを探す。暗くも温かいこの空間の中の何処かにある筈のそれを、全神経を集中して探り出す。

彼女の心は、魂はどこだろう。

凡そ五十秒に一度。彼女の身体を何度も巡るうちに、やがて彼女の意識が集まる場所を探し出す。

魂。それは彼女の心の結晶。全ての魔力の源。

其処に居たのは、嘗て初めて出会った時の彼女だった。しゃがみ込んで、ずっと泣いている。

——ごめんね、ローズ……

その言葉、いや……魂が発し続ける謝罪の言葉に、ふとこちらも涙ぐむ。元を辿ればただの犯罪者でしかない自分が、ここまで彼女の心を縛り付けたのか。それはどんな盗みよりも重い罪に思えた。

優しい彼女を、抱き締める。魂を包み込む様に。

こちらに気付いた彼女の魂と、手を握り合わせる。

そう、せめて最後こそ怪盗らしく在らねば。

だからこう言った。彼女に微笑みかける様に。

——私の名前は怪盗ローズ。貴女の涙を頂戴します！　なんてね。

彼女の感触が消えてから、どれだけ経っただろうか。

カリンは自分の腹部に当てた手を離すことが出来ないまま、ずっと蹲っていた。

「お嬢様……」

いつの間にか傍に居たヒマワリが、心配そうに声を掛けてくる。でも、反応している余裕は無かった。

ローズ。私が喰い、殺した女の子。私に外の世界を教えてくれた子。私の方は彼女のことを友達だと思っていたけど、彼女はもういなかった。そんな相手を喰い殺して、健康に近づく自分の身体が何より憎かった。

夢か幻か。死んだ筈の彼女に出会った時は狂喜乱舞した。きっと悪い夢だったのだと。しかし、約一年後に彼女が寿命で死んだ時はどうしようもない悲しみに包まれた。

元々あの罫の術者は母である。だから、その母が故人となった今も誰にも解けない。故に彼女の寿命はどうしようもなかった。

そしてまた、断続的に彼女に出会う。そして一年を過ごして死に別れる。そのまま死んで成仏してしまえば、二度と会えなくなる気がして、嘗ての再現で再び彼女を呑み込んでしまった。一から十まで自分の都合で再び彼女を喰い殺した。自己嫌悪に殺されそうになる。

それが何度か続いて、自分ももう十分に大人になっていて。

そんな中で、彼女が記憶を継承するという奇跡が起きた。同時に、自分を食べてくれという在り得ないお願いもされた。

記憶が継承されるのなら、また寿命の後で会えと言おうとしたが、

その巡り合わせがいつまで続くのかも分からないせいで言い出すことが出来なかった。

彼女の言う通り、既に何度も彼女を喰い殺した身だ。何も言い返すことが出来なかった。

そして今に至る。

彼女を食べたくないという意味とは裏腹に、彼女を取り込んで身体が喜んでいる。熱を帯びて心臓が高鳴る。そんな自分に嫌気が差す。

ふと、そんな中で彼女の声が聞こえた気がした。

可愛らしい怪盗。世間を賑わせた興味災害。その彼女が言う。

自分の涙を頂戴する、と。嗚呼、それが本当なら――

「ローズ……っ」

彼女の名前を、絞り出す様にして呼ぶ。

――すると、奇跡が起こった。

光の風が吹き抜ける。自分が普段使う魔法を何倍にも強力にした様なイメージが、薔薇の花弁を伴って其処に現れる。

其処には、見覚えの無い、だが見覚えのある姿が在った。

「私の名前は怪盗ローズ！ 貴女の心を頂戴するわ！」

鼠人族ではない、人間の姿。綺麗な紅の髪に、可愛らしい微笑み。

思わず見惚れてしまう自分に歩み寄り、その怪盗は手を取った。

「でもね、私はもう怪盗をやめるの」

事態に戸惑いながら、不意に行われた廃業宣言にさらに戸惑う。だから私に言えたのはこれだけだった。

「そ、それは……どうして？」

そのまま、倒れ込む様に抱き寄せてきた彼女の身体を抱き返す。

彼女も、自分のことをぎゅっと抱き返してくる。いつもは撫でることしか出来なかった筈の小さな彼女の身体は、もう何処にも無かった。

「だって、世界で一番素敵な宝物を手にしたもの。」

もう、他のどんなお宝にも興味は無いわ！」

そう言つて、満面の笑顔を見せる彼女は本当に……綺麗だった。

「そう、そうなのね。……さよなら、怪盗ローズ。」



曰く、アプリコット家の女主人は魔法使いである。

世間に魔法の存在が知れ渡る様になって、常識は悉く覆された。噂では、一時期世間を賑わせたあの怪盗も魔法使いだったのではないかと真しやかに囁かれている。

全てはあのアプリコット家の女主人が世間に姿を見せる様になってからだ。魔法の存在を世間に示した女主人のことは、歴史書にも残されることだろう。

そんな女主人に対して、奇妙な記述が残されている。

侍らせている者の多くがメイドであり、残る人員も執事やそれに類する者とされる中で、ただ一人だけ――明らかにその場にそぐわない格好の女性が居たとされているのだ。

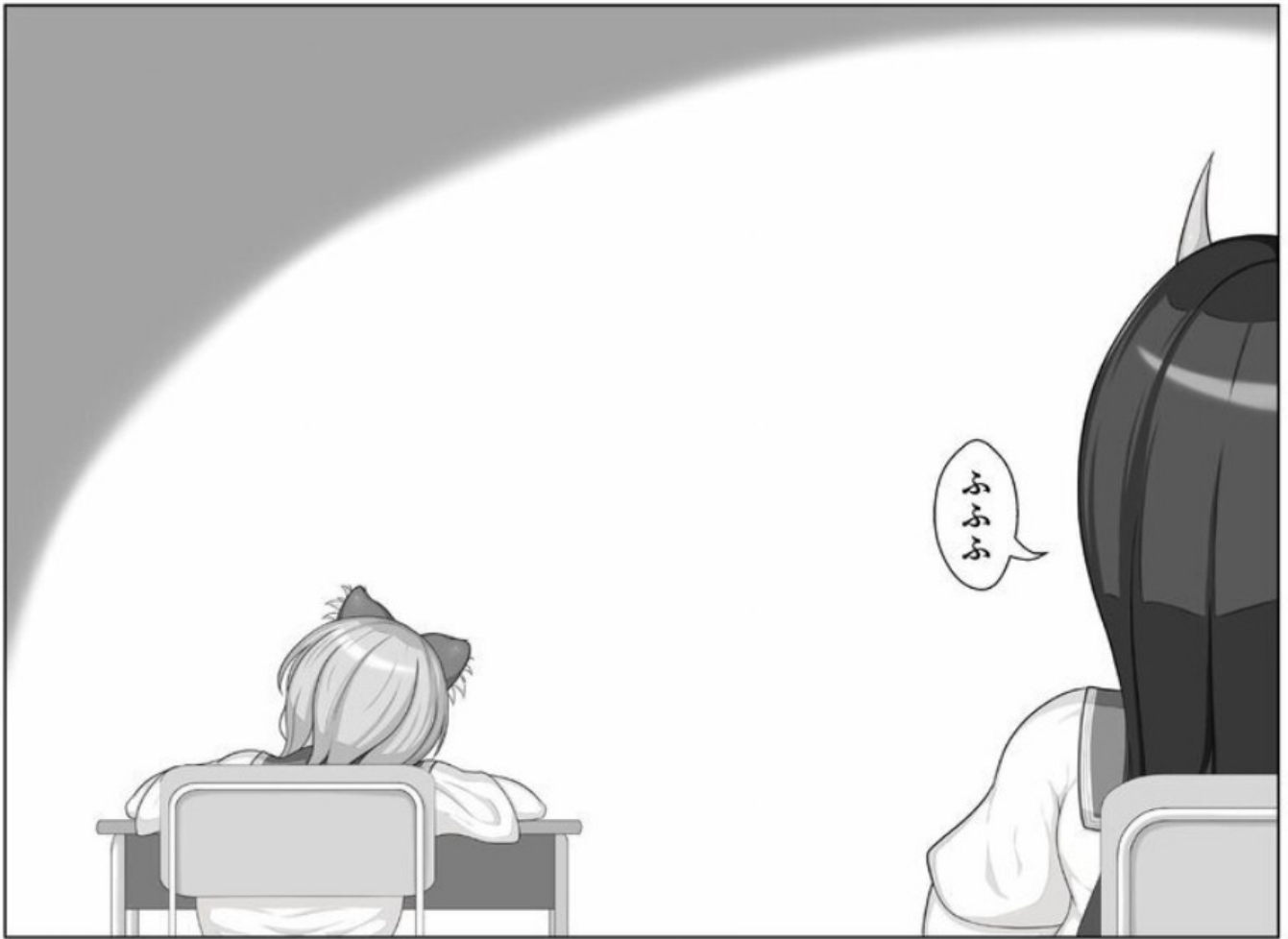
紅の髪をした、可愛らしいその女性は女主人の友人とも、愛人ともされているが……真相は定かではない。

……ただ一つだけ、確かなことがある。

それは、女主人とその女性はいつも、笑顔であったということだ。

く了く







よく眠れましたか？
唐花さん？

ゴジャッ

ガシッ



ふふふ
授業中に居眠りだなんて
見過ごせませんねえ

とても心苦しいですが……
生徒会長としてあなたを
罰しないといけませんねえ？



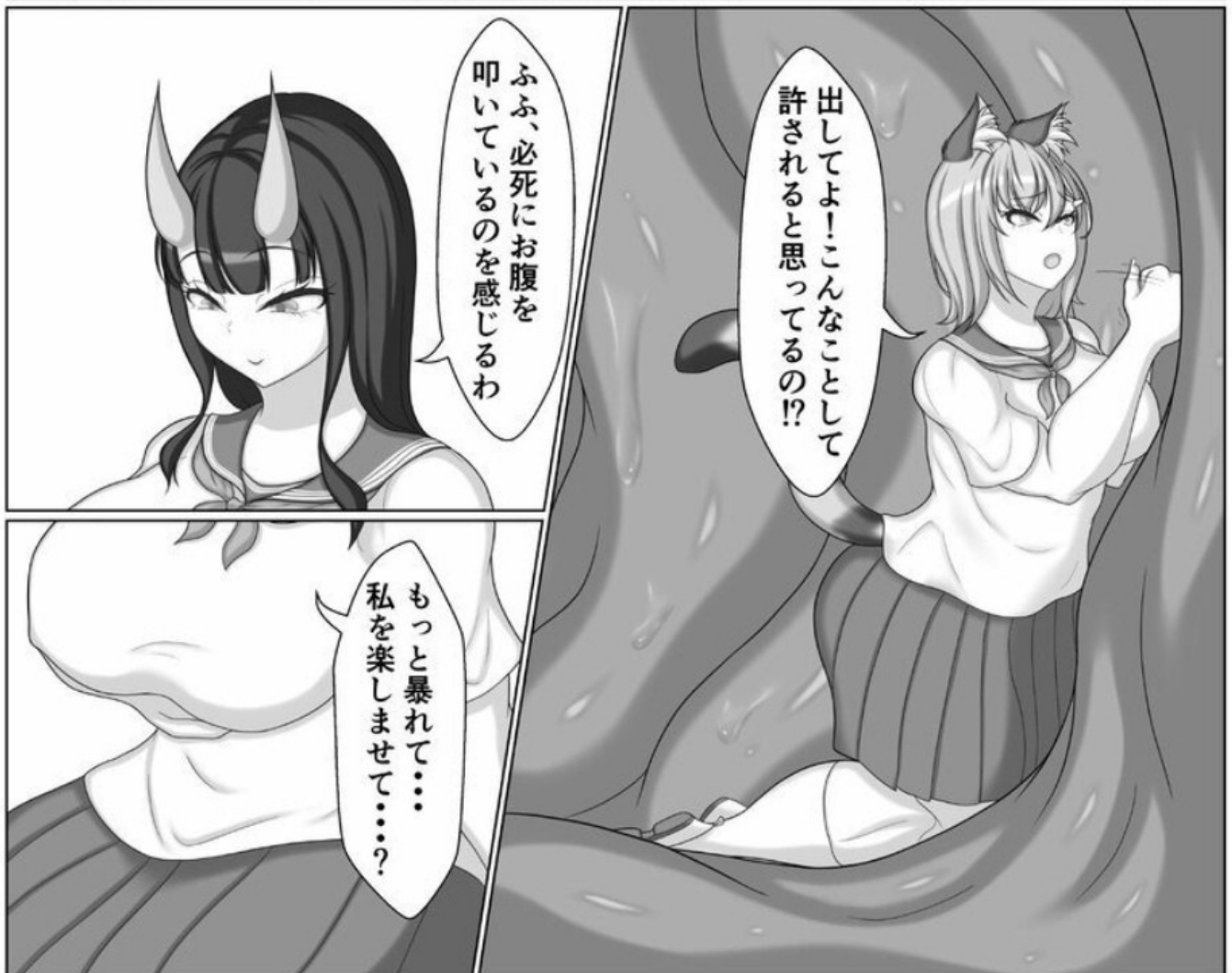




ああ……素晴らしい喉越し
でした

ずぶっ

ベタッ







先生は放っておけと
おっしゃってましたが
なにやらうなされてしまったので……

体調でも悪いのでしょうか？
顔色も悪いようですし……

いいや、大丈夫！
ちよつと寝不足気味だった
みたいでさ……
変な夢見ちゃって……

あ、私用事があるからさ

急いで帰らないと！
起こしてくれてありがとう！

またね！
木節さん

また……
よろしくお願いしますね

ふふふ♡

ええ、
また

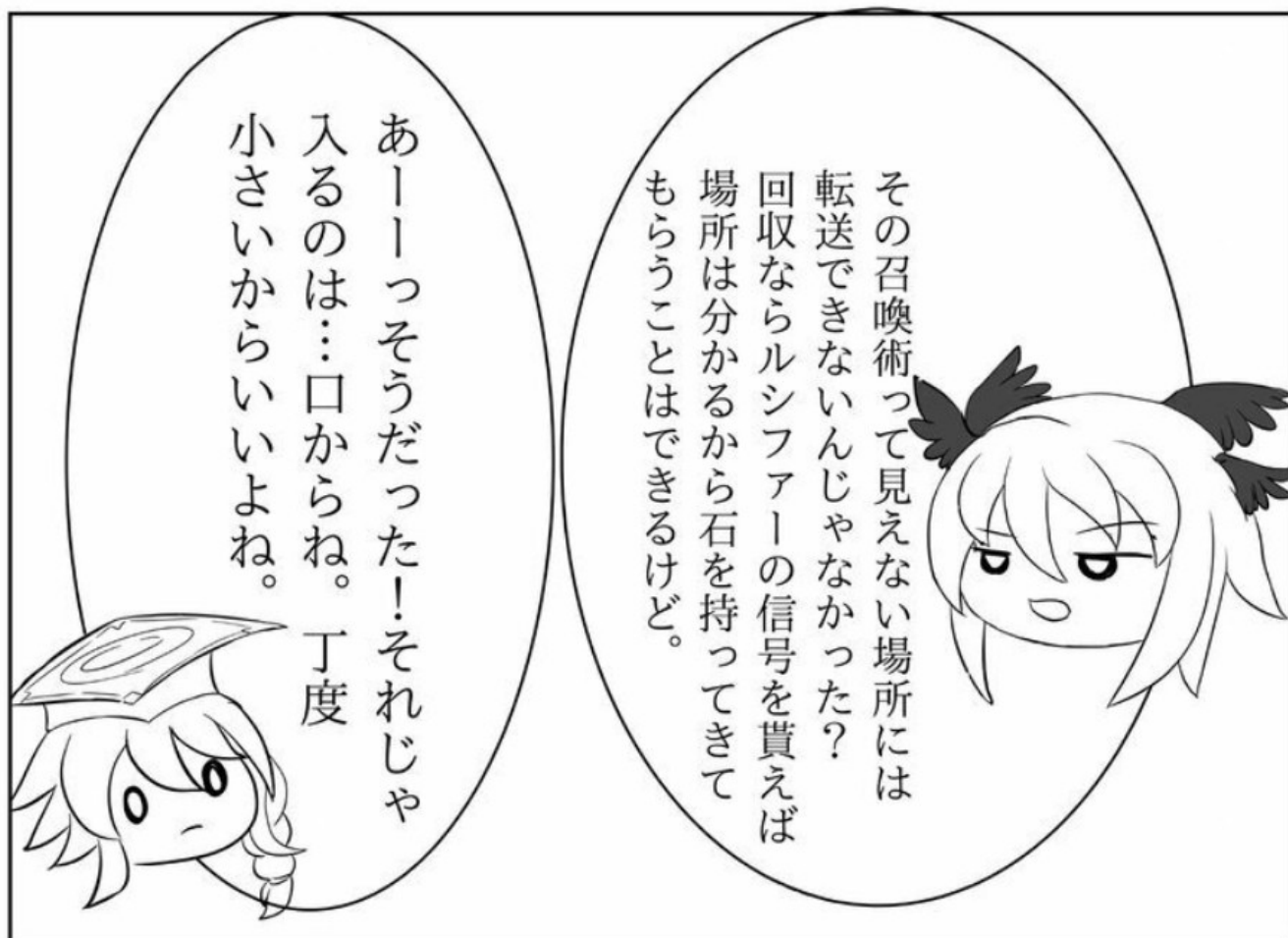
作:狩刃神紅零愛

石を回収しよう！















お！大きい石だ。
送るぞ。



残りあと
2つらしいよ。

あーハイハイ

がんばりますよ
ハイハイ



うう…狭い。
どこかに光は…



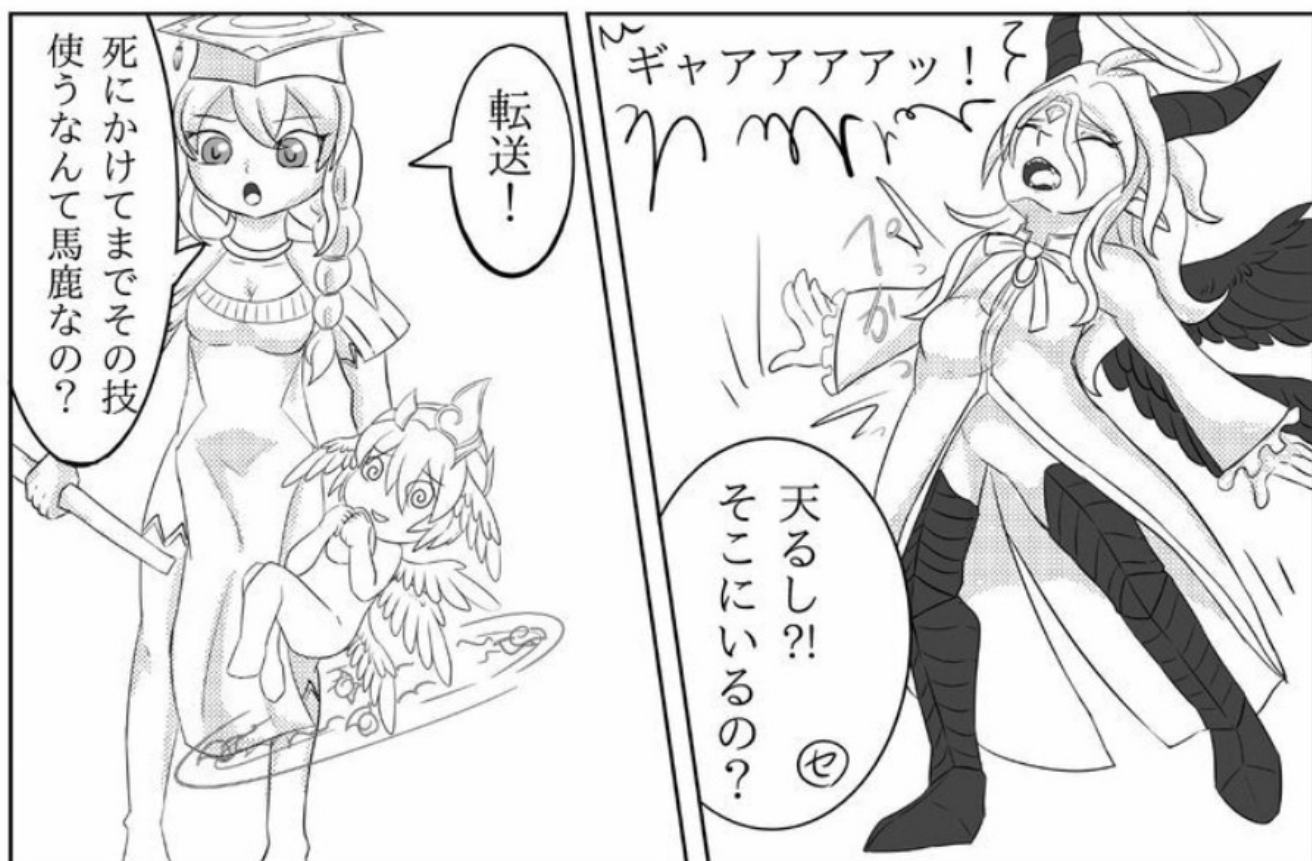
熾天使の
位置が
掴めないなー
おい。
応答せよー
生きてる？

うわ!!?











A z l i g h t

『あいつ今、何やってんだろうな』

ベッドに放っておいた携帯から通知音が鳴る。それが、十数年来留まり続けていた思い出の歯車を回し始めた。

彼のたった一行だけのメッセージで、かつて自分が高校生だった頃の記憶が蘇ってくる。うだるような暑さに見舞われた体育祭、厳しい上下関係に苛まれたクラブ活動。何故か覚えている教室での他愛ない風景。

こんなこと、大人になってから今まで思い出そうともしなかった。あまり良い思い出というものも多くはないが。

それでも、かつてそこに自分が残した足跡があるのだから、たまに思い返してみるのも悪くはない。

ひとつひとつ繋がってゆく過去の切れ端。それを辿っていけば、自分が今まで歩んできた道というものが見えてくるはずだから。

「……まだ、忘れられないのかな、俺……」

懐かしい相手からのメッセージを見ながら、ぼんやりと、あることを考えていた。それは、学生時代に残してきた唯一の忘れ物だった。

それを見透かしていたかのように、続けて通知音が鳴る。

『今週の日曜日、空いてるか？』

俺はああ、と一言だけ返した。それが、運命の歯車を逆回転させてしまったことも知らずに。



地元の大学を卒業した後に上京し、入った会社で働いて三年目になる。そろそろ学生気分とも完全にオサラバという感じで、すっかり仕事も板に付いてきたという感触だ。

自分で言うのも何だが、ある意味で平凡な人生を送ってきたのだと思う。何事にも平穏を望み、変に目立つことが嫌いだ。俺は、通り過ぎてゆく青春の日々を遠巻きに見つめながら流されていた。

とはいえ、学生時代に起こした馬鹿騒ぎの一つや二つくらいはあったはずだが、もうとっくの昔に忘れてしまった。それくらいどうでもいいことだったのだろう、と今は思っている。

さて、先ほどのメッセージの送り主の名前は、恭也といった。

彼は高校時代を共にした友達、いや悪友と言うべきか。

普段の素行は決して良いとは言えなかったが、コミュ障の俺とは違ってとにかく自分から話題を作りに行くタイプで、女子にも躊躇なく話しかけるのがいつもの光景だった。気になるクラスの女子を休日デートに誘ったりしていたそうだが、そのほとんどが実を結ばなかったことは奴らしいといえぬ奴らしい。

故郷に向かう電車で揺られ、見覚えのある車窓が出迎えてくれる。久しぶりに見る駅前には、変わらない色遣いで都会疲れの眼を癒してくれた。

どこからか、記憶の底にある懐かしい匂いが漂ってきた。そういえば、久しく実家にも帰っていないことをふと思いついたではないだろうか。三年後の両親の顔は、少し変わっているのだろうか。そう思うとちよつとだけ顔を出したくなってきたものだ。

待ち合わせは駅の場合は改札を出た広場の時計台だ。まだ集合時間まで少し余裕があったので、時間をつぶすための場所を探そうと携帯を出す。

そこへ、ふわっとノスタルジックな風が舞い込んできた。

「おはよ、久しぶり。元気にしてた？」

見慣れたシルエットに聞き慣れた声。その姿を一瞥するだけで、十年前のセピア色の記憶が蘇る。

彼女の名前はナツミ。高校時代の同級生で、黒く流れるような長髪を流し、同じクラスの中で華を放っていた女子だ。

高嶺の花、とまでは言わないが、男子なら誰もが惚れ込むような容姿を持っていて、それを決してひけらかさず、凛として自然体な風格が男子生徒達を虜にしていた。もしクラスで好きな女子ランキングがあつたなら、三位入賞に食い込んでいたのは確実だっただろう。

そして彼女こそが、ほとんど無色だった俺の高校生活に僅かな彩りを添えてくれた、初恋の相手。好きという気持ちを内面に隠したまま、ついにその気持ちを伝えることは叶わず、卒業を迎えて散り散りになってしまった。彼女こそが、俺が学生時代に残してきた最後の忘れ物だった。

「うん、ナツミも、相変わらずだね」

うっかり彼女のことを名前と呼んでしまったが、なぜか苗字が思い出せない。人間の記憶とはそういうものだろうか。

恭也が来るまで、ナツミとしばらくのあいだ一緒に過ごすことになった。

とは言っても、特に何か話をするわけでもない。ナツミも、俺のことを特別気にするような素振りも見せず、何か哲学的な思想でも思い耽つていそうな、どこことなく焦点が合わないような瞳を浮かべていた。

……だけれども、何か、何かが心の中で引っ掛かっている。

滑るような肌と、澄み切った潤んだ瞳。何も変わっていない。

変わっていないのだ。十年という歳月が経ったのに、何もかも。

そんなことが、本当にあり得るのだろうか。

その後、恭也と三人で合流し、ナツミの家に上がっていくことになった。

後から聞いた話だが、恭也がナツミに声をかけたところで彼女が家に招待することを提案したそう。それに俺が誘われたということだったらしい。

ナツミの家は駅から少し歩いたところにある住宅街の中で、築二十年くらいの小綺麗なアパートだった。一人で住むにはちょうどいい広さだろう。「ささ、どうぞ入って入って」

ナツミがカギを回して、玄関のドアを開けた。小綺麗に掃除された廊下が細く伸びている。

「おじゃましまーす……」

俺たち二人は、ナツミを背にして土間へ一歩入る。すると、

「えいっ」

その刹那、背中を突き刺すような衝撃が走った。それは、恭也も同じだった。

「な……？！？！？」

俺ら二人が振り向いた瞬間、ナツミは銃のようなものを俺たちに向けていた。そして、その姿が残像になって、臉の裏に消えていく……。

◇ ◆ ◇

「やつほー、おつ、いい感じに縮んでるねー」

ナツミの爽やかな声色で、二人とも目を覚ました。

二つの琥珀色の瞳と目が合った。すぐ目の前にいるはずなのに、その光が放つ輝きは果てしなく遠く感じる。

ナツミが、巨人として俺たちのことを見下ろしていたのだ。

いや、違う。そうではない。ナツミの姿の向こうには、ナツミの大きさ

とちようにいいサイズのベッドや時計がある。

ナツミの「縮んだ」という言葉が脳内で思い起こされた。この世界が大きくなったのではない、俺たちが、縮んでいるのだ。

「まさか……、お前が俺たちのことを縮めたのか……？」

恐る恐るナツミに訊いてみる。あまりにも距離が遠すぎるがゆえに声による意思疎通が難しいかと思われたが、ナツミは俺たちの言葉を理解していた。

すると、ナツミはおもむろに机の下から見覚えのあるモデルガンを取り出した。

「私が高校生の姿からほとんど変わっていないこと、不思議に思ったでしょ？ それはね、クラスメイトの皆を小さくして食べてたんだ」

「……は……？」

ナツミはうつとりしながら縮小銃を撫で続け、俺たちはそれをただ茫然と眺めていた。

（小さくして……、食べる……？）

一体何を言っているんだ、と思いたくなる。まるで理解が追いつかない。

「みんなの生命エネルギーが私の体内で吸収されるおかげで、昔からの若さが今でも保たれるってわけ」

ナツミはちゅるん、と舌なめずりをする、俺たちとの距離を急激に近づけてくる。

遠くに見えていた唇が何倍も大きく見え、改めてナツミの巨大さを思い知らされることになる。不気味なほど整った桃唇が、唾液でテラテラ輝く。

「おい、祥平！ このままだと本当に喰われちゃうぞ！ なんとかして逃げ延びる方法を考えない！」

顔色を変えた恭也が声を震わせて俺に詰め寄る。

しかし、俺はといえば、まだ呑気に考えていた。人間が人間を食べるなんて、そんなことは絶対ありやしないと思っていたからだ。

俺たちを小さくして、脅かして、せいぜい小人として遊ばれるのだろう、そうとしか考えていなかった。

「あれ？ 祥平くんは怖くないのかな？ じゃあキミたちも、私の中の栄養にしてあげる」

「逃げるぞ！！」

恭也は俺の手を強引に引つ張り、ナツミの傍から離れようとした。しかし、

「逃げてでも無く駄、指先ひとつで捕まえられちゃうんだから」

呆気なく指先だけで二人同時に摘まみ上げられ、あつという間に柔らかい手のひらの上に乗せられてしまう。

皮膚越しにナツミの生々しい体温が伝わってくる。それは彼女の温もりというより、ナツミの思うがままにされているという恐怖感の方が勝っていた。

「逃げ出した罰として、二人には私の手から転げ落ちてもらいまーす♪」

ナツミがそう言う、赤い唇の隙間から地獄の釜の蓋を開ける。二人とも口の中に飲み込むつもりだ。

「うあああー！！！！」

体が引き摺り込まれそうにながらも、必死に掌の柔らかいの部分に掴まってなんとか持ち堪えることができた。すぐ下には、妖しげな銀色の糸をだらんと垂らして光り、今にも獲物を噛み砕きそうな白い歯が綺麗に整えられている。

その中に落ちてしまったら、もう二度と自分の手では戻ってこれない。ナツミの思うままに弄ばれ、最悪の結末を迎えることだってあり得る。

ナツミの瞳は、笑っていなかった。

「あーん……」

巨大な口がまた一段と大きく開き、手のひらの角度も限界を迎えていく。指先の握力でさえ体重を支えきれなくなり、もう既に限界を超えていた。

そして、必死の抵抗も虚しく、俺と恭也、二人一緒に帰らずの洞窟へ飲み込まれてゆく。

巨大な舌の上で跳ねて、ぐちゅぐちゅと怪しく濡れる口の中。

想像を絶するような湿気と唾液の乾いた甘酸っぱい匂いが充満し、人間の口の醜さを改めて思い知らされた。

(うげえ……、気持ち悪い……)

もうここはナツミの体の中だ。俺たちのことをどうするかはナツミが決定権を有することになる。

巨人の口に捕らわれた以上、命の保証はどこにもない。ここから自力で脱出するのはほぼ不可能だ。

そうと決まれば、何とかしてナツミに出してもらおうように画策するしかない。

運が良いのか悪いのか、恭也も一緒にナツミの口に放り込まれた。一人ではどうすることができなくも、二人ならまだ何とかなるかもしれない。

とにかく、まずは恭也の姿を探すことを先決だ。そう思った矢先、

「!？」

突如、視界が真っ暗に奪われる。ナツミが口を閉じたのだ。

明暗の変化に目が追いつかず、思わず足を滑らせてしまった。手探りで足場を掴もうにも、全面を唾液で覆われた口内では、立つことさえもままならない。一切の光が閉ざされた空間で、肉壁が煮えたぎるような音が絶えず響いている。

一瞬で方向感覚を失い、いつ喰われるか分からない恐怖感が心を焦らせるばかり。そこに、追い打ちとなるような言葉が来る。

「私の口の中で、溺れ死んじやえ！」

可愛らしい声で放たれる残酷な宣言。ナツミの中で恭也と再会できないまま、舌と下顎が大きく動きだした。

「ふわう……」

小さな溜息が口の中で響いたと思えば、ジュブジュブと肉壁の奥から鈍い音が近づいてくる。

「こ、これは……!!」

大量分泌されたナツミの唾液が、俺たちの体を弄び始めたのだ。

どこへしがみつこうとも、粘り気の強い唾液からは逃げられない。いたずらに動き回っても無駄に体力を消耗させられるだけだ。

「もう死んじやったのかな？」

虫ケラを見下すような嘲る声でふざけたことを言うナツミ。

願わくば、ナツミの口からそんな言葉を聞きたくなかった。

あの品行方正な、誰もが憧れの的にしていた女の子に文字通り喰い尽くされてしまうなんて。

体中が悲鳴を上げる。視界がだんだん白くぼやけてきた。

「うう……」

体感したことのない過酷な状況の中、ナツミの虐待が終わるまでただ待つばかりとなってしまった。

しばらくの間唾液と舌に蹂躪された俺たちは、ようやくナツミの口から解放された。

俺は、まだなんとか生きていた。大量の唾液に体ごと流されそうになった時はどうなるかと思ったが、粘つく唾液を何とか手で払いのけて、息絶え絶えになりながらも呼吸を続けられた。

ナツミの指先が俺の身体を静かに拭う。実験体を観察するような含みのある笑みで、俺を見つめていた。

「あつ、祥平くんはまだ動いてる。でも恭也くんは……」

同じくナツミの口から放り出された恭也は、俺のほんの数メートル先で、

手足をだらりと垂らして生気を失ったように倒れている。まさか、あれほど屈強なはずの恭也がナツミの唾液に抗えなかったというのか。

「おい！ 恭也！ しっかりしろ！」

すぐさま助けに向かおうとした俺を、ナツミの巨大な指が遮った。華奢な一本指は、飴玉サイズの体を止めるのに十分すぎた。

「ふふ、恭也くんはゲームオーバーかな。それじゃあ、いただきます♪」

そう言うと、ナツミは恭也の身体に口元を近づけ、ゆっくりと唇を開いていくと、ギラギラと煌めく巨大な舌を覗かせる。

「お、おい……やめろって！」

俺の必死な願いも虚しく、恭也の体はぬらりと光る舌で器用に絡め取られていき、恭也自身全く抵抗することもなく、ナツミの口に取り込まれていった。

パクン、と閉じられた口の中。グチュグチュと唾液が鳴る音が聞こえる。

ナツミの口で蹂躪され、体力もほとんど残されておらず、今の状態の彼ではささやかな抵抗ですら不可能だろう。

そして、ひとしきり口の中で弄んだかと思えば、ナツミの顎が大きく動き、ゴクン、という不吉な音が響く。

「……おい……おい……！！！」

信じられない。信じたくなかった。

ナツミが、恭也を丸ごと飲み込んだ。

思い描いていた最悪の結末に、思わず反射的に叫んでしまう。まさか、目の前で本当に人が食べられていったなんて。

「嘘じゃないよ。ほら、何も残ってないでしょ？」

ナツミは大きな口を開けて、恭也を喰らった怪物を俺の目の前に曝す。

そこに恭也の姿はなかった。凶悪的なまで白く輝いている歯に、醜く生々しい肉壁が光っている。

ナツミの口に肉片のひとつさえ見当たらなかったということが、恭也がひと思いに丸呑みされてしまった事実を決定付けていた。

「祥平くんは見かけによらず根性あったんだね。見直したよ」

細い指先で俺の体をべたべた撫でながら呟くナツミ。唾液で全身ベトベトにされ、生死を彷徨うような状態では言われたくなかった。

ナツミは俺の身体をひよいと摘まむと、唇の中から再び妖しげな舌を出して、俺の身体を一舐めする。

じつとりとした膨らみのある生暖かさが全身を拭い、べたついた唾液が舌によって剥ぎ取られ、また新しい唾液に包み込まれる。

甘酸っぱく乾いた唾液の香りが、もう頭の中に染み付いて消えなくなっていた。

もうナツミの世界からは逃げられない。そんな現実を嫌でも叩きつけられるような、最悪の気分だった。

「恭也を……恭也を返せよ……！！」

ヌメる舌で絶望を上塗りされていく中、声の限りを振り絞り最後の抵抗を試みる。

「だったら、また私に食べられてみる？ 今すぐ胃の中に行けば、まだ助けられるかもね」

ナツミの表情は僅かに緩んでいた。その顔がこれほどまでに恐ろしく映ったのは、これが初めてだった。人間をひとり呑み込んで、ここまで笑える人が存在するのだろうか、と。

だが、恭也を本当に救うためにはこの方法しかない。なんとかして胃液に溶かされる前に引きずり上げて、生還する。

そんなことが現実には可能かどうかは、もはや問題ではなかった。これは完全に裏返ったナツミに対するささやかな抵抗でもあるのだ。

「それじゃあ、もう一回、いただきます♪」

ナツミは俺を指でつまんだまま、軽やかに口の中へ送り込む。

さっきの恐ろしいほどの絶望感はない。もう飲み込まれる覚悟はできていた。しかし、

「簡単に私の体の中に入れると思わないでね？ 胃の中で暴れ回られると困っちゃうから」

ナツミは長く伸びる舌で俺の身体をブロックし、前歯の裏との間で俺の体を激しく圧迫する。

「ぐうわあああー……っつっ……！！！！」

明確に込められた殺意。激しい痛みには抗えず、思わず情けなく叫んでしまう。

安直にナツミの言う事に従ったのを後悔した。最初からこうすることが目的だったのだ。

自らの意思で口の中に入れさせ、舌と唾液の餌食にさせて極限まで弱らせていく。

今までとは比べ物にならないほどの強烈な衝撃が上半身を襲って、脳内回路がブチブチと千切れ飛んで頭が真っ白になっていく。

「お友達を助けるはずの勇者がこんな声を出しちゃうなんて、もおっと虐めたくなっちゃうよー♪」

極限状態の俺になりふり構わず、ナツミは口の中で唾液の洪水を作り出しながら俺の小さい体を溺れさせる。

可憐な美少女の持つ身体とは思えない、醜悪で悪意の渦巻く口の中。

飴玉をしゃぶり尽くすかのように俺の身体を蹂躪し、荒っぽくジューブジューブ吸い込みながら服ごと搾り尽くされてしまう。

もはやナツミの中では俺は人間扱いなどされていない。巨大魚に捕らわれた小魚のよう。

濡れた肉壁に強く打ち付けられ、何度も、何度も、大暴れする巨舌の餌食にされてゆく。

ナツミは俺に情けをかける素振りも見せず、どんどん苛めを加速させてゆく。

「んっ……」

甘く蕩けるような吐息の後、ナツミはさらに大量の唾液を分泌させた。舌と唾液が作り出す大波に体ごと飲み込まれ、呼吸も身動きも取れない。全身をべっとりとした唾液に覆われ、滑る肉壁の中でまともにしがみつくとさえ叶わない。

俺が口の中でもがき、絶望しているのを楽しんでいるかのように、一切攻撃の手を緩めない。ナツミは、人間を自分の手で殺すことにもはや罪の意識も感じていないのだろうか。

「もつとお……、可愛くて怯えるような声……出して？」

悪夢の蹂躪はさらにエスカレートしてゆく。今度は舌と上顎で俺の身体を挟み込み、氣道を潰してきたのだ。

「！？……っつ……！！！！ んっ……！！！！」

ナツミの尋常でない舌圧に押し潰され、もはや言葉にならない叫び声を上げることしかできない。

「あはははっ、情っけな……い！」

左へ右へ、上へ奈落へ。肉壁と舌先で思うままに操られ、俺の身体は意思ひとつさえ受け入れられることなくナツミの口の中で飛び跳ね回る。

溢れんばかりの唾液で覆われた口内は、まともに息をする隙間さえ無い。体じゅうの穴という穴から、すべて夥しい量の唾液に侵されてゆくのだ。

グチュ……ヌジュ……とエロティズムな艶音を響かせながら、じわじわと締め付けるように、残り僅かな体力を奪っていく。

「ああ……うあ……」

こんな場所で最期を迎えたくはなかった。虫以下の存在として扱われ、飴玉のように口内で蹂躪されて力尽きる。

ナツミの優しかった笑顔が、淡い記憶の中からどんどん溶け出してゆく。

もうどうしたって生きる希望が見出せない。どれだけ足掻こうが叫ぼうが、全てはナツミの気持ちひとつ次第。俺のちっぽけで些末な意思など、全く届くはずがなかった。

ところが、意識白濁で昏睡寸前だった時、急に口の動きが止まる。もうどうにでもなれとヤケになっていたのだが、ここになって僅かながら理性を持ち直してきた。

「ねえ、キミだけここから出してあげようか？」

(え……?)

「恭也くんは、もう今頃は胃の中で溶けちゃってるかもしれないし、今更助けに行っても無駄になっちゃうかもよ？」

そうだ、ナツミに弄ばれているうちにどんどん時間は経っていて、少なくとも四、五分は経っているだろう。人間がどのくらい胃酸に耐えられるかは知らないが、そう長くない間に溶解は始まってしまう。

もし恭也がまだ生きていたとしても、口の中ですら十分に抵抗できないほどの体力で、胃の中から助け出せる自信もなかった。

「どうしたい？ 祥平くんが選んでいいよ」

最後の選択が示される。正しい答えを選べば、生還できるチャンスはまだあるかもしれない。

ナツミの甘言が希望の一縷なのか、終焉への言葉なのか。どっちだ。

「………生きたい………ここから………出して………え………」

細切れになりそうな答えを、ナツミへ届くように力を振り絞って紡いだ。出来ることなら、もう一度この目で光を見たかった。

こんな最期を迎えるなんて、絶対に嫌だ。

恭也には申し訳がないが、この体力ではナツミの胃の中から引きずり出すこともできない。

俺はナツミに降伏した。ナツミに負けを認めた。

だから、もう一刻も早く元の世界に戻してほしい。その一心だった。もう一度口を開き、新鮮な空気と共に眩しいくらいの光が目に入る。その、はずだった。

「すぐ友達を裏切ろうとする男の子って、私はキライだな」

俺の身体は、期待に反し思っていたのとは逆の方向へ渦巻き始める。

ナツミが放った鋭く冷たい台詞。その瞬間、ナツミは俺を丸呑みにした。

「うがああああああー………!!!」

望まない方向へと引き込まれていく身体。即座に手足をばたつかせて抵抗しようとするが、全てが遅かった。

深い、深い、先の見えない奈落の底。二度と戻れない縦長のトンネルを、ゆっくり、ゆっくり落ちていく。

人が横になったままでも胃に送り込むことができる蠕動運動は、俺の意思など関係なしに揉みくちゃにして胃に向けて押し流してゆく。

奥に押し込まれていくにつれて、ナツミの心臓の鼓動がどんどん近づいてくる。首筋を通り過ぎ、絶望の溶壺まであとほんの少しということだ。

もう考えることはやめた、あとは残り少ない死を待つ時間をただ過ごすだけ。

やがて鼓動の響きが遠くなったかと思えば、ひときわ狭い隙間をくぐり抜け、寸分の間中空を漂ったのち、ぼちちゃんと水音が跳ねて体が沈む。

果たしてそこは、ナツミの胃の中だった。飲み込んだ食物をすべて溶かす強酸性の胃液は、肌に触れただけで激しい痛みを伴う。

何もかも視界が歪んで見えた。もう、外の世界へ戻ることはできない。

「はは………あはは………」

先に飲み込まれていった恭也の姿も無かった。おそらくは、もう溶かされたか、更に奥部へと引きずり込まれたのだろう。

そうなれば、後は時間の問題だった。消失へのカウントダウンはもうす

ぐゼロになる。

もし目指すならあと一つの出口しかないが、そこへ辿り着くには幾つもの消化器を潜り抜けなければならない。

胃液、すい液、腸液……どれも小さな小さな体を溶かすには強力すぎる消化液だ。

ああ、また意識が朦朧としてきた。一瞬だけ視界が白く暗転して、世界が永遠の闇に閉ざされる。

それから二度と、目覚めることはなかった。

「胃の中に入ったら絶対戻れないのに。二人ともおばかさん達」

胃液の逆流を防ぐ噴門は、小さき二人の奇跡の脱出劇を阻止するのに十分すぎた。

ナツミの小さな喉元を過ぎた時から、もう彼らの運命は決まってしまったのである。

「ふふ、私のお腹の中に入っちゃえば、もうおしまい。諦めて消化されちゃってね」

妖艶な微笑みを浮かべて胸の下をゆっくり撫でながら残りの唾液を飲み干すと、卒業アルバムの写真にバツ印を二つ書き加えて、塗り潰すのであった。

××県の山奥には
封印が施された霊洞があり

遙か昔に陰陽師の修行所として
使われていたらしい

道中の獣道すら整備されておらず

オカルト好きの間では半ば
都市伝説かのように語られている

どの霊媒師に頼んでも
治らなかった親友

もはや私が
どうにかするしかない

ボォ

ズ
ズ



わあ
久しぶりの人間さんだあ！

また随分と弱そうなのが来たな。
迷い込んだ素人か何かか？



えへへ人間さん？

ここに來たってことは、
力が欲しいんだよね？

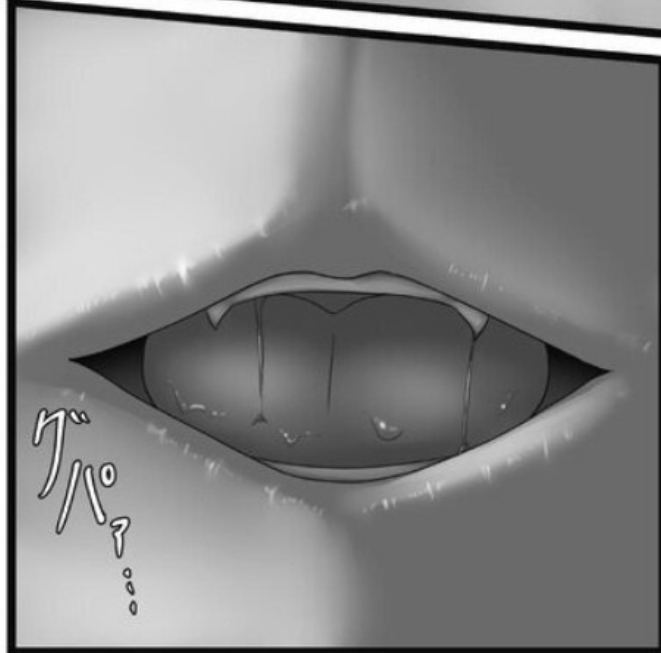
ゴゴゴ

んふふ



あつ……あのつ……
その……

今回は私が
最初でいいよね？



グハァ……

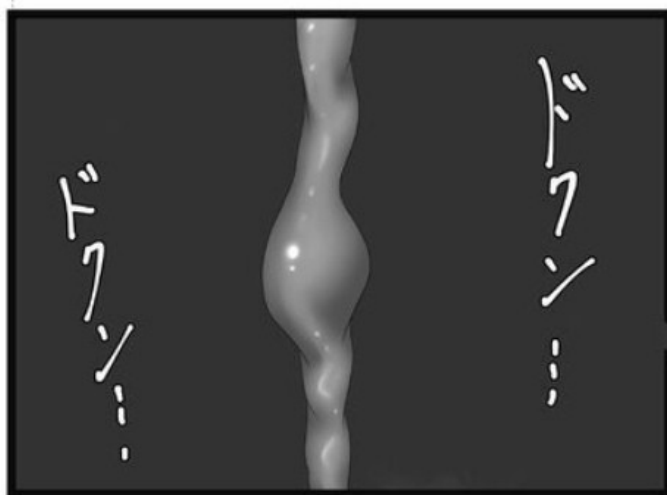
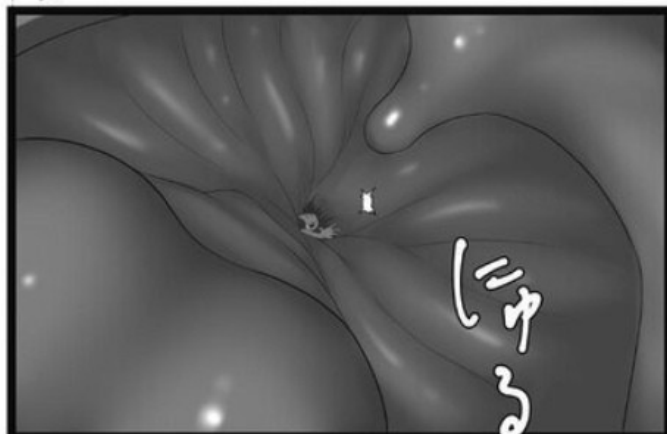
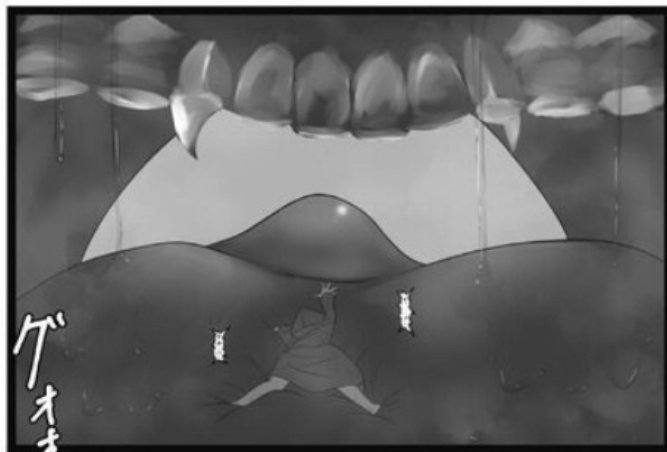


はい



ぐにゃん

わあああああああ



やさしく揉んであげるから
力を抜いて身を委ねてね♪

にゅるるる

もにゅんっ♡

にゅるん♡

むにゅん♡

ギョッ♡

ギョッ♡

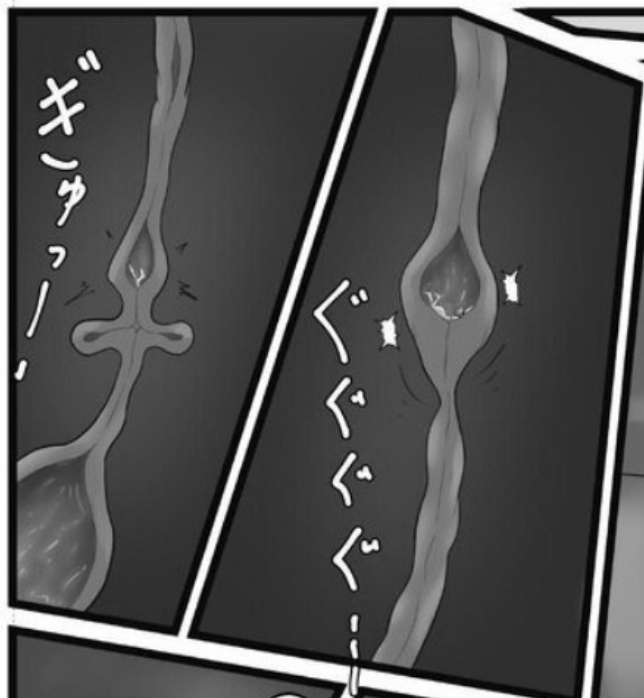
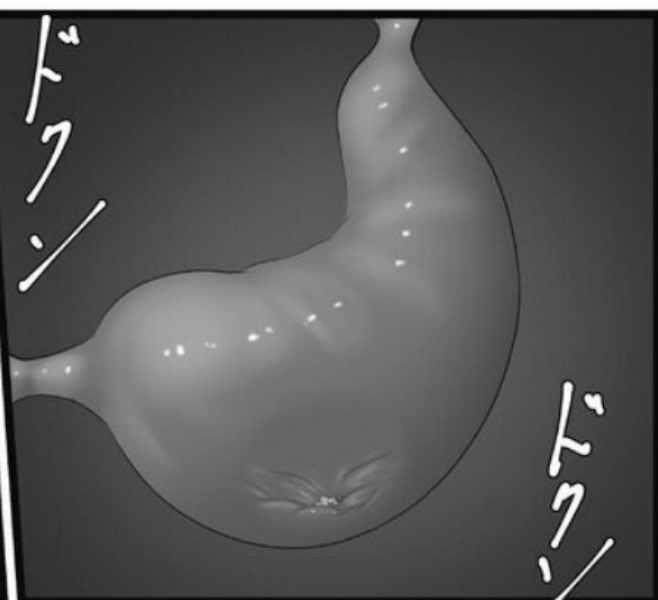
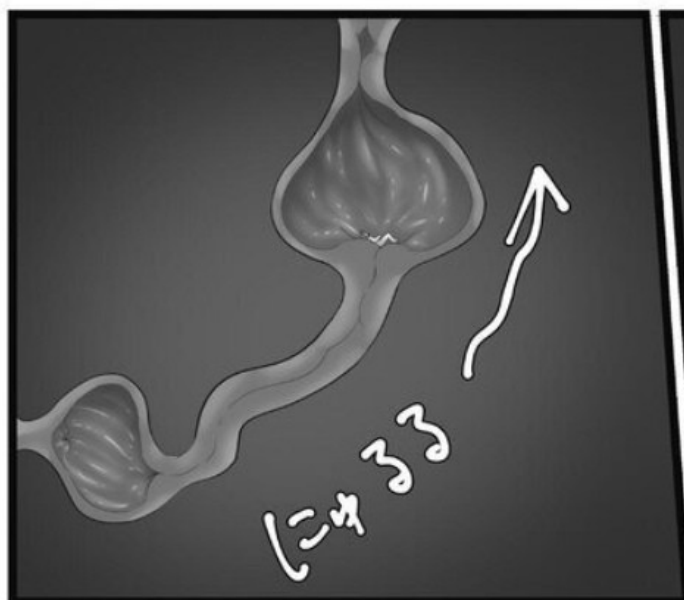
にゅるる♡
むにゅん♡

にゅちゅ
くちゅ

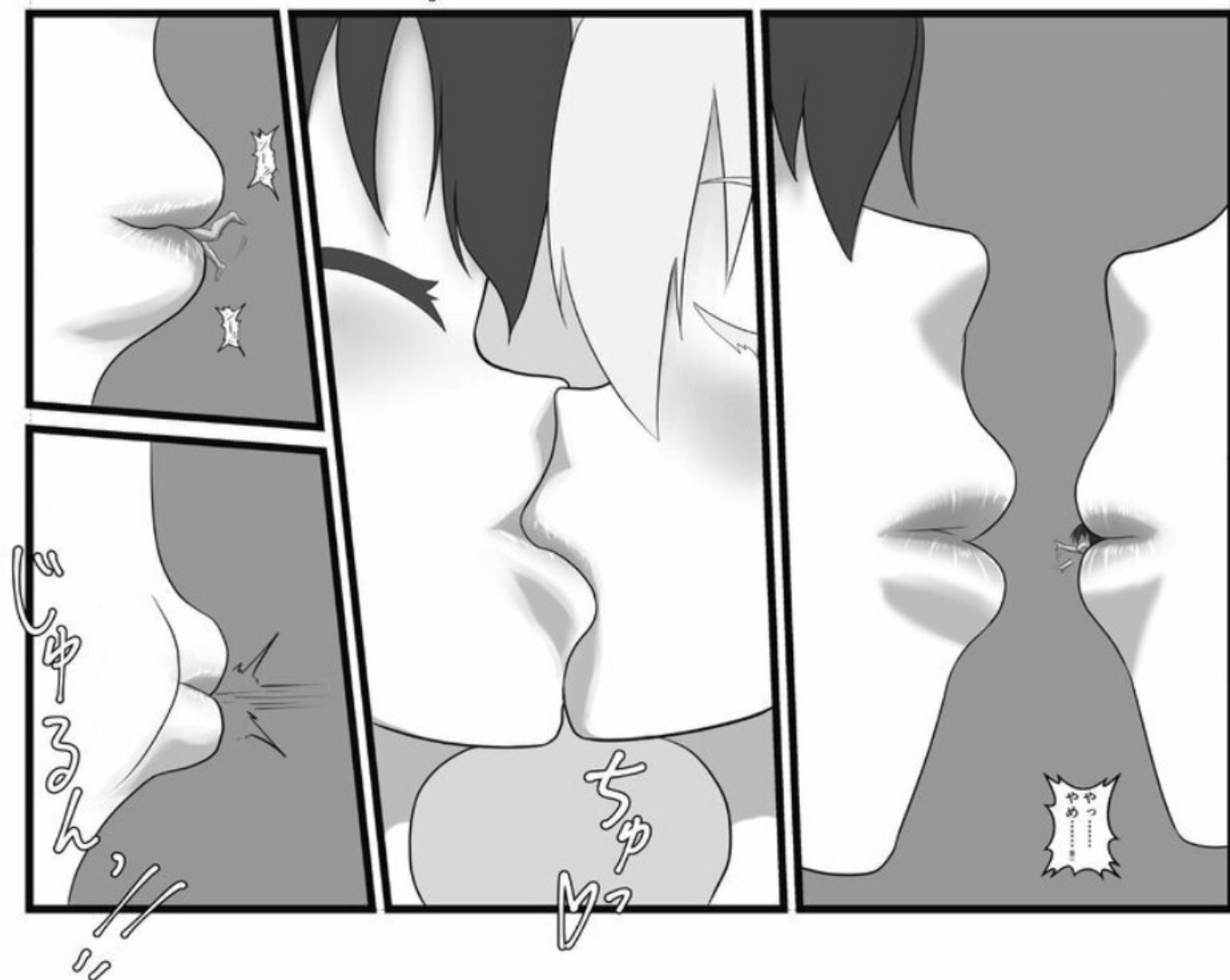
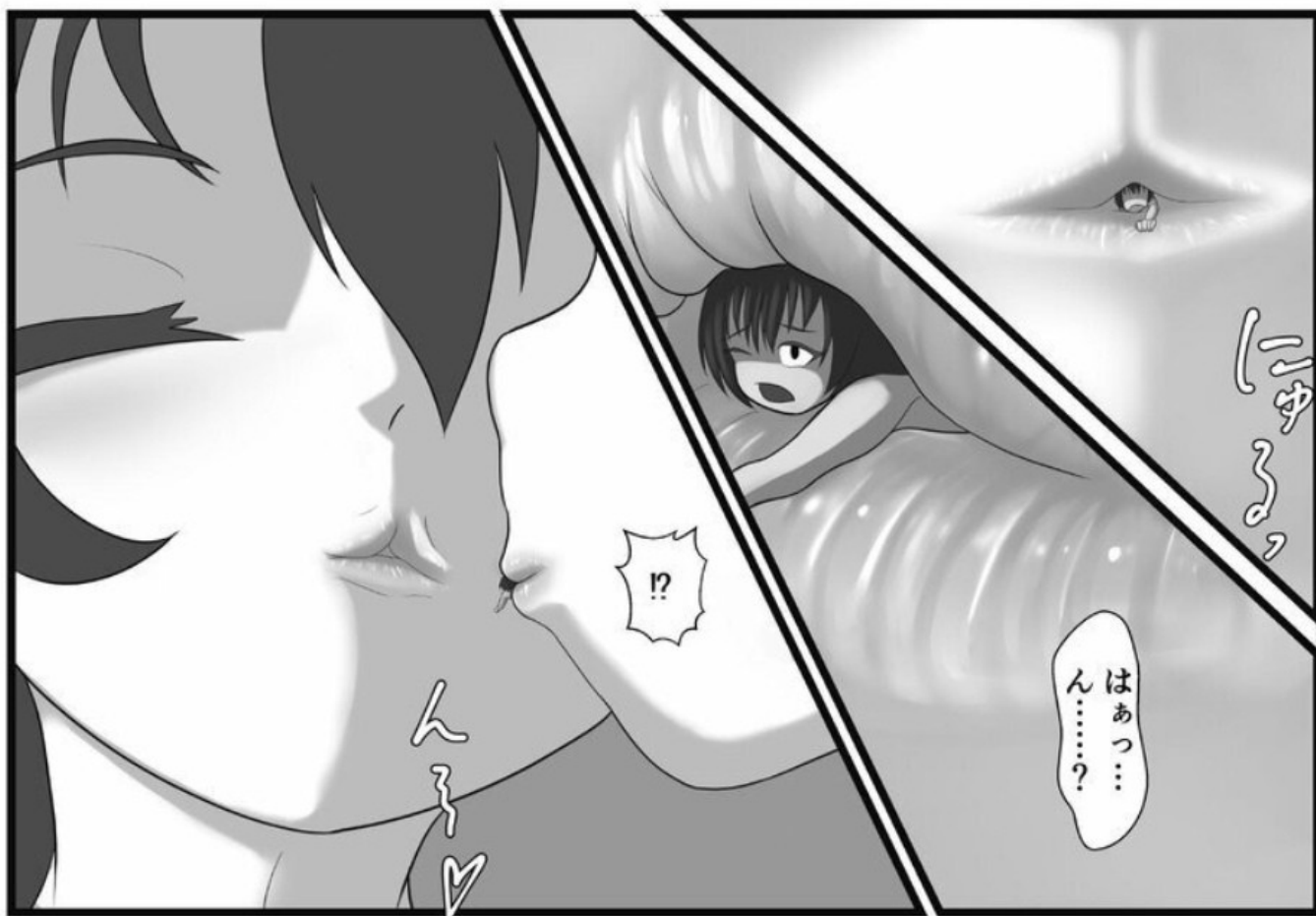
ひっ……ひっ!!

むくっ

むく

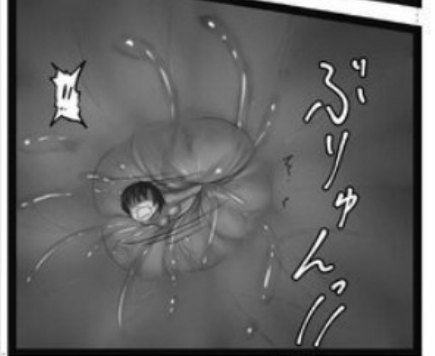
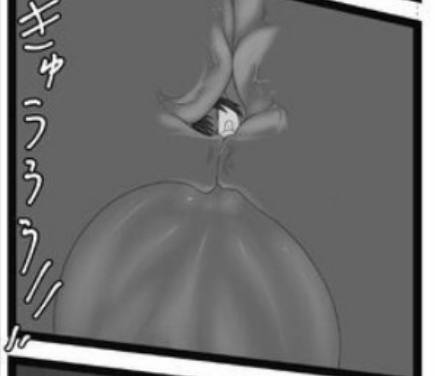


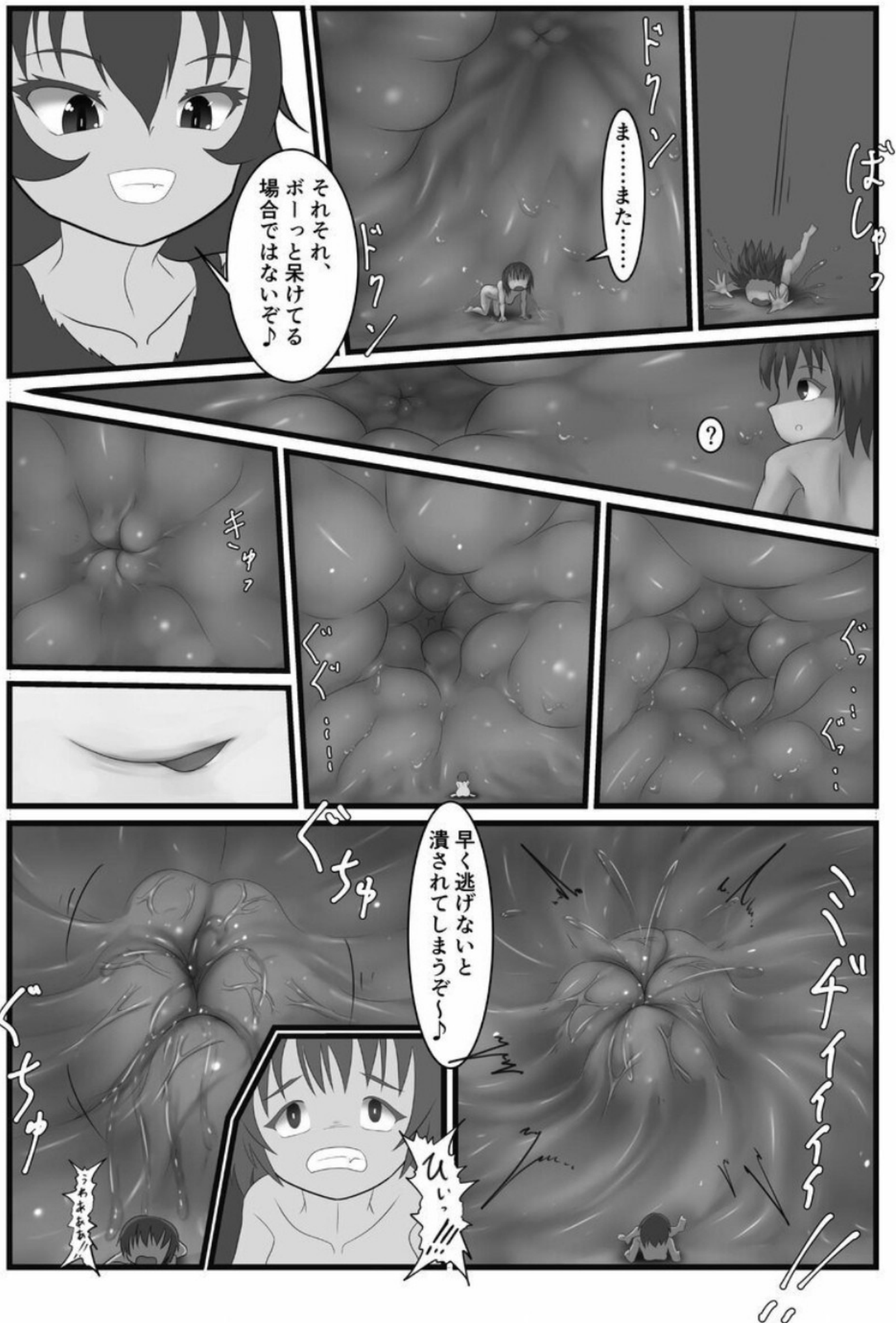
ゲホッ!
ゲホッ!

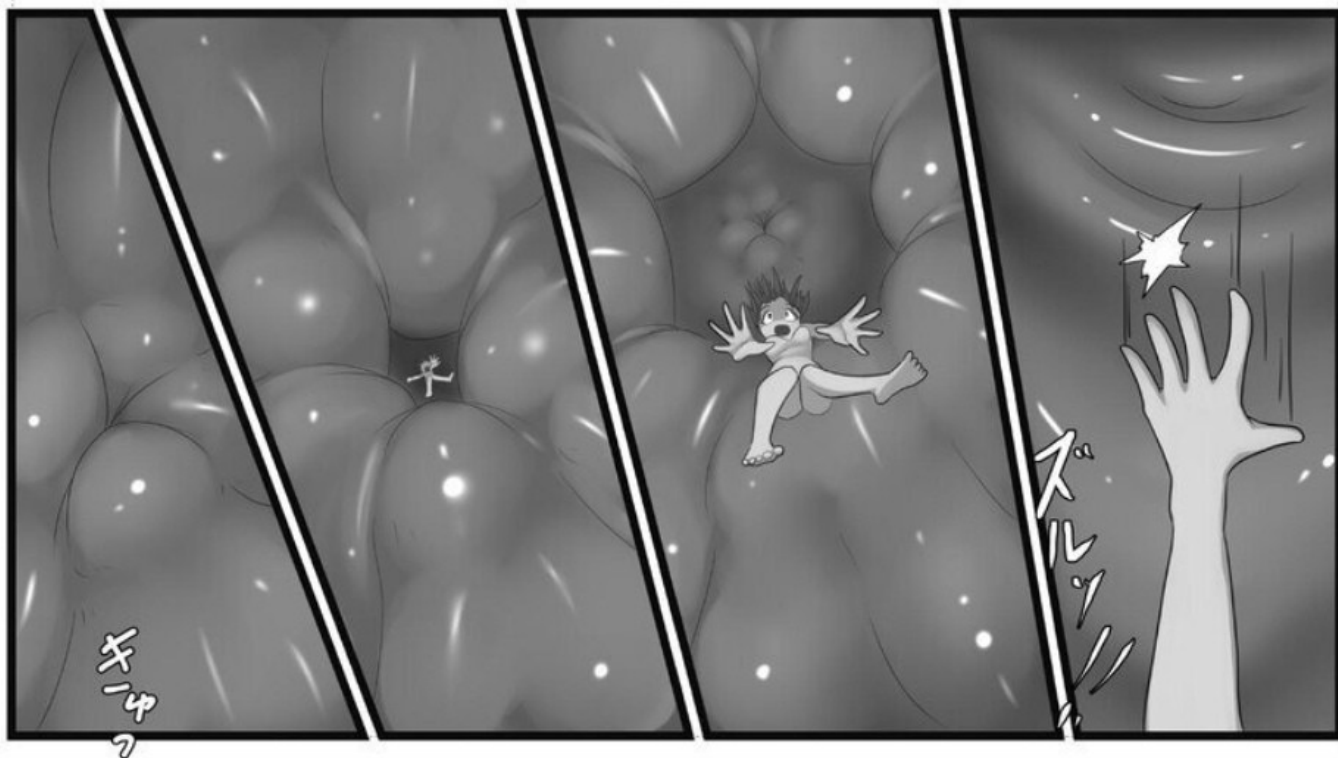
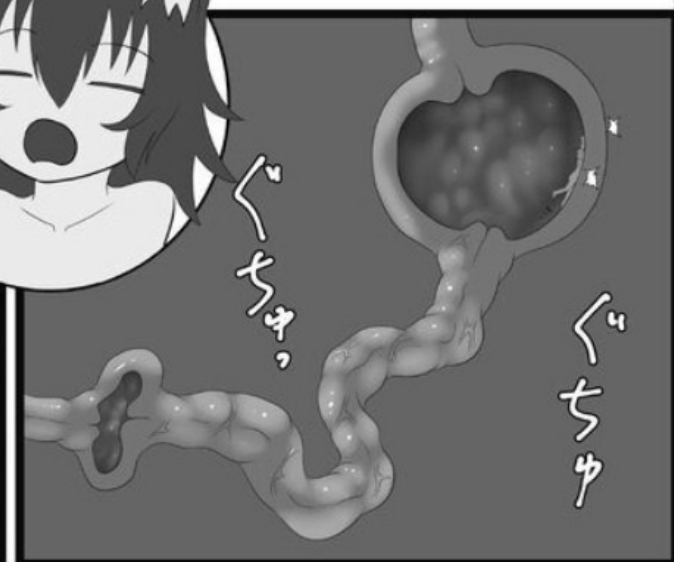
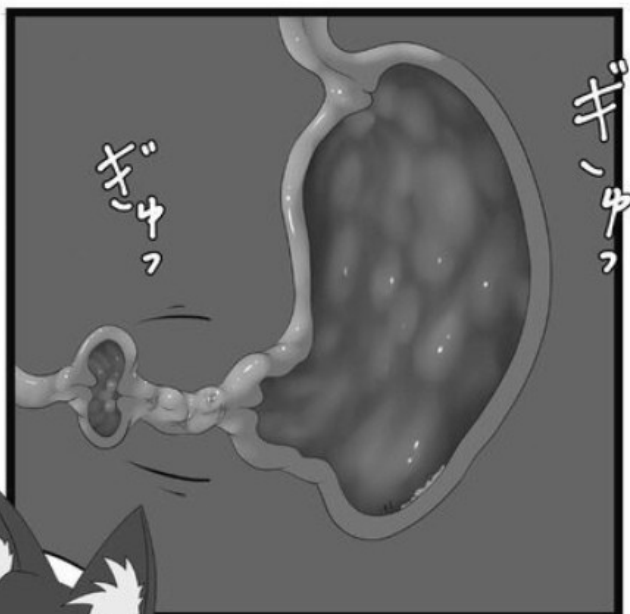


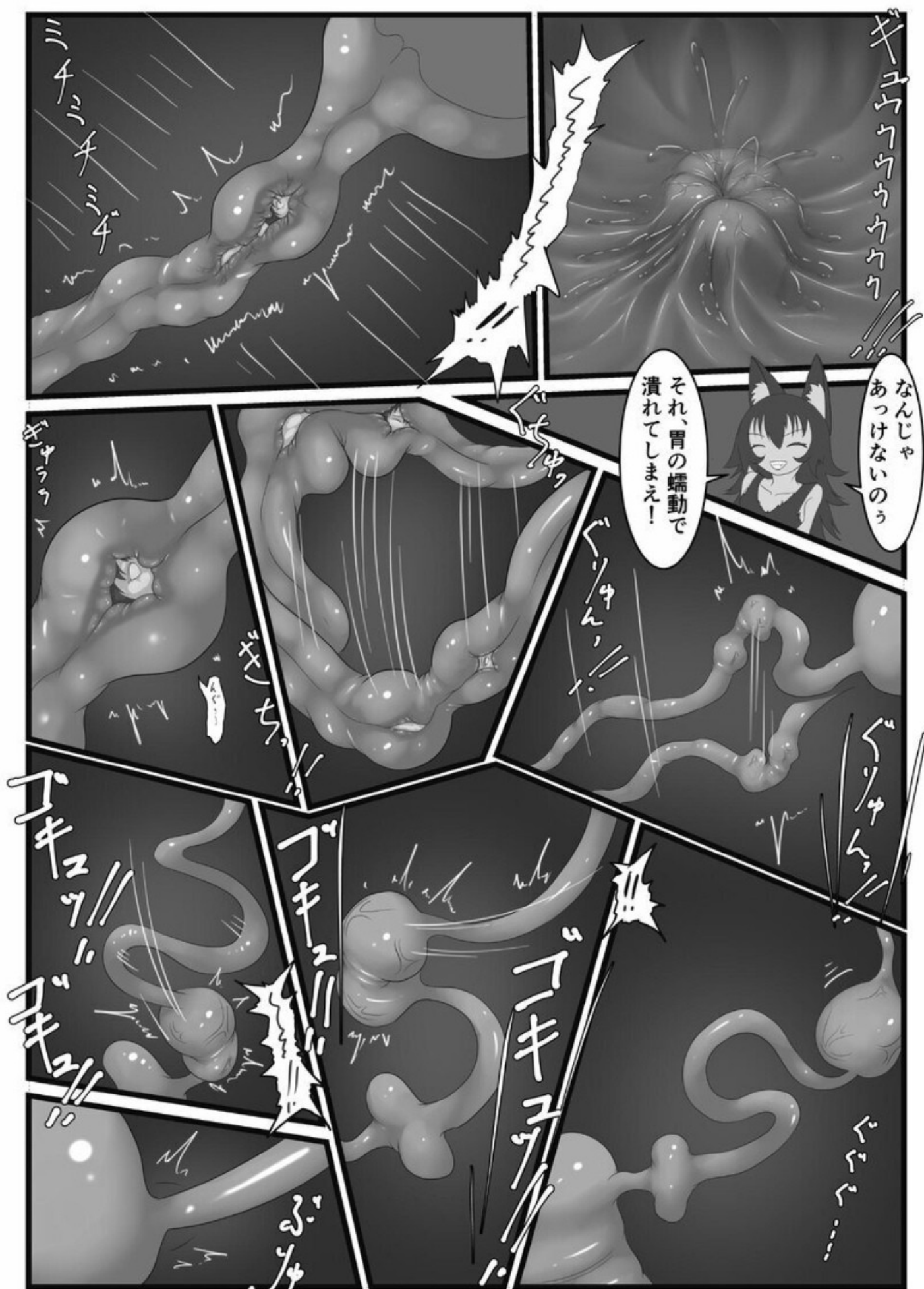


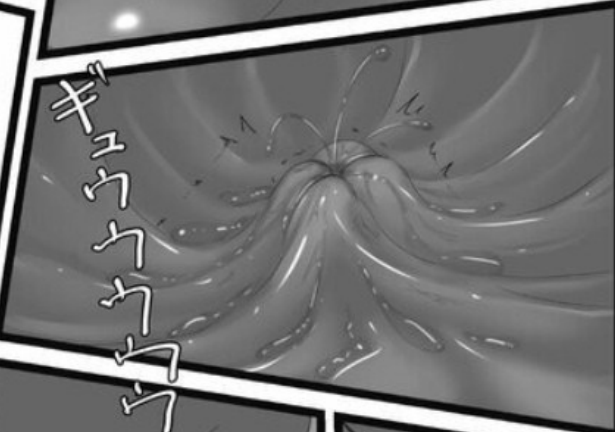
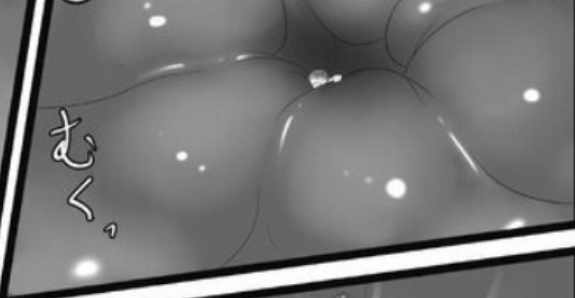
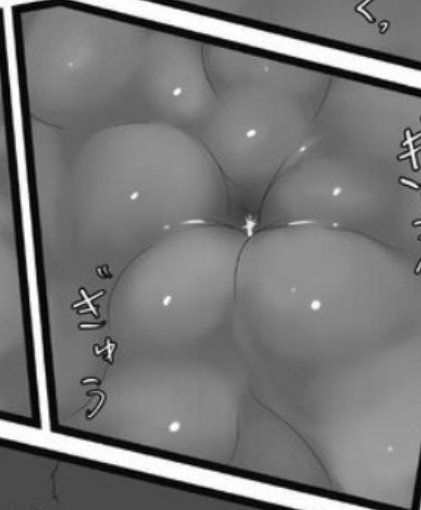
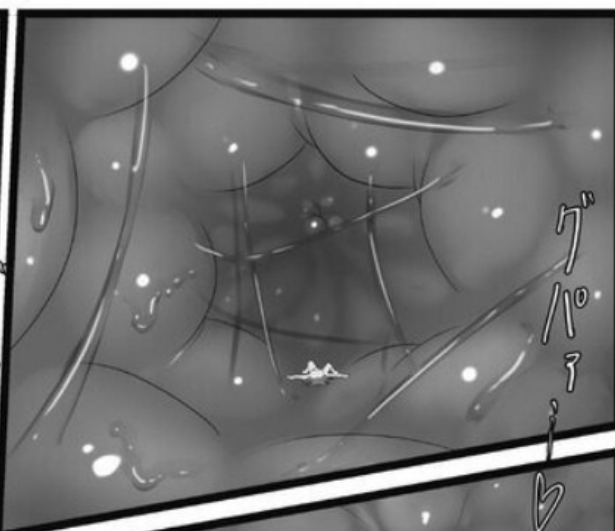
ククク……妾の中は
ユキのと違って激しいぞ♪

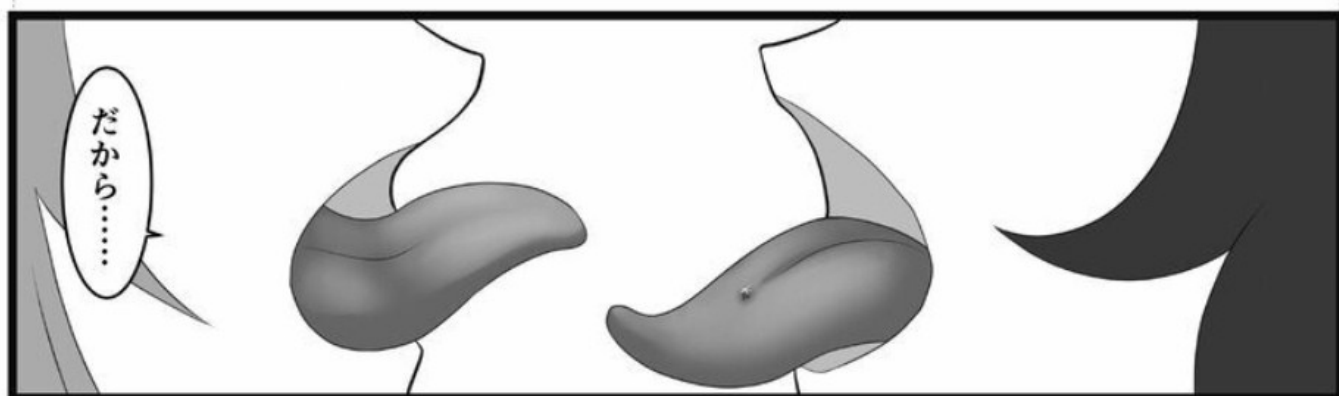


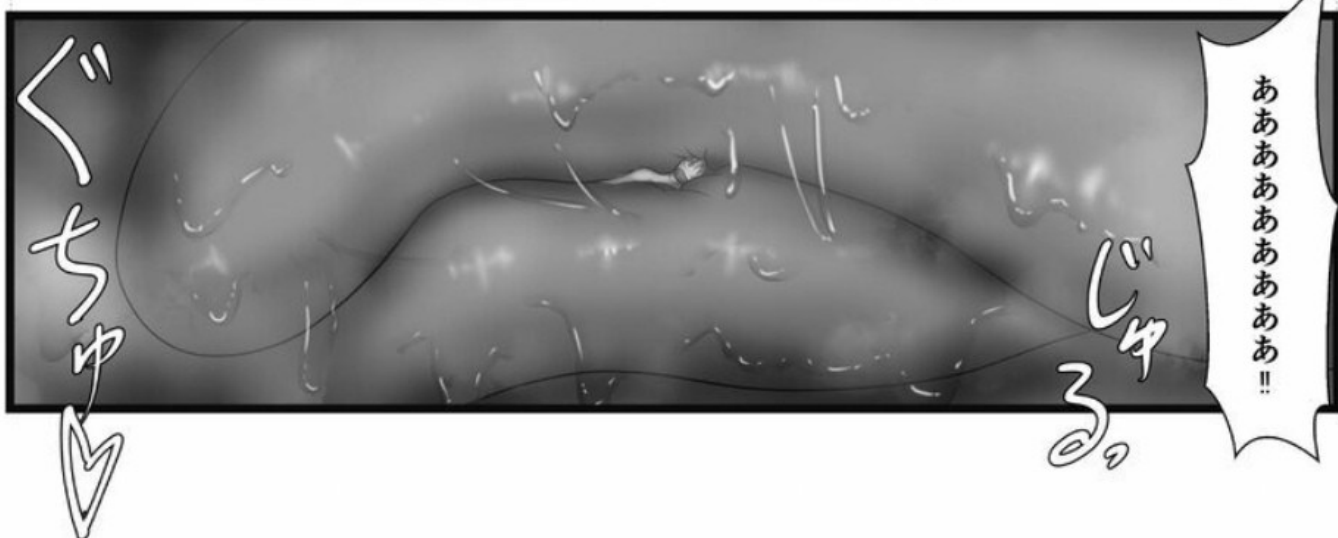


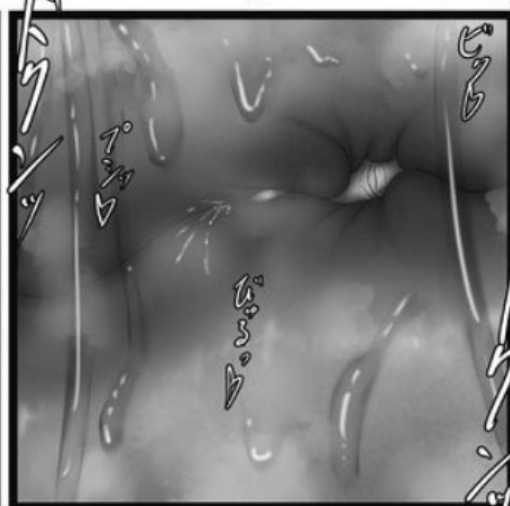
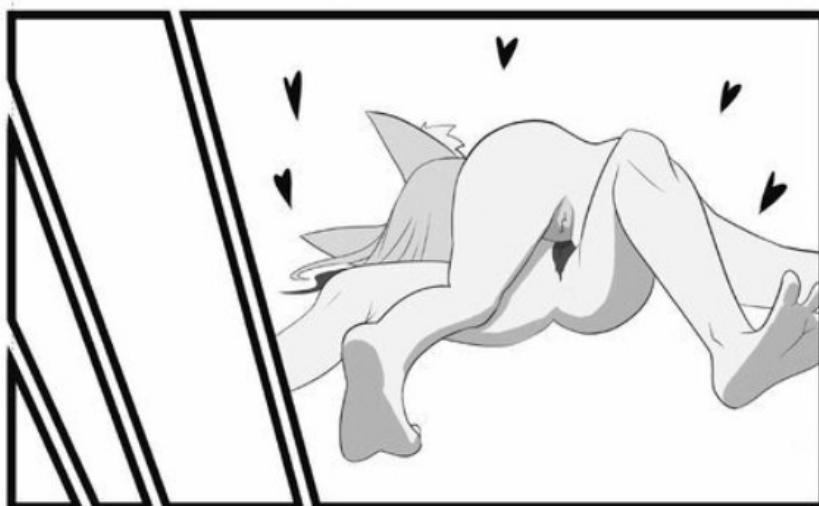
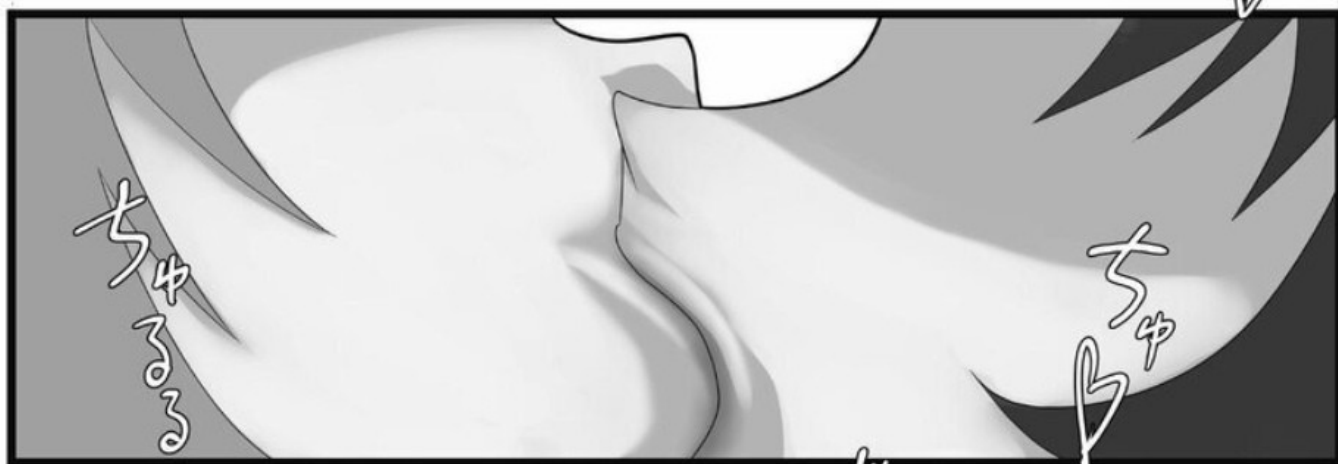
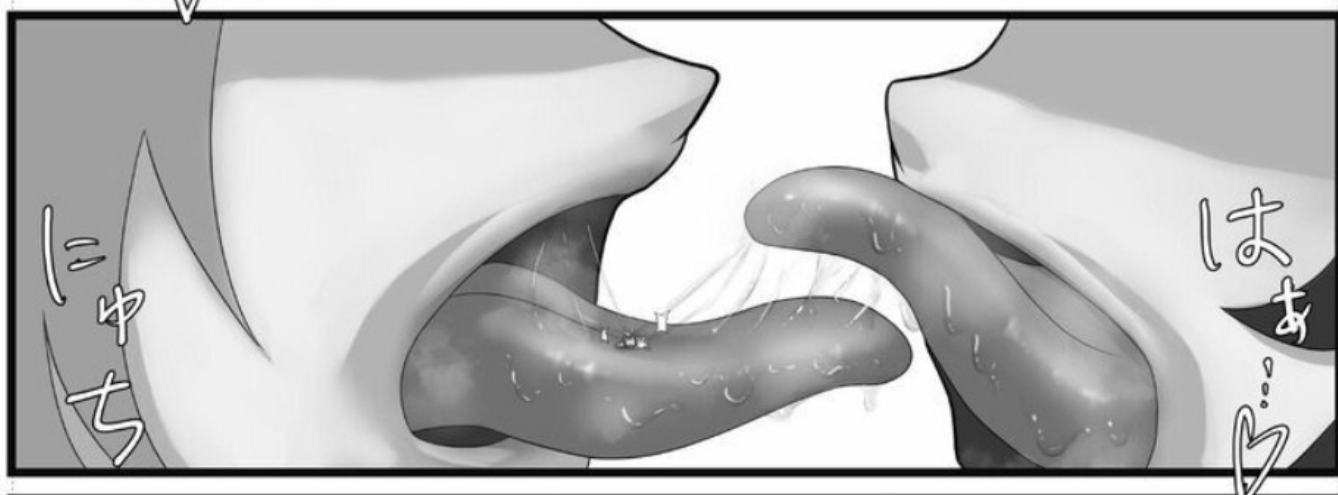


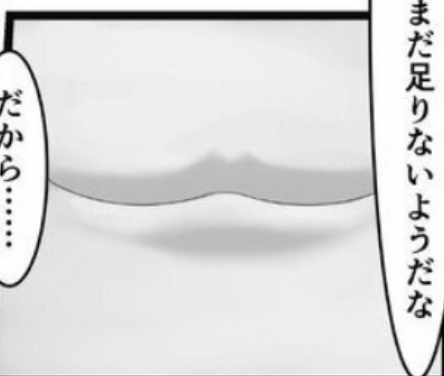












1ヶ月後

ククク、どうした人間？
用が済んだなら
とっとと帰ったらどうだ？

もう妖力は十分手に入ったでしょー？

それだけの力があれば

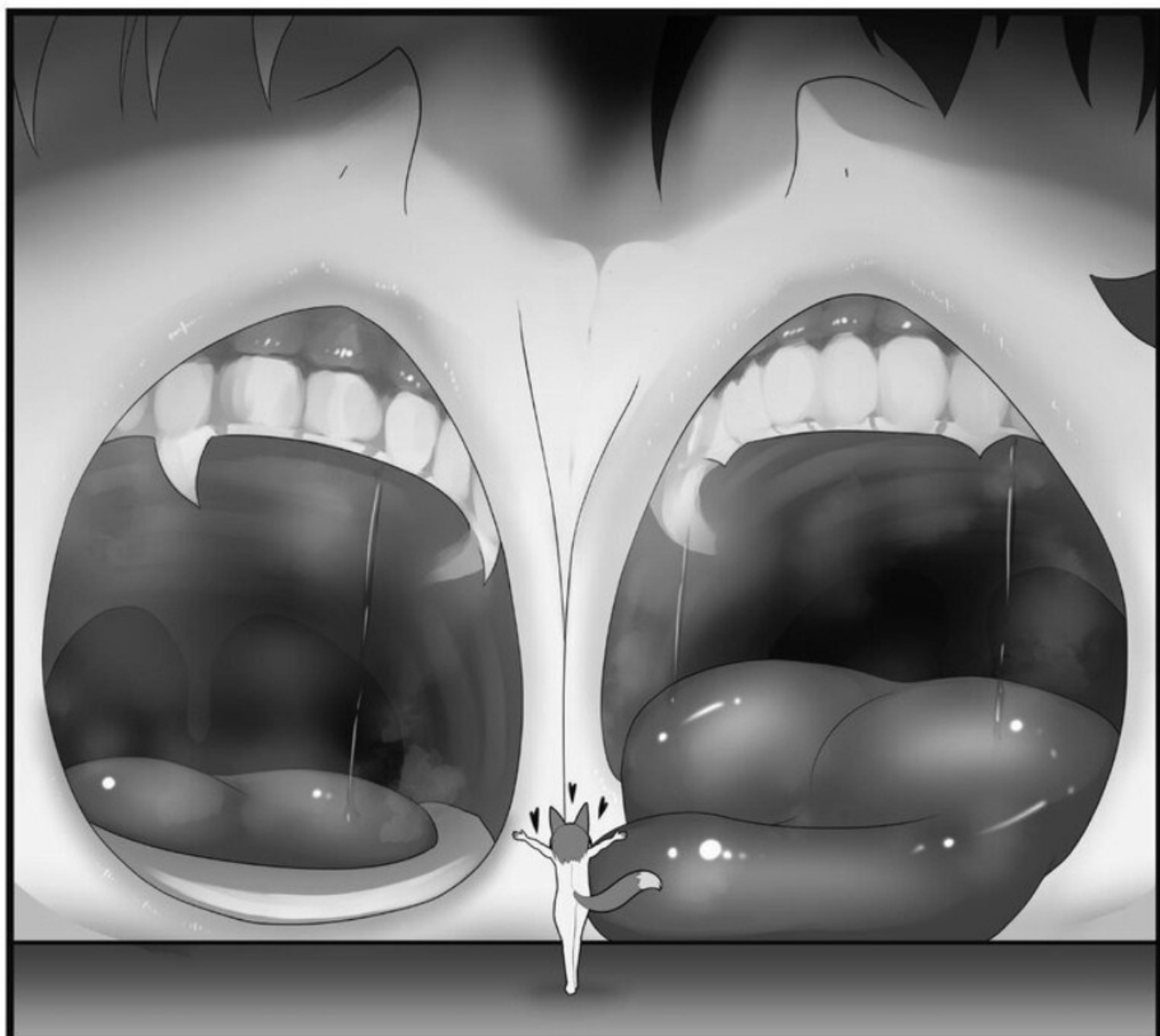
なんでもできるよー

食べて♡

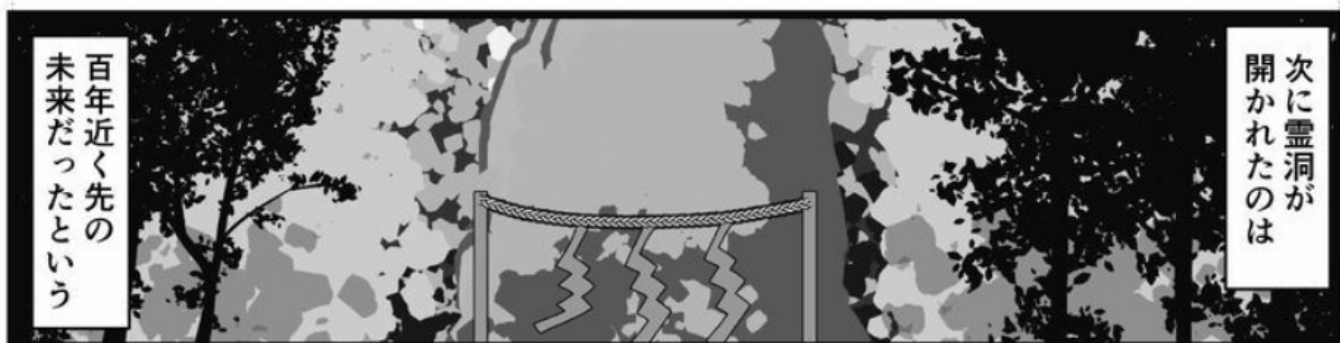
もう食べられなくても
いいんだよー

何を言っておる！
あれほど嫌がっていたではないか！

仕方ないな
本人が言うなら
仕方ないよね



「いただきます」



次に霊洞が
開かれたのは

百年近く先の
未来だったという

皆様のお陰で早四年…

■奥付

腸内会誌 4-L

制作・編集：腸内会(チップス)

発行：2022/08/07

連絡先：chipsvl2@gmail.com

当作品を無断でインターネット上にアップロード、および内容を
閲覧・ダウンロード可能な状態にすることを禁じます

No reproduction or republication without written permission.

本站内图文请勿随意转载 / 本站内圖文請勿隨意轉載

게시물 무단 전재 복사 배포 등을 금지합니다

Gebrauchen die Bilder ohne Genehmigung verboten.